

以下については、公開対象から除いています。

- 『埼玉古墳群発掘調査報告書 第七集 別冊 奥の山古墳 瓦塚古墳 中の山古墳 自然科学分析編』
- 一 瓦塚古墳の分析
  - 二 中の山古墳の分析
  - 三 埼玉古墳群出土埴輪の蛍光×線分析

埼玉古墳群発掘調査報告書 第七集

奥の山古墳  
瓦塚古墳  
中山古墳

埼玉県教育委員会



1. 埼玉古墳群南群 中の山古墳・奥の山古墳・鉄砲山古墳・瓦塚古墳（南上空から）



2. 中の山古墳出土 須恵質埴輪壺及び須恵質朝顔形円筒

## 序

埼玉県名発祥の地といわれる行田市埼玉には、八基の前方後円墳と一基の大形円墳からなる埼玉古墳群があります。九基もの大形古墳が狭い範囲に集中して築かれているという全国でも珍しい例として、昭和十三年、国の史跡として指定され、以来、地元の方々によつて大切に保存・管理されてきました。

埼玉県では、昭和四十二年から全国にさがけてこの地域を「さきたま風土記の丘」として環境整備を開始し、現在まで継続して整備を図つてまいりました。風土記の丘の整備に当つては、古墳の実態を把握するための発掘調査を実施し、その調査に基づいて進めております。

また、調査の成果は適宜公表しており、昭和五十九年度から、五か年計画の国庫補助事業「さきたま風土記の丘発掘調査・整理事業」の成果をまとめた、「埼玉古墳群発掘調査報告書」もすでに六巻を刊行してまいりました。

この事業の最終年度である本年度は、未整理として残されていた奥の山古墳、瓦塚古墳、中の山古墳を取りあげることになりました。

今回の調査の主な成果としては、奥の山古墳が他の古墳と異なり一重の堀を持つと推定されたこと、瓦塚古墳の墳丘東側の基底ラインが確認されたこと、中の山古墳から全国的に見ても例のない須恵質の埴輪壺が多量に出土したなどがあり、埼玉古墳群の実態解明に欠かせない事実が含まれております。

本書はこれらの成果を含め、調査の詳細をまとめたものですが、埼玉古墳群の整備については、今後もこれらの調査成果を踏まえて計画的に進めてまいりたいと存じます。また、本書が多くの県民や、学校・関係機関の方々から本書の刊行にいたるまで御指導、御協力いただきました文化庁、関係各機関並びに関係者各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成元年三月

埼玉県教育委員会教育長

荒井修二

# 目次

序	
例言	
調査の組織	
Ⅰ 調査の経過	1
一 調査に至る経過	1
二 調査の経過	2
(一) 奥の山古墳	2
(二) 瓦塚古墳	3
(三) 中の山古墳	5
Ⅱ 古墳群の立地と環境	7
Ⅲ 奥の山古墳の調査	11
一 遺構	11
二 遺物	14
三 小結	29
(一) 奥の山古墳の墳丘と周堀について	29
(二) 奥の山古墳の埴輪について	30
Ⅳ 瓦塚古墳の調査	31
一 遺構	31
二 遺物	39
遺物観察表	60
三 小結	70
(一) 瓦塚古墳の墳丘と周堀について	70
(二) 瓦塚古墳の円筒埴輪について	73
(三) 瓦塚古墳の須恵器について	74
Ⅴ 中の山古墳の調査	75
一 遺構	75
二 遺物	89
遺物観察表	108
三 小結	112
(一) 中の山古墳の墳丘と周堀について	112
(二) 中の山古墳の須恵質埴輪壺について	114
Ⅵ まとめ	116

# 挿 図 目 次

第1図 大宮台地と前方後円墳の分布……………7 第2図 埼玉古墳群と周辺の遺跡……………8 第3図 埼玉古墳群と周辺の地形……………9 第4図 奥の山古墳測量図及びトレンチの位置……………12 第5図 奥の山古墳土層断面図……………13 第6図 奥の山古墳表採(昭和63年度)遺物……………19 第7図 奥の山古墳出土遺物1……………21 第8図 ……22 第9図 ……23 第10図 ……24 第11図 ……25 第12図 ……26 第13図 ……27 第14図 ……28 第15図 瓦塚古墳と埼玉古墳群……………32 第16図 瓦塚古墳測量図及び各調査区的位置……………33 第17図 瓦塚古墳発掘区全測図……………35 第18図 瓦塚古墳土層断面図1……………36 第19図 ……37 第20図 瓦塚古墳遺物出土位置図……………38 第21図 瓦塚古墳出土遺物1……………43	第22図 ……44 第23図 ……45 第24図 ……46 第25図 ……47 第26図 ……48 第27図 ……49 第28図 ……50 第29図 ……51 第30図 ……52 第31図 ……53 第32図 ……54 第33図 ……55 第34図 ……56 第35図 ……57 第36図 ……58 第37図 ……59 第38図 ……60 第39図 瓦塚古墳想定復原図……………71 第40図 中の山古墳と埼玉古墳群南群……………76 第41図 中の山古墳測量図及び調査区的位置……………77 第42図 中の山古墳調査区平面図1……………78 第43図 ……79 第44図 中の山古墳土層断面図1……………80
---	---

第45図	◇	2	81
第46図	◇	1	82
第47図	◇	2	83
第48図	◇	1	84
第49図	◇	2	85
第50図	◇	3	86
第51図	◇	1	93
第52図	◇	2	94
第53図	◇	3	95
第54図	◇	4	96
第55図	◇	5	97
第56図	◇	6	98
第57図	◇	7	99
第58図	◇	8	100
第59図	◇	9	101
第60図	◇	10	102
第61図	◇	11	103
第62図	◇	12	104
第63図	◇	13	105
第64図	◇	14	106
第65図	◇	15	107
第66図	◇		113
第67図	◇		115

図版一	一 埼玉古墳群南群全景空中写真／同南群空中写真
図版二	奥の山古墳第1トレンチ／奥の山古墳全景（現址）
図版三	奥の山古墳造り出し部／同（墳丘上から）
図版四	奥の山古墳出土遺物1／同2
図版五	奥の山古墳出土遺物3／同4
図版六	瓦塚古墳空中写真（全景）／同（調査区）
図版七	瓦塚古墳くびれ部拡張区／同遺物出土状況
図版八	瓦塚古墳第1トレンチ全景／同遺物出土状況
図版九	瓦塚古墳第2トレンチ土層／同第3トレンチ周堀立ち上がり部
図版一〇	瓦塚古墳出土遺物1／同2
図版一一	瓦塚古墳出土遺物3／同4
図版一二	瓦塚古墳出土遺物5／同6
図版一三	中の山古墳空中写真／同
図版一四	中の山古墳第1トレンチ全景／同（内堀）
図版一五	中の山古墳第1トレンチ内堀の遺物出土状況／同第2トレンチ
図版一六	中の山古墳A区／同B区
図版一七	中の山古墳出土遺物1
図版一八	中の山古墳出土遺物2
図版一九	中の山古墳出土遺物3
図版二〇	中の山古墳出土遺物4
図版二一	中の山古墳出土遺物5／同6

## 図版目次

## 例 言

一 本書は埼玉県行田市埼玉一三四四ほかには所在する埼玉古墳群奥の山古墳、及び瓦塚古墳（行田市埼玉五二四七ノ二ほか）、並びに中の山古墳（行田市埼玉一三四七ほか）の周堀部分についての発掘調査報告書である。

二 奥の山古墳の調査は、さきたま風土記の丘建設に先立って、昭和四二年度に、埼玉県教育委員会が主体となり、実施した。

三 瓦塚古墳及び中の山古墳の調査は、文化庁の国庫補助を受けて、埼玉県教育委員会が主体となり、埼玉県立さきたま資料館が実施した。

四 各調査の実施期間、担当者は次のとおりである。

。奥の山古墳 昭和四二年三月一日～三月二十五日

。瓦塚古墳 昭和六一年八月二十五日～一〇月二三日 担当者 金井塚良

一・横川好富・小久保徹・杉崎茂樹・若松良一・田中正夫

。中の山古墳 昭和六二年八月二四日～一〇月一日 担当者 金井塚良一・中島利治・小久保徹・杉崎茂樹・若松良一・田中正夫

五 各事業の組織は別表に掲げるとおりである。

六 出土品の整理及び本書の作成は、昭和六三年度に、埼玉県立さきたま資料館が行い、主に若松良一が当たり、谷井彪・駒宮史朗・田中正夫・太田博之の協力を得た。

七 本書の執筆は各文末に記したとおりであるが、全体については谷井彪が加除筆を行い、中島利治が監修した。

八 写真撮影は、遺構は各調査担当者が、遺物については、谷井彪が行った。

九 花粉・珪藻・テフラ・胎土分析は（株）パリオ・サーベイに、また、空中写真測量図の作成及び調査区の基準点、水準点測量は（株）中央航業に、気球による空中写真撮影は（株）太陽測量とサンシャイン航業に委託した。

一〇 墳輪の蛍光X線分析については、奈良教育大学の三辻利一先生にお世話になった。

一一 自然科学的分析成果については、別冊『自然科学分析編』としてまとめた。

一二 発掘調査から整理報告に至るまで左記の方々及び各機関から御指導、御協力を賜った。

新井 瑞	飯塚 武	一瀬 和夫	今泉 泰之
岩崎 卓也	梅沢太久夫	大塚 初重	岡本 幸男
小野山 節	亀井 正道	川西 宏幸	熊倉 実
栗原 文蔵	車崎 正彦	小林 義孝	斉藤 国夫
酒井 清治	坂本 和俊	沢出 晃悦	寺社下 博
菅谷 浩之	鈴木 重治	鈴木 徳夫	滝沢 誠
田口 一郎	辰巳 和弘	田中 一郎	塚田 良道
中島 洋一	根岸徳太郎	橋本 博文	藤川 繁彦
増田 逸朗	三ツ木貞夫	森 浩一	山崎 武
柳田 敏司	文化庁	行田市教育委員会	



# 調査の組織

奥の山古墳の調査(昭和四二年度)

主体者 埼玉県教育委員会

教育 長 峯岸 政之助

教育次長 中谷 幸次郎

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局社会教育課

課 長 江袋文男

社会教育主事 萩原康宏

課長補佐 伊藤三蔵

庶務係長 成野芳三

同 堀江 清

同 渡辺 国子

同 柳田 敏司

文化財係長 持田まり子

同 木部 良樹

同 早川 智明

同 吉川 國男

同 栗原 文藏

同 増田 逸朗(県道跡調査会)

同 伊藤 和彦(國學院大学)

同 駒宮 史朗

飯塚 卓二

今泉 泰之

佐野 主水

銀屋 恒夫

水田 亮

斉藤 和子

生形 和枝

落合 静男(埼玉大学)

菊地 啓博

猪野 幸男

金田 智恵子

中田 定男

中沢 貞治(立正大学)

新井 好一

新井 秋雄(明治大学)

瓦塚古墳の調査(昭和六一年度)

主体者 埼玉県教育委員会

教育 長 荒井 修二

指導部長 五十嵐 孝仁

教育次長 橋本 昭

同 岩田 敏

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課 長 岩田 明

課長補佐 早川 智明

同 森田 嘉一

庶務係長 持田 紀男

主 査 小林 文江

庶務係 井田 秀夫

埋蔵文化財 係長 梅沢 太久夫

文化財係 井上 肇

同 鈴木 秀雄

事務局(発掘調査) 埼玉県立さきたま資料館

指導部 兼 館長 金井 塚良一

副 館長 横川 好富

庶務課長 鈴木 二三男

庶務係 木村 なを子

同 田中 由夫

同 川崎 栄一

学芸課長 小久保 徹

学芸員 岡本 一雄

同 杉崎 茂樹

同 若松 良一

同 田中 正夫

同 嘯 託 金子 芳一

奥の山古墳の調査(昭和六二年度)

主体者 埼玉県教育委員会

教育長 荒井修二

指導部長 五十嵐 孝仁

指導次長 橋本 昭

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課長 百瀬陽二

課長補佐 横川好富

同 森田嘉一

庶務係長 保永清光

庶務係長 井田秀夫

埋蔵文化財係長 梅沢 太久夫

文化財係 井上 肇

同 書上元博

事務局(発掘調査) 埼玉県立さきたま資料館

兼指導部参事 金井塚 良一

副館長 中島利治

庶務課長 鈴木二三男

庶務係 木村なを子

同 田中由夫

同 川崎 栄一

学芸課長 小久保 徹

学芸員 柳 正博

同 杉崎 茂樹

同 若松 良一

同 田中正夫

嘱託 金子芳一

発掘参加者 太田博之

瀧沢 誠(筑波大学)

中山浩彦(國學院大学)

藤川智之(同志社大学)

日高 慎

青柳泰介

深澤 敏

整理報告(昭和六三年度、各古墳とも)

主体者 埼玉県教育委員会

教育長 荒井修二

指導部長 岩田 敏

指導次長 藤井 均

同 小池 昭彦

事務局(企画・調整) 埼玉県教育局文化財保護課

課長 百瀬陽二

課長補佐 古市芳之

同 枡原 嗣雄

同 横川好富

庶務係長 保永清光

庶務係 小野正博

埋蔵文化財係 増田逸朗

文化財係 井上 肇

同 書上元博

事務局(整理報告) 埼玉県立さきたま資料館

館長 角田藏夫

副館長 中島利治

主査 駒宮史朗

庶務課長 鈴木二三男

庶務係長 松本幸子

同 田中由夫

同 川崎 栄一

学芸課長 谷井 彪

学芸員 柳 正博

同 若松 良一

同 田中正夫

嘱託 金子芳一

臨時職員 太田博之

萩野敏子

加藤春江

河辺美津江

鈴木須美江

浜中紀子

整理参加者 中山浩彦(國學院大学)

日高 慎(同志社大学)

# 1 調査の経過

## 一 調査に至る経過

埼玉古墳群は、国宝金錯銘鉄剣の出土で名高い稲荷山古墳や、武蔵最大の前方後円墳二子山古墳をはじめとする大小八基の前方後円墳と日本最大の円墳丸墓山古墳を中核として形成された古墳群である。古墳の規模は地方の豪族の墓としては出色であり、密集して築造されていることに加えて、保存状態も良好であることから、昭和一三年八月八日付けの文部省告示で、国指定史跡となった。

その段階では、古墳の墳丘が指定されているだけで、周囲はのどかな田園風景となっていたが、昭和四〇年、文化庁は、史跡を地方に根ざした風土と一体化して保存、活用することを目的とした「風土記の丘建設」を打ち出した。埼玉県は、これを受けて、県名発祥の地に所在する埼玉古墳群を史跡公園として整備することを決定した。

今回報告する奥の山古墳は、さきたま風土記の丘の整備の一環として、周堀を復原して、見学に供するために、トレンチ発掘を実施したものである。このほか、稲荷山古墳と二子山古墳も発掘調査が実施され、その成果をもとに周堀の復原がなされている。

昭和五四年度以降は、その他の古墳についても、今後の保存整備の基礎資料とするために、主に周堀部分の面的な発掘調査が進められてきた。その成果については、昭和五九年度以降、順次、報告書として刊行され、学術研究

にも寄与してきたところである。

瓦塚古墳については、昭和五四年度の第一次調査及び昭和五七年度の第二次調査の成果を報告書として既に刊行している。瓦塚古墳は、この発掘調査によって明らかになった点が多く、また、資料館に最も近接して見学者の多いことから、西側の周堀の整備が実施された。ところが、墳丘の東南側

埼玉県教育委員会による古墳群調査一覧

年度	古墳名(調査箇所)	報告書等
42	二子山、鉄砲山、奥の山古墳(周堀トレンチ調査)	『二子山古墳』(県教育委員会 昭和62年3月)
43	稲荷山古墳(主体部)	『埼玉稲荷山古墳』(県教育委員会 昭和55年11月)
48	稲荷山、丸墓山古墳(周堀トレンチ調査)	『丸墓山古墳』(県教育委員会 昭和63年3月)
49	梅塚、天王山等小円墳群及び二子山古墳(中庭造り出し部)	『埼玉1～7号墳』(県教育委員会 昭和63年3月)
54	瓦塚古墳(前方部南側周堀)	『瓦塚古墳』(県教育委員会 昭和61年3月)
54	鉄砲山古墳(前方部西側周堀)	『鉄砲山古墳』( 昭和60年3月)
55	二子山古墳(後円部北方外堀)	『二子山古墳』( 昭和62年3月)
56	愛宕山古墳(後円部東側及び前方部南側周堀)	『愛宕山古墳』( 昭和60年3月)
57	瓦塚古墳(墳丘西側周堀)	『瓦塚古墳』( 昭和61年3月)
58	鉄砲山古墳(後円部東側周堀)	『鉄砲山古墳』( 昭和60年3月)
59	将軍山古墳(前方部西方地区)	『将軍山古墳』( 昭和63年3月)
59	二子山古墳(前方部南方外堀)	『二子山古墳』( 昭和62年3月)
60	丸墓山古墳(北 南側周堀)	『丸墓山古墳』( 昭和63年3月)
61	瓦塚古墳(東側周堀)	今回報告
61	丸墓山古墳(墳丘南側墳部分)	別途報告
62	中の山古墳(北東周堀部分)	今回報告
62	丸墓山古墳(墳丘南側墳部分)	別途報告
63	瓦塚古墳(墳丘と周堀部分)	平成元年度以降も継続調査の予定

については削平された部分があり、この部分については、学術的調査を実施した上で、復原整備する必要があることから昭和六一年度に第三次調査が実施されたものである。活用にあたっては、第四集『瓦塚古墳』と併せて利用された。

中の山古墳は、調査の行われていない唯一の古墳であった。昭和六二年度の調査によって二重の周堀を有する古墳であることが確認され、さらに特殊な須恵質埴輪壺が出土している。今回、未報告分の三件も合わせて、これまでの成果を刊行しようとするものである。

(若松 良一)

## 二 調査の経過

### (一) 奥の山古墳

奥の山古墳の調査は、昭和四三年三月七日から開始された二子山古墳の墳形確認調査と併行して進められた。

すでに二子山古墳の調査もほぼ見通しのついた三月一五日から、調査の主力を奥の山古墳、鉄砲山古墳に展開し、両古墳の周堀確認調査に着手した。

奥の山古墳では三本のトレンチが設定された。

第1トレンチは後円部北側に、鉄砲山古墳前方部との間を結ぶ長さ五一呎のトレンチである。両古墳間には農道が通るため、トレンチを貫通することが出来ず、便宜的に農道によって区切られた南部分を奥の山第1トレンチ、北部分を鉄砲山第4トレンチと呼称した。

第2トレンチは、前方部南側に設定した。畑地の現地形の区画に合わせたため、古墳の主軸から若干ずれている。

第3トレンチは前方部東側に設定したが、同様の理由により、古墳の主軸に直交するものとはならない。この様に地形に制約を受け、必ずしも思う位置にトレンチを設定することが出来なかった。

三月一五日、第1トレンチを設定し、早速調査を開始した。

三月一九日、第1トレンチでは周堀を概ね確認することが出来たが、墳丘内側の立ち上がり部分が不明確なため、さらにトレンチを約七〇センチ程墳丘側に延長して、立ち上がりを追求め後円部付近の周堀の幅を確認することができた。

三月二〇日、第2トレンチを設定し、掘り下げを開始。

三月二一日、第3トレンチを設定し、掘り下げを開始。

三月二四日、三ヶ所のトレンチを完掘し、周堀を確認する。土層断面の実測を行い、併せて古墳周辺の地形を測量し、トレンチの位置を図面に記入する。

三月二五日、実測を完了し調査を終了する。

(駒宮 史朗)

## (二) 瓦塚古墳

昭和六一年度の調査は、後円部東側からくびれ部東側の周堀、及び墳丘が削平された部分約四〇〇平方メートルを対象区としたもので、調査期間は、八月二十五日から一〇月二十三日までである。

八月二十五日

調査対象区内に三本のトレンチ（北から第1・2・3トレンチ）を幅2メートルで設定し、各トレンチの一部（幅一メートル三層）をテストピットとして調査を開始した。テストピットは墳丘裾推定位置に設定したものである。また、第1トレンチと第2トレンチの中間に第4テストピットを設定した。第1・2・3テストピットにおいて周堀立ち上がり部と思われるものを確認。立ち上がり部上端は各トレンチとも黒褐色粘土質である。

八月二十六日

第1トレンチ掘り下げ開始。また重機により表土の除去を開始する。

八月二十八日

第1トレンチにおいて中堤を確認、中堤上には埴輪はほとんどない。

八月二十九日

第1トレンチを東へ五メートル延長。中堤及び外堀の外側立ち上がり部を確認。後円部東側墳丘削平部の表土除去作業を開始する。

九月四日

第2・第3トレンチ掘り下げ開始。周堀立ち上がり部を検出する。表土から一、三層掘って堀底は検出できず、ボーリングの結果四〇センチ程下であるよう。

九月五日

後円部東側の墳丘削平部の表土除去終了。南側部分において墳丘盛土が残存したと思われるロームブロック混じりの褐色土を検出する。

九月八日

くびれ部に設定した第2トレンチを基準に後円部側、前方部側に各八層調査区を拡張し北拡張区・南拡張区と呼称することとした。

九月一〇日

第3トレンチを墳丘部分まで延長。くびれ部南側墳丘削平部の表土除去作業を開始する。

九月十一日

くびれ部南側墳丘削平部の表土除去終了。くびれ部北側の表土除去作業開始。

九月十七日

南拡張区において墳丘裾部のラインがほぼ検出できた。なお拡張区の南側には後世の土壌の切り合いがあるよう。

九月二十五日

南拡張区遺物分布図作成及び、北壁土層断面図の作成を行う。第2トレンチ墳丘部分の一部を、旧表土と思われる黒褐色粘土まで掘り下げる。北拡張区墳丘削平部分の表土除去作業を行う。

九月二十六日

第1トレンチと第2トレンチ間の墳丘削平部の表土除去作業を行う。第4テストピット北側に黒色土の落ち込みを検出。円筒埴輪の大型破片・須恵器破片を包含している。第2トレンチ周堀立ち上がり部に土壌サンプル採取

のピットを設ける。

九月三〇日

南拡張区周掘底部遺物検出作業を行う。周掘底部直上の層には遺物が含まれていないもよう。北拡張区北側は掘底が浅くなっている。一種のブリッジの可能性も考えられる。第2トレンチ墳丘部の土壌サンプル採取用のピットを掘り下げ、ローム面を出す。旧表土上面は標高一八・四尺であり、先日、立ち上がり部サンプル採取用ピットで確認した数値とはほぼ同じである。

一〇月一日

北拡張区で検出したブリッジ状のローム掘り残しと思われるものを確認するため調査区を北へ二尺拡張した。

一〇月三日

第4テストピットを延長し第4トレンチを設定して掘り下げる。東側の旧用水路により周掘立ち上がり部が切られていることを確認した。第2トレンチ土層断面図作成を行う。

一〇月八日

第2トレンチ二地点で土壌サンプルの採取作業を行う。

一〇月一三日

南拡張区周掘底部を精査し完掘。掘底に土壌ないしくぼみが二地点検出された。また立ち上がり部には墳裾に上がるためのステップの掘り残しが二、三箇所確認され注目される。

一〇月一五日

第2トレンチ土壌サンプルの追加分を採取。ベルトを除去し完掘。第3トレンチ周掘底を精査し完掘。くびれ部付近立ち上がり部上位を精査し完掘。

第4トレンチ北側で検出した土壌はガラス燼等を含む攪乱と判明。

一〇月一六日

遺構完掘状況写真撮影

一〇月一七日

第1・第3・第4トレンチ土層断面図作成。

第1トレンチ外堀の外側立ち上がり部が外側へ一・五尺程掘れることが判明、掘り下げを行う。調査区全景写真撮影を行う。

一〇月二〇日

遺構平面実測開始。気球による空中写真撮影を行う。

一〇月二一日

遺構平面実測終了。

一〇月二二日

遺構保護のため砂を入れた後、重機により埋め戻し開始。

一〇月二三日

埋め戻し作業を終了。器材等を撤収し調査を終了する。

(田中 正夫)

### (三) 中の山古墳

中の山古墳については、未調査のため、史跡整備のための資料が皆無の状況であった。そこで、周堀の範囲と一重、二重の別を知るために、後円部のほぼ主軸線上（梅林をさけて若干干まげている）と、くびれ部の西側に幅三層のトレンチを設定して調査を実施した。調査期間は昭和六二年八月二四日から十月一三日までである。以下に、日を追って記述する。

八月二四日

くびれ部西側に第1トレンチ、後円部のほぼ主軸上に第2トレンチを各々三層幅で設定。トレンチ内を細分してテストピットとして確認面まで掘り下げる。第1トレンチでは外堀の幅が約七・八層と判明。第2トレンチでは内堀・中堤・外堀の存在が判明。

八月二六日

後円部北側に第3トレンチを一層幅で新設。中堤・外堀・外堤のプラン確認を実施。あわせて、中堤の屈曲部を探るため、第3トレンチの南側にテストピットを新設。プランが把握される。周堀は今のところ盾形でなく、長方形の可能性が強いようだ。ただし、主軸上で角をもつ剣菱形も考えられる。

八月二七日

第1・第2トレンチにバットホウを投入して表土剥ぎを実施。第1トレンチはジョレンがけして、プランを確認後、内堀から掘り下げ開始。須恵器及び須恵器技法の円筒埴輪が少量出土。底部穿孔の異形品も出土。

八月二八日

第3トレンチの内堀部分を拡張してA区（五×一三層）を設定。内堀の外

側立ち上がり部は直線的で、角をもつことが判明。同じく、第3トレンチの外堤付近西側にB区（四・三×四層）を設定。外堤隅部のプランが現れる。

八月三一日

A区のプラン確認写真を撮影。第1トレンチの内堀、第2トレンチの内堀・外堀部分をそれぞれ掘り下げ。

九月一日

第1トレンチ内堀部の簡易遣り方による遺物ドット図作成。六八点を取り上げ。再度掘り下げを開始するが、遺物量が増えて、移植ゴテに変える。外堀部はローム上面から四〇〜五〇代まで堀底が現れ始めた。遺物量は少なく、十点内外。須恵器片のほか、赤焼の円筒埴輪片も一点出土。層序は表土↓灰褐色土↓ローム粒子・小ブロッタ混じりの暗茶褐色土（サラサラ）↓黒色粘土の順。杭打ち終了。

九月二日

第1トレンチ中堤部の精査を行う。内堀側の肩部はサブトレ調査によって、ロームブロッタを多量に含む土と黒色土を傾斜（外上がり）をもたせて交互に積んで搗きかためていることが判明。また、中堤上には小判形の土塊と円形ピットのプランを確認。外堀部完掘。内堀部の遺物検出作業実施。遺物量が飛躍的に増える。

九月三日

第1トレンチ外堀部の前日まで堀底と考えていたソフトローム土は中堤からの流れ込み土であり、その直下にチョコレート及びイエローのハードロームブロッタ混合層が認められた。これは堀底の貼土であった可能性も考えられる。なお、外堀の外側立ち上がりラインは直線的なのに対し、内側のライ

ンはふくらみをもつため、ブリッチのつけ根付近の可能性も出てきた。外堤は三段掘り込みであることが明らかになった。

九月八日

第1トレンチ内堀部の遺物検出作業(第三検出面)で、特殊な須恵質埴輪(埴輪壺)が出土。第2トレンチの埴輪付近からは須恵器坏片が出土。

九月九日

第1トレンチ内堀部からは、先日取り上げたのと同形の特珠な須恵質埴輪が数個体出土。やはり、埴輪的に、同形ものが、多数樹立されていたのだろう。

九月一四日

第1・2トレンチ及びA区の遺物ドット図作成後、取り上げる。第3トレンチとB区を湧水面まで掘り下げる。第1トレンチの埴輪部ではテラス上に遺物が集中する部分があったが、各種各様の別個体であり、人為的な集積(二次的な)の可能性も考えられた。

九月一八日

第2トレンチ埴輪部はローム削り出しで保存状況は良好。斜面上は平坦で、テラスとなる可能性もある。遺物はさほど多くなかったが、赤焼きの須恵質普通円筒、須恵器大甕等が出土している。頸部に補強凸帯をもつ甕が抽出されたのは年代推定上重要である。第2トレンチ外堀は内外の立ち上がりが急傾斜で、平面プランは直線的である。保存状況良好なため、設計プランの復原上、有効であろう。

九月二一日

第2トレンチ埴輪部は、ロームテラス面をもつた後、旧表土と盛土が斜面をなして、立ち上がることが判明。旧表土上面のレベルは一八・六四層で、

現地表より高い。厚さは三六代層。第1トレンチ埴輪部は、立ち上がり部を抽出すべく、一・五層奥へ拡張。しかし、旧表土は現れず、ローム削り出しの緩い立ち上がりが出ただけである。くびれ部のテラス面は、他より(第2トレンチとの比較)幅が広いようである。

九月二二～二五日

第1トレンチ内堀及び埴輪部の遺物検出・精査を実施。第2トレンチとB区を完掘。

九月二七日

明日の完掘に備えて、終日、ポンプによる排水作業。

九月二八日

第2・3トレンチ及びA区完掘。分層終了後、写真撮影。

九月二九日

第1トレンチ内堀底精査後、分層して、写真撮影。パリノサーベイ辻本氏による土壌サンプリング実施。

九月三〇日～一〇月三日

各調査区の土層断面図を作成。簡易遣り方の水糸張りを実施。

一〇月四日～七日

各調査区の平面図を作成。コンタ用の計測をあわせて実施。

一〇月八日

気球による空中写真撮影を実施。

一〇月二一日～二三日

砂を入れて遺構保護の後、重機で埋め戻しと転圧を行い、発掘調査を終了。

(若松 良一)



## II 埼玉古墳群の立地と環境

埼玉古墳群は、行田市埼玉地区にあり、行田の市街から南へ二・五キロほど下がったローム台地上に位置する。この地区は、埼玉県の東北部に当り、利根川、荒川といった大河川を始め、その分流の中小の河川も加わって激しく乱流した地域である。さらに、この地区は関東造盆地運動の中心に近く、地盤の低下が最も激しい地域といわれている。

そのため、各所に旧河川跡や細長く延びた自然堤防状の微高地が見られる。第1図は大宮台地を中心とした周辺の地形の概略を描いたものである。

図のように大宮台地の西側の台地は、南から武蔵野台地、入間台地、高坂台地、東松山台地等が並ぶが、いずれも河川による開析谷は西から東へと伸びていく。これに対し、大宮台地の谷は、北西から南東に伸びており、いく筋かの谷によって分断されていることがわかる。また、北西側は開析作用により分断されて独立丘状になった台地も多い。

大宮台地で最も標高の高い地点は、台地西縁に近い北本市高尾付近にあり、標高三〇呎である。台地の地形は、浸食作用や関東造盆地運動による地盤の沈下があるとはいえず、いずれもこの最高地点より低く、ローム層の堆積した時代にはすでに独立丘的であった可能性が高い。

埼玉古墳群を乗せる台地を見ると、主となる大宮台地の北端からわずかに離れた独立丘で、その最北端に位置していることがわかる。この台地を頂点として北西から南東方向にかけては大小さまざまなローム台地群が並ぶ。

これらのローム台地群の並びを見ると、埼玉古墳群を乗せる台地は、周囲

が著しく開析されているとはいえず、大宮台地の最北端の台地群の一つといえるよう。

第3図は、迅速図の描き方や従前に行われた発掘調査の成果などを参考としてローム台地が広がっている部分を想定したものである。北西から南東方向にいく筋かの細長い台地が続くことになるが、その中でも埼玉古墳群を乗せる台地が最も幅広く、この地区では、主要な台地であることがわかる。

埼玉古墳群の位置は、太い点線で開いた部分である。北東から南西に並ぶ古墳群の北西側には忍城の西に延びる町並みの乗る幅広い低地帯が伸びてきており、埼玉古墳群の西側で直線的な谷頭を形成している。埼玉古墳群の西南の端から行田の町並みの西側には、細く延びたローム台地があるが、迅速図では集落が見られず、現在水田地帯になっていることから台地として続かないと考えたこともあった。しかし、その間には野合遺跡の存在や迅速図に見られる小円墳群

の存在、前方後円墳といわれる大塚古墳があったとされることから、埼玉古墳群の端から細長く台地が延び、埼玉古墳群の西側は、谷頭に当たっていたと考えられる。



第1図 大宮台地と前方後円墳の分布



- |    |   |   |   |   |   |    |   |   |   |   |   |    |    |   |   |   |    |   |   |
|----|---|---|---|---|---|----|---|---|---|---|---|----|----|---|---|---|----|---|---|
| 1  | 崎 | 玉 | 古 | 墳 | 群 | 11 | 将 | 軍 | 山 | 古 | 墳 | 22 | 毘  | 沙 | 山 | 墳 | 31 | 長 |   |
| 2  | 若 | 王 | 子 | 墳 | 群 | 12 | 八 | 幡 | 山 | 古 | 墳 | 23 | 真  | 名 | 門 | 古 | 32 | 野 |   |
| 3  | 若 | 小 | 玉 | 墳 | 群 | 13 | 愛 | 山 | 塚 | 古 | 墳 | 24 | 小  | 板 | 高 | 墳 | 33 | 中 |   |
| 4  | 小 | 見 | 古 | 墳 | 群 | 14 | 荒 | 山 | 塚 | 古 | 墳 | 25 | 大  | 日 | 塚 | 古 |    | 学 |   |
| 5  | 酒 | 卷 | 古 | 墳 | 群 | 15 | 地 | 藏 | 塚 | 古 | 墳 | 26 | 袋  | 台 | 遺 | 跡 |    | 校 |   |
| 6  | 新 | 郷 | 古 | 墳 | 群 | 16 | 小 | 見 | 真 | 寺 | 古 | 墳  | 27 | 陣 | 針 | 跡 |    | 々 |   |
| 7  | 羽 | 生 | 古 | 墳 | 群 | 17 | 虚 | 空 | 藏 | 山 | 古 | 墳  | 28 | 鴻 | 池 | 遺 |    | 鹿 |   |
| 8  | 佐 | 間 | 古 | 墳 | 群 | 18 | 酒 | 大 | 巻 | 1 | 号 | 墳  | 29 | 武 | 良 | 内 |    | 尾 |   |
| 9  | 丸 | 古 | 山 | 墳 | 群 | 19 | 大 | 種 | 荷 | 1 | 号 | 墳  | 30 | 高 | 畑 | 遺 |    | 道 |   |
| 10 |   |   |   |   |   | 20 |   |   |   |   |   |    |    |   |   |   |    |   | 跡 |

第2図 埼玉古墳群と周辺の遺跡(1/6,000)



第3図 埼玉古墳群と周辺の地形

(網かけ部分は台地縁道部、斜線部は古墳時代後期から奈良・平安時代の集落)

周辺の台地を見ると、行田の町並みに延びる台地の西側には忍城の堀を挟んだ本郭台地から、高畑遺跡へ続く台地が南東方向へ延びている。また、忍城本郭の台地と埼玉古墳群の台地との間からは鴻池、武良内遺跡等が乗る細長い台地がある。埼玉古墳群の台地の北東にも小見真観寺古墳群や若小玉古墳群を乗せる台地が細く延びている。小見真観寺古墳群を乗せる台地と若小玉古墳群を乗せる台地は切れ、別の台地の古墳群と考えられていたが、白鳥田遺跡の発掘調査によって台地として一連の台地上に立地することが、明らかにされた。

小見真観寺古墳群を乗せる台地の西側には、現在見沼代用水が流れている。川沿いに集落が連なるが、集落の並びは細長く連続していて、河川により形成された自然堤防上に立地しているように思われる。

現在の見沼代用水の東側の地割りを迅速図で見ると、中世の利根川の流路であった旧会の川の谷との中間の位置にほぼ平行するように流路跡の痕跡が走り、やがて見沼代用水と合流している。会の川の流路は、利根川本流からの分岐点は一定しているが、東に向きを変える地点からいく筋かの流れた跡が残っている。

このうち、最も埼玉の台地に近い流路の西側には、真名板高山古墳を乗せる微高地が延びている。会の川

の流域に見られる微高地は、砂丘が発達しているといわれるが、前方後円墳である真名板高山古墳が立地していることから、古墳時代以前に成立している微高地であり、ローム台地に立地している可能性があらう。

次に、埼玉古墳群周辺の遺跡を概観して見よう。

埼玉古墳群内の古墳を除いた遺跡には、瓦塚古墳周辺を中心に発見されている縄文中期末葉の遺物群があるほか、中世の遺構が断片的に知られているのみである。古墳造成に当たって周辺の表土を削平したり、その後の周辺の沼、特に小針沼や忍城堀等の埋め立てのため、古墳の周囲がかなり削平され、一層に近い削平を受けているが、瓦塚古墳の周囲で発見された縄文土器の存在からもわかるように、全ての遺構を消しさるほどの削平とはいえず、縄文時代以降の遺構は、ほとんど存在しなかった。

周辺地域の弥生時代の遺跡は、先に取り上げた台地上では全く知られていない。最も近い遺跡としては、台地群の北西に広がるローム層のない自然堤防上に立地する弥生中期の遺跡である小敷田遺跡があるのみである。台地上に立地するようになるのは、弥生時代終末から古墳時代初頭からで、埼玉古墳群に最も近い遺跡としては、埼玉古墳群を乗せる台地の西側の台地にある高畑遺跡、武良内遺跡や、その西側の台地上の吹上町袋・台遺跡が知られる。また、小見真観寺古墳の台地では、白鳥田遺跡でまとまった遺構・遺物の出土があった。

これらの遺跡群からはいずれも五〜六世紀の住居群や古墳群が検出されている。これに比べて埼玉古墳群を乗せる台地の古墳時代の遺跡としては、武蔵水路で発見された神明遺跡群がある。古墳群に最も近い古墳時代の遺跡の一つであり、出土遺物が多かった。出土土器は和泉式から鬼高式土器で、か

りの出土量である。このほか古墳群から行田の町並みに延びた台地上では、大日塚古墳を中心とした佐間古墳群と重なる集落群がある。時期は、埼玉古墳群の形成時期と重なる六世紀の中心であった。

埼玉古墳群の周囲の遺跡は、北にのびた台地上にある大人塚古墳を中心とした古墳群、稲荷山古墳の東側に並ぶ若王子古墳群を除くと、古墳時代の遺跡は、かなり離れた地にある小針遺跡の集落がまとまっているのみである。

埼玉古墳群の周辺で断片的であるが、かなりの数の遺跡が発掘調査されている。西側から南側にかけて、星宮遺跡、陣馬遺跡の東側は、原遺跡と連続的に並んでいる。これらの遺跡で発見されている集落の時期は、いずれもさかのぼってたとしても七世紀の終末であり、その中心は奈良・平安時代の住居群であった。従来知られている古墳時代の遺構は、陣馬遺跡で発見された五領期の方形周溝墓を除けば、古墳群形成に関わる六世紀中頃の住居が一軒のみである。

また、將軍山古墳や稲荷山古墳の東側の並びには、若王子古墳がある。この地はまた、奈良・平安時代に栄えた盛徳寺を中心として展開した地域であり、大和古印の出土地も古墳群との間に存在する。近年、盛徳寺跡東側の愛宕通遺跡が発掘調査された。発見された遺構は、隣接して発見された円墳二基を除くと、いずれも奈良・平安時代の集落である。

近年、古墳時代から平安時代にかけての大規模な集落であることが判明した小針遺跡は、忍川を隔てた現水田地帯に立地し、古墳時代に限れば、小針遺跡と埼玉古墳群との間は、古墳を除くと、遺構はほとんどなく、無人の地が広がっていたことになる。

### Ⅲ 奥の山古墳の調査

#### 一 遺構

各部の要所を設定した三本のトレンチにより、遺構の確認を行い、いずれのトレンチからも周堀が検出された。

第1トレンチは長さ五一呎、幅二呎で奥の山古墳、鉄砲山古墳との間に設定された間が農道によって切られているため、第1トレンチは便宜的に墳丘から農道までの二二呎をさす。

周堀は地山のローム層を掘り込んで作られており、底部中央はなだらかな高まりをみせ、地表面からの深さは八七センチを測る。外側立ち上がり部分で一段と深くなり中央部に比べ約五〇センチ深い。

墳丘立ち上り部分には根切溝A・B・Cが掘られ、少なくとも三回にわたって根切溝の改修が行なわれたと思われる。周堀の底部に堆積した6層の堆積範囲から周堀の幅を复原すると約一四呎前後の規模と推定される。道路部分の未調査の部分、両側の土層に変化が認められないので、そのまま層序はつながると思われる。

周堀の外側は約八呎の空間を置いて鉄砲山古墳前方部の外堀となる。鉄砲山古墳の外堀は中央付近がレンズ状に深く掘られ、最深部は地表から一呎三〇センチを測る。外側の立ち上がりを後世の溝Fが切っている。内側の立ち上がりはゆるやかな傾斜で立ち上がる。途中に幅一・一〇呎のフラット面と約四五度の傾斜で急な立ち上がりを形成するが、この変化は2層の堆積状況か

ら後世の削平によって生じたものと推定され、周堀本来の立ち上がりは5層と8層の交点付近から、底面の曲線をそのまま描いて立ち上がるものと思われる。そして外堀との間に約六・三呎の空間を置いて内堀となる。すなわち中堤帯である。

内堀での墳丘立ち上がりの状態は墳丘内に一・二呎までトレンチを入れて確認にとめたが、大きな根切溝Hが掘られて攪乱を受け確認できなかった。内堀外側の立ち上がりは第5層と地山の交点から、そのまま地山の曲線を描いて立ち上がると推定され、その外側のフラット面約三呎は後の削平によって生じたものと思われる。

底部は外側立ち上がり付近が深く地表から約一・三呎を測り、墳丘に近くにしたがって高くなり墳麓付近では約三〇センチの比高差が認められる。

この結果内堀の幅は推定約八呎前後の規模になる。

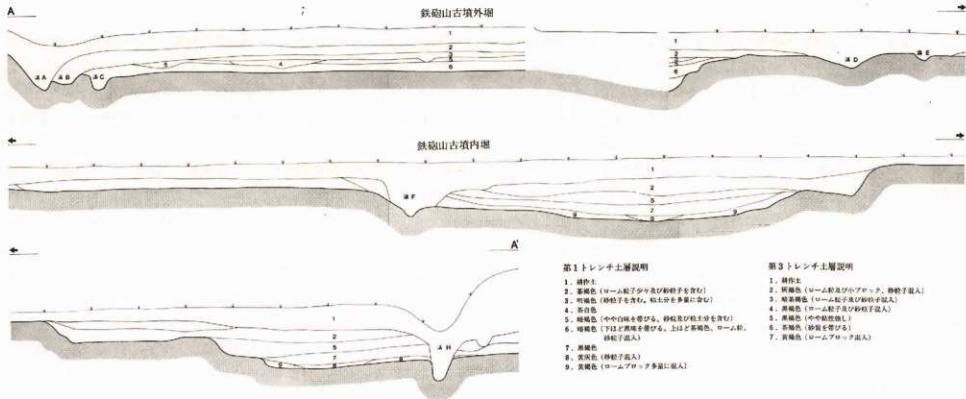
第2トレンチは古墳主軸に対して、やや斜めに設定されており、検出された周堀の幅を复原すると推定約一三呎程の規模になると思われる。古墳の裾には根切溝があり、古墳の立ち上がりの状態を明確にすることは出来なかった。第3トレンチは前方部東側に設定された。東側墳麓の農道部分は、調査ができず墳丘立ち上がりの状況を検出することができなかった。またトレンチの位置が古墳主軸に直角ではないため、周堀を斜めに調査した形となる。

周堀の底面はほとんど平らで、中央部付近がわずかに深くなり地表から深さ一・五呎を測る。外側立ち上がり付近には溝状の掘込Fがあり底部がさらに八〇センチ程深く掘り込まれている。特に層の乱れが認められず、立ち上がりはロームを階段上に掘り込んで作られている。周堀の幅は推定一八呎前後の規模となる。



第4図 奥の山古墳測量図及びトレンチの位置 (1/600:スクリーントーンは周堀部分を示す)

第1トレンチ土層断面



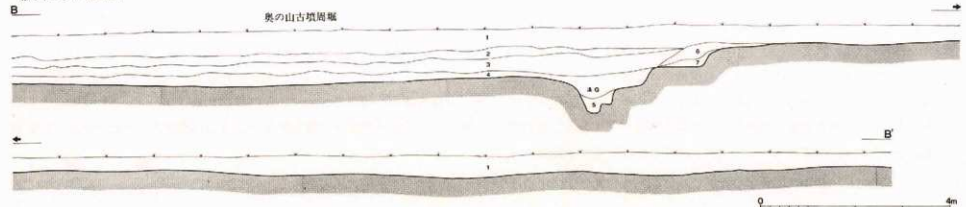
第1トレンチ土層説明

1. 耕作土
2. 茶褐色 (ローム粒が少く及び砂粒を含む)
3. 暗褐色 (砂粒を含む、粘土分を多量に含む)
4. 茶白色
5. 暗褐色 (やや白濁を帯びる、砂粒及び粘土分を含む)
6. 暗褐色 (下ほど黒味を帯びる、上ほど茶褐色、ローム粒、砂粒が混入)
7. 黒褐色
8. 灰白色 (砂粒が混入)
9. 黄褐色 (ロームアロップ多量に混入)

第3トレンチ土層説明

1. 耕作土
2. 灰褐色 (ローム粒及び小アロップ、砂粒が混入)
3. 暗茶褐色 (ローム粒及び砂粒が混入)
4. 黒褐色 (ローム粒が及び砂粒が混入)
5. 黒褐色 (やや暗褐色)
6. 茶褐色 (砂粒を帯びる)
7. 黄褐色 (ロームアロップ混入)

第3トレンチ土層断面



第5図 奥の山古墳土層断面図 (1/80)

## 二 遺 物

奥の山古墳から出土した遺物は、すべて円筒埴輪片と形象埴輪片で、平箱三箱ほどの量である。全体の器形のおかる例がなかったので、円筒埴輪のうち、比較的大型なものに限って復原実測に努めた。

以下、分類別に記述する。

### (一) 円筒埴輪 (第7図～第11図)

残存状態がよく、代表的なものを図示した。このうち、発掘調査で出土したものは、第1トレンチの一点、第3トレンチの八点のみである。残りは周堀の整備の過程で、墳丘の北から西側の周堀で採集されたものである。

奥の山古墳の円筒埴輪を胎土や色調から観察すると、大部分が二つの異なったグループに分けられる。また、製作技法や形態の相違ともよく対応していたので、それぞれA類、B類とし、いずれにも該当しない少量の埴輪をC類と、三つに分類して記述を進める。

#### A類 (復原図1～5、拓影図1～38、43～48、50～58)

鮮やかな赤色系統の色調と堅緻な焼き上がりが大きな特徴で、他とは容易に識別が可能である。胎土は、砂礫は少なく、酸化鉄粒と白色バミスを相当量含んでいる。

復原図2は、口縁部と底部を欠く。胎土には酸化鉄粒のほか、白色バミスと雲母、チャート礫、長石礫をこくわずを含む。焼成はよく、焼き上がりもきわめて堅緻である。赤色(10R4/8)を呈している。現存率は、全体の一五%である。復原すると、胴部の最大径は、二五・〇センチである。外面は、

タテハケ調整後、凸帯が貼られるが、突出度は、きわめて低い。ただし、ヨコナデ調整を強く行っているため、シャープな稜となっている。内面は、傾斜の強いナナメハケ調整が行われているが、調整が不十分で、粘土紐の接合痕が多数残っている。ハケメの単位は、外面が十本あたり一・九センチ、内面が一・二センチで、異なった調整具が用いられていると思われる。

復原図3は、底部から胴部にかけての全体の一五%程の破片から復原したものである。底径一七・〇センチ、胴部最大径二九・六センチを計る。胎土には酸化鉄粒を多量に含むが、砂礫の含有量が少ない。また、白色バミス・チャート・石英・角閃石をわずかに含んでいる。色調は、内外で異なり、外面が橙色(5YR6/8)、内面が赤色(10R5/6)を呈する。焼成は、内面の方が良好で、爪が立たないほど堅緻である。

器形は、小さな底部から、口縁部に向かって開く。底部は、幅六センチの粘土板をまるめて基部を作っている。胴部は、粘土紐を巻き上げて成形している。外面は、わずかに右下がりが傾斜のタテハケ調整が施され、その後、凸帯を貼る。器壁の厚さに比べて、突出度は弱い。第一凸帯は、ヨコナデ調整が不十分で、下端が器壁に密着していないため、雑な作りに見える。

内面は、2と同様、傾斜の強いナナメハケ調整が行われているが、調整が不十分のため、粘土紐の接合痕が残っている。ハケメの施文距離が長く、成形終了後に口縁部から手を入れて調整を行ったものである。

なお、内面の先端にヨコハケやヨコナデが施されていない点から、口縁部はさらに上で、三条の凸帯がめぐると思われる。

復原図4は、底部から胴部にかけて三〇%ほどの破片から復原したものである。底径一六・〇センチを計る。胎土・焼成とも復原図3に類似し、外面よ



り内面の焼成がよい。

底部は、粘土板をまるめて基部としているが、下端が著しく厚くなっている。底面端部は、太い簀状の圧痕とへらを差し込んで作業台から切り離した痕がみられる。

外面は、タテハケ調整後、低い凸帯を貼るが、シャープさを欠いている。

内面は、目が粗く、幅の広い工具を使用して、ヨコハケ調整が行われている。隙状文のように休止を繰り返しながらの調整である。

復原図5は、底部付近である。復原底径は一六・六代じゆを計る。胎土は、砂粒が少なく、白色バミスと酸化鉄粒が含まれている。焼成は、良好で、きわめて堅緻である。赤褐色(2・5 Y R 4/6)を呈する。粘土板をまるめて基部としているが、外面下端には粘土を平らに延す際に付いた作業台の無理圧痕が残っている。

底面は、他と異なり、平滑だが、一か所だけ窪みがみられた。外面は、わずかに右下がりのタテハケ調整、内面は、ナナメハケの調整が行われている。拓影図1~13は、すべてA類の口縁部である。このうち、2の復原口径は三四代じゆであった。

これらは、外面がわずかに右下がりのタテハケ調整、内面が体部から続くナナメハケ調整の上にヨコハケ調整の行われている点で共通しているが、口縁部付近の調整の違いにより、以下の三つの類型に分けられる。

1・6・8は、緩やかに外反して開き、端部が軽くヨコナデされている。端面には浅い凹線がめぐる。

2は、口縁端部が強く屈曲し、水平に開いている。同様な例に11がある。

4・5・9・12は、口縁端部が「く」字状に屈曲し、強いヨコナデによっ

て、端面と内面上端には、凹線を生じている。その結果、内側の角が鋭く尖り、稜をなすものがある。

内外面を調整する工具は、目が一〇本当たり二代じゆの例が多いが、細いものでは、一・五代じゆ、粗いものでは二・九代じゆである。

14~38と43は、A類の胴部破片である。器壁が全般に厚く、なかには二代じゆを越えるものもある。外面調整は、垂直もしくはわずかに右下がりのタテハケが用いられる。内面調整も大半が復原図2・3と同様、施工距離が長く、傾斜の強いナナメハケが施されている。これらは内面調整が粗雑なため、粘土紐の接合痕を残しているものが多い。

凸帯は、全般に低平で、断面が「M」字状を呈するか、上部の稜のみ高く、三角形を呈するものとなっている。凸帯周辺のヨコナデ調整も雑で、指を当てがって一度ですませている。このため、凸帯下端は、器壁に密着していないものが多い。

透孔は、すべて円形である。凸帯間いっぱい穿孔しようとしたらしく、20・22・27・28・38などのように凸帯上下のヨコナデの範囲まで及んでいるものがある。透孔は、切り離しただけのものと、指ナデ調整を加えたものがある。

45~48は、A類の底部である。いずれも粘土板をまるめて基部としているが、下端部は、粘土の自重で圧縮されたためか、異常に厚くなっている。外面は、タテハケ、内面は、斜行する雑なナデの後、ナナメハケ調整が行われている。46は、復原図5と同様、外面下端に木理圧痕が付いている。復原径は、46が一九代じゆ、47が二〇代じゆ、48が二二代じゆである。

50~58は、朝顔形円筒埴輪の破片である。胎土・焼成・色調は、A類の円

筒埴輪と共通している。

50・51は、接合面に剝離した例である。端部をみると、ヨコハケ調整後、ヨコナデ調整されている。口縁部の調整方法と同様で、いわゆる擬口縁技法で作られている。朝顔形円筒埴輪には古くから存在する技法である。

53・54・57は、通常の凸帯よりも幅が広く、突出度が強い。これは、接合部の補強帯としての役割を果たすためと考えられる。

52は、肩部から頸部、58は、頸部の破片である。いずれも頸部に凸帯がめぐっている。この部分は口頸部との接合部にあたっており、凸帯は幅が広く、ヨコナデ調整も丁寧であった。

この類の朝顔形埴輪の器面調整は、肩部で外面ナナメハケ、内面横位ナデ調整、口縁部で外面タテハケ、内面ヨコハケ調整が行われている。

#### B類（拓影図59～74）

色調は、すべて橙色（5YR 6/6・6/8・7/8及び2.5YR 7/6）であるが、かなり白っぽいため、他の類とは容易に識別できる。胎土もA類と対比的に、多量の礫、砂を含む。目に付くのは、チャート、長石、火山ガラス、酸化鉄粒、角閃石等である。特に注目されるのは、量は少ないが、いずれもいわゆる、白色針状物質を含んでいることである。長さは一貫し、前後である。肉眼観察で、一破片当たり、数個から十数個が確認できた。

焼成は、おおむね良好で、68が、やや軟質なのを除けば、A類と同程度の堅緻さである。

B類には口縁部破片が少なく、ほとんどが胴部と底部の破片であった。器壁は、A類に比べかなり薄く、底部もそれほど厚くならない。

外面調整は、いずれもタテハケであるが、66には、凸帯のヨコナデ後に二

次調整が加えられていた。内面調整は、非常に丁寧で、粘土紐の接合痕はほとんど消している。底部付近は、斜位または横位のナデがむらなく施されている。

胴部内面は、61・66のようにナデ調整を施すものと、他の埴輪のようにハケ調整を施すものがある。上半部のみにハケ調整が加えられているのかもしれない。

ハケ調整は、A類と異なり、傾斜の緩いナナメハケで、65・67・69・70のように傾斜の異なるハケ調整を重ねて施した例と、62・63のように、ハケ調整の後、ナデを加えるものがある。凸帯は、水平に貼り付けられ、断面形は、いずれも台形を呈する。ヨコナデ調整が丁寧なため、凸帯の下側は、いずれも器壁に密着し、整った作りにみえる。

59とは60、B類の朝顔形円筒埴輪片である。59は、頸部の破片で、A類に比べて薄手に作られ、凸帯の突出度が強く、整美な作りである。60は、口縁部下半の破片で、上半との接合部には補強帯を兼ねた幅の広い台形の凸帯が貼り付けられている。

#### C類（復原図1、拓影図31・35・39～42）

C類は、A・B類に属さないものを集めた。復原図1は、残存率三〇％で、胎土にやや大きい酸化鉄粒を多量に含むほか、白色バミス、長石、チャート礫もかなり含まれている。白色針状物質の存在は確認できなかった。

焼成は、A類・B類の平均的なものと比較して、やや軟質な焼き上がりで、触ると粉が手に付く感じである。色調は、明赤褐色（2.5YR 5/8）である。口唇部を欠くが、口縁部径は、推定三七センチと、かなり大型である。器形は、A類と異なり、寸胴である。口縁部は直立気味であり、外反するのは上

半にいたってからである。器壁は、一・二代目と、薄い。

器面の調整は、外面では胴部、口縁部とも細かなナナメハケを施している。内面はヨコハケ調整を行っているが、重複が認められ、二度以上の調整が行われたものと思われる。

また、内面にはこれらの器面調整後、ヘラ描きによる斜行沈線が三本並んで施文されている。

凸帯の断面は、台形で、突出度が強いが、ヨコナデ調整が不十分で、凸帯の下端は、器壁に密着していない。胴部には円形の透孔があげられている。

31と35は、器壁が厚く、復原された径からみても大型品と思われる。凸帯は、両者とも断面台形で、ヨコナデが丁寧に施されていた。外面は、タテハケ、内面は、ナナメハケ調整が行われている。

31は、長石、石英、チャート、角閃石、片岩などの砂礫を大量に含む。焼成は、良好で、きわめて堅緻である。明赤褐色(2・5 Y R 5/6)である。

35は、チャート礫、角閃石、酸化鉄粒、白色バミスを多量に含む。焼成は、良好で、きわめて堅緻である。色調は、明赤褐色(2・5 Y R 5/8)である。この埴輪は、A類に近い特徴もあり、A類の規格外れといえるかもしれない。

39は、薄手の器壁に幅の狭い凸帯が貼り付けられたものである。凸帯下端は、器壁に密着していない。胎土には大量の石英、長石、火山ガラス、チャートなどの砂礫が含まれている。

41は、焼け歪みが著しく、焼成時の亀裂も走っている。茶褐色で、独特な色調である。胎土には砂礫をほとんど含まず、凸帯の形態や調整方法からA類の焼き損なった製品とも考えられる。

## (二) 形象埴輪(第12~14図・第6図ニ・ホ・ハ)

形象埴輪は、すべて破片資料であるが、各種のものを含んでいる。個体数の復原を行うべく、可能な限り図化を行った。これらの資料は、41が第3トレンチの出土品であるほかは、古墳の整備の過程で採集されたものである。特に、造り出し付近の周堀内からの採集品が多い。また、最近(昭和六三年度)造り出し部から、表採された資料を図化した(第6図)ので、あわせて報告することにした。

資料は一見して、鮮やかな赤色ないし赤褐色を呈し、肌の整ったものと、淡い色調(土色帖では明赤褐色2・5 Y R 5/6を基調とし、5 Y R 5/4・6/4を含む)を呈し、肌のザラつくものにと選別可能である。そこで、胎土をさらに細かく観察してみると、前者には砂粒の含有は少なく、酸化鉄粒と白色バミスが観察されるのに対して、後者は礫と粗砂を多量に含んでおり、長石礫、チャート礫、角閃石、火山ガラスなどが観察され、例外なく白色針状物質を含んでいる。このため、円筒埴輪と同様に、前者をA類、後者をB類と分類した上で、説明を進める。

### 人物埴輪(1~32・ニ・ホ)

1は女子人物埴輪の臀部破片である。粘土板の表と裏をハケ調整した後に、表面にはナデを加え、中央のくびれた部分に、粘土帯を貼り付けて元結を表現している。元結の両端部は上方へ、反り上がるが、先端を欠いている。裏面には円形の接着痕があり、頭頂部を塞がずに、楕と乗せていることがわかる。A類。

2と3は左右対になる同一個体の美豆良である。粘土棒を作業台上で回転

して成形した後に、ナデ調整を行っている。下端部後方に突起が付いている。B類。

4と5も一対の美豆良で、製作技法は2・3と共通するが、下端部に突起が付いていない。本体から剝離した痕跡のないことから、堅魚木や大刀の可能性は低く、棒状の美豆良とみてよいだろう。B類。

6は人物埴輪の顔面破片である。粘土紐巻き上げ成形の円筒の正面に粘土板を貼って顔面とし、眉は粘土紐で表現し、眼は鋭利な刃物で一氣に穿孔している。内外面ともナデ調整されており、特に外面は丁寧である。B類。

7も人物埴輪の顔面破片である。6とほぼ同じ方法で製作されているが、側面には竹管の回転突起による耳孔があげられている。美豆良がないので、女子とみてよいだろう。A類。

8は人物埴輪の胸部、右腋部分である。タテハケ調整後に、腕の付け根付近に指ナデを加えている。形状からみて、右腕は前方に下げられていたらしい。B類。

9・10・11・14は同一個体片とみられ、全体から、琴を弾く人物とわかる。9は右肩から首にかけての破片で、肩部の穴に、腕の基部を挿入し、固定している。10の右腕はわずかのところで9には接着しなかった。中実の粘土棒をナデ調整して腕としており、指は粘土紐によって五本を独立して製作している。拇指と人差指の間には、粘土紐をはさみ込んで摺を表現している。11は板状の琴である。琴尾の突起部を欠き、現存長は九・二セリ、最大幅は七・五セリである。側面の内側する長方形を呈し、ヘラ先で穿孔した集弦孔から、線刻で四本の弦が琴尾に向けて描かれている。作業台上で粘土板を成形した後、ハケ調整を行い、さらにナデを加え、側面はヘラ切り後、ナデ調整。

裏面には人物本体に圧着した痕がある。14は左腕で、手先を欠いているが、反り具合からみて、弦を押える形をとっていたものかもしれない。B類。

13は10・14と同様に中実製作の腕である。手首の曲がり方、掌の内面の凹面からみて、刀の柄に手をかける武人の右腕とみてよいだろう。指は粘土紐で五指が表現されている。B類。

15は右手であるが、指の表現が行われていない。恐らく、17のように親指だけ付けたミトン形のものになろう。

16は15と同一個体とみられる上腕部である。肩部の穴への差し込み部を手づくね成形の後、粘土を貼り足して腕としている。A類。

17も15と同形態の手で、左手であるが、別個体である。腕は中実製作である。A類。

18と19は対をなす左右の腕である。中空に製作されており、直径一セリの穴が、手首のところまで達している。手先は、親指の付け根以外を失っている。作業台上で回転成形後、彎曲させ、外面をナデ調整している。B類。

第6図の二は、10・13と同様に粘土紐で指を表現した手の破片である。B類。20・23は胃の鍔の部分と推定される。いずれも板作りで、下端は平坦である。同一個体である22と23からみて、粘土板を三枚つないで、馬蹄形に製作されていることがわかる。22の内面には、美豆良を受けた凹みが残っている。20の外面の縁と右側の端面には、赤色塗彩が施されている。21は馬の障泥の可能性も考えてみたが、裏面に接着痕がないので、鍔と推定した。縁の部分に、粘土帯を貼り付け、その上に粘土粒を、間隔をおいて圧着している。20と22・23はB類。21はA類。24は人物埴輪半身像の裾の部分である。円筒部外面に断面三角形の凸帯を

巡らして、裾を表現している。復原直径は一六代目である。A類。

25は人物埴輪腰部の正面部分で、帯の緒を垂らしている様子が凸帯で示されている。B類。

26、29は同一個体片で、全体から、馬に乗る人物とわかる。29は馬にまたがった状態の左足で、障泥の上に、別体製作の足部を貼り付けている。中間位置に凸帯があり、リボン状の表現も行われていることからみれば、括楯くわつてんのようなものを着用している姿かもしれない。足の指の表現は行われておらず、素足なのか、履くまをはいているのか判然としない。障泥の左端に垂直のナデ痕があり、鏡鞆の垂下する表現があったものと推定される。28は対をなす右足である。26は腰部、27は胴下半部の破片で、腰のくびれた部分の復原直径は一〇代目である。B類。

30・31と第6図の木は、人物埴輪の佩刀である。柄頭が倒卵形をなしていることから、頭椎大刀を模したものかもしれない。30からみただけ限り、鏢の表現はなく、鞘は尻に向かって拡がる形になっているので、木装大刀を表現している可能性もありうる。木は、ひとまわり小ぶりに作られている。いずれもB類。

32は人物埴輪の腰部から離脱した刀子である。柄頭の端部は円形でフラットな面をもっている。柄は身に対して下側に屈曲しており、外面には円形浮文が付けられている。玉纏の状態を示したのだからか。鞘には刺突によって楕円の表現があり、革製とわかる。柄頭端面を赤彩。A類。

#### 動物埴輪(33、35)

33は牡鹿の頭部である。粘土紐巻き上げ成形の後、外面はハケ調整、内面はナデ調整を行い、眼孔は竹管状のものを挿入して穿孔している。眼孔の後

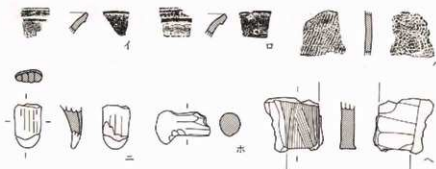
方には、別の小円孔があり周囲を立体的に立ち上げることから、別体製作の鹿角を差し込んだものと推定される。A類。

34は馬形埴輪の頭部破片である。眼孔は刀子状のもので穿孔されている。眼の上部は馬特有の高まりを表現している。眼の後方に貼られた凸帯は面繋の表現とみてよいだろう。A類。

35は扁平な粘土板の縁辺部に間隔をおいて、粘土粒を貼りつけた破片である。おそらく、馬形埴輪に装着された馬具であるが、器財形埴輪となる可能性もある。

#### 器財形埴輪(36、43)

36、38は大刀形埴輪の破片である。36は柄頭部の半分ほどの破片で、粘土板によって製作されている。平面形は倒卵形になるものとみられ、上面には飾り緒を表現する粘土紐が貼られている。内面には円筒部との接合痕がある。37と38は円筒状に作られた身の部分の破片で、ともに、大刀佩緒の表現が粘土紐によって行



第6図 奥の山古墳表採(昭和63年度)遺物

われている。復原直径は37が二二セリ、38が一〇セリで、別個体である。いずれもB類。

39・40・41は穀形埴輪の破片で同一個体の可能性が高い。39は円筒部から剝離した罫の基部であり、外面に貼られた凸帯は、正面部にのびて、矢筒の縁金具の表現になるものと推定される。40は罫の下半部で、斜行する端部をもっている。外面には太いヘラ描の垂直線がある。41は矢筒の下端に付けられた罫状部で幅の広い凸帯が貼られている。円筒部との境界には40と同様の沈線が描かれている。全体として、いわゆる奴風形の埴となることかわかる。B類。

42は扁平で分厚い粘土板状の破片で、表裏の対応する位置に水平な凸帯が貼られている。同一個体とみられる43が円筒部から剝離した基部であることから、盾もしくは軋とみてよいだろう。A類。

#### 家形埴輪(45、49)

44と45は、屋根部に幅の狭い木口状工具を用いて三角文を描いた家形埴輪片で、同一個体とみられる。垂直な壁体の上端に断面三角形の凸帯を貼って軒を表現している。B類。

46も45と同様の方法で軒の表現を行っている。A類。

第6図のへは、壁面で、左端は隅部になっている。刀子穿孔によって出入口が表現されているが、左右対称形とみれば、凸字形になる。B類。

47と48は緩い曲面をなしているが、巻き上げでなく、粘土板を曲げて成形している。内側に本体部との接合をはかるための粘土が貼り付いている。同一個体であり、共に、寄棟造の家形埴輪の妻側の屋根と推定される。B類。

49は、吹き放ちの家形埴輪の円柱部である。分厚く頭丈に製作されており、

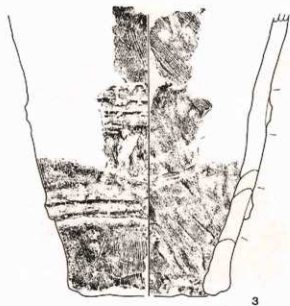
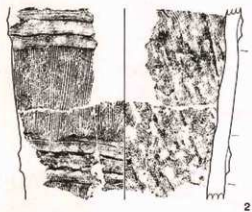
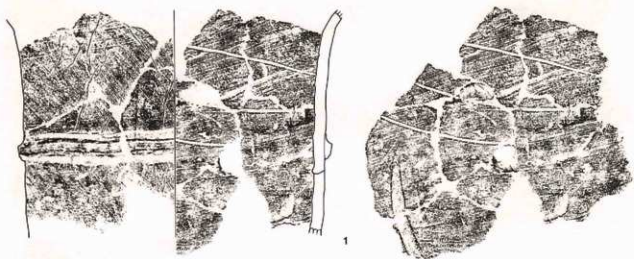
上端ではさらに器壁を厚くして開口部を小さくしている。床面をはさんで、さらに柱が接合されていたとみられる。A類。

### (三) 須恵器(第6図・イ・ロ・ハ)

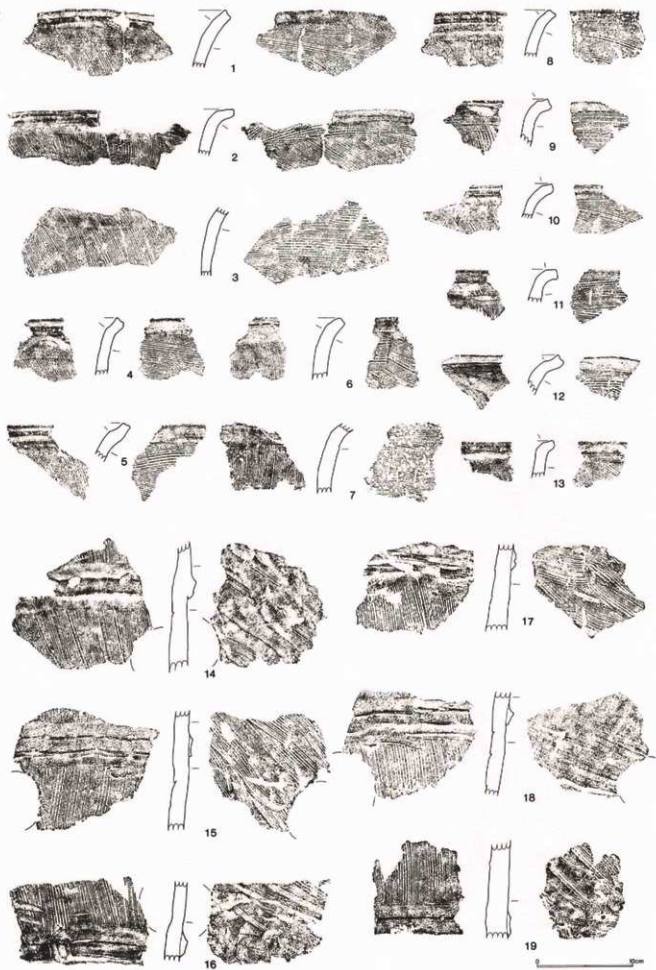
イは口径二〇セリ程の壺の口縁部で、端部は平坦に仕上げられている。口縁部直下には、細い凸帯が巡る。波状文は振幅の小さいもので、施文法がロと共通する。胎土中に砂礫を少量含む。焼成は良好。内外面は青灰色(5B6/1)、器肉は橙色(5YR6/6)を呈する。

ロは口径一六セリ程の小型の壺の口縁部で、口唇部外面には幅の広い凸帯が巡らされている。外面には振幅の小さい波状文が描かれている。胎土に白色粒を少量含む。焼成堅緻。外面は自然釉出によって青黒色(5B2/1)、器肉は青灰色(5PB6/1)。

ハは小型甕の胴部破片である。外面は平行叩き成形の後、幅の狭いヨコナデを間隔をおいて施している。内面は同心円状の当て具痕が残るが、その上には、雑なナデが加えられている。胎土中に白色の砂礫を少量含む。焼成は良好。内外面は緑灰色(10GY6/1)、器肉は橙色(5YR7/6)を呈する。(若松 良一)

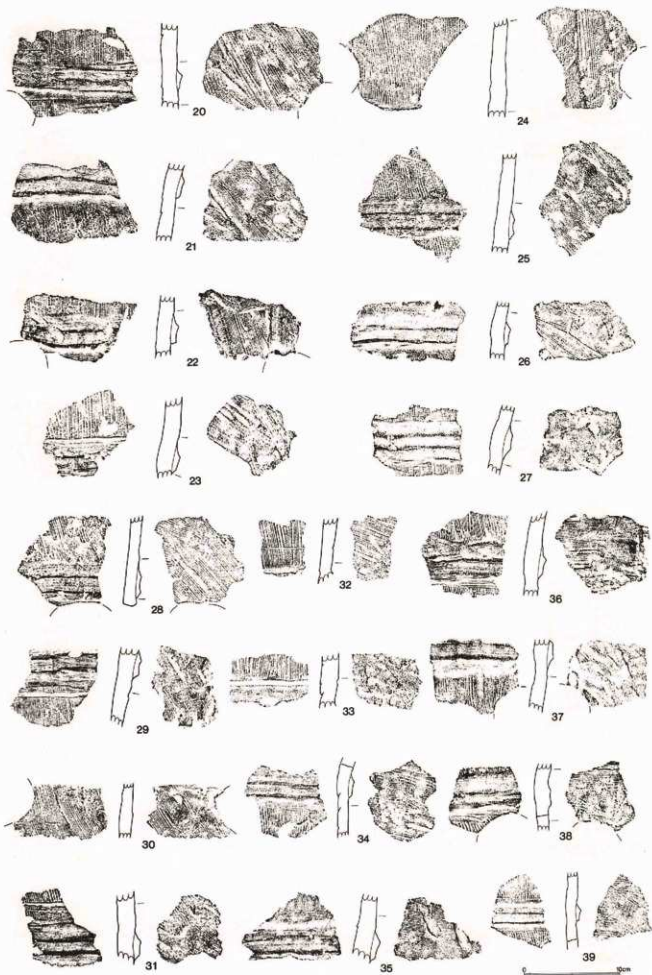


第7図 奥の山古墳出土遺物1 (円筒埴輪復原図1~5)

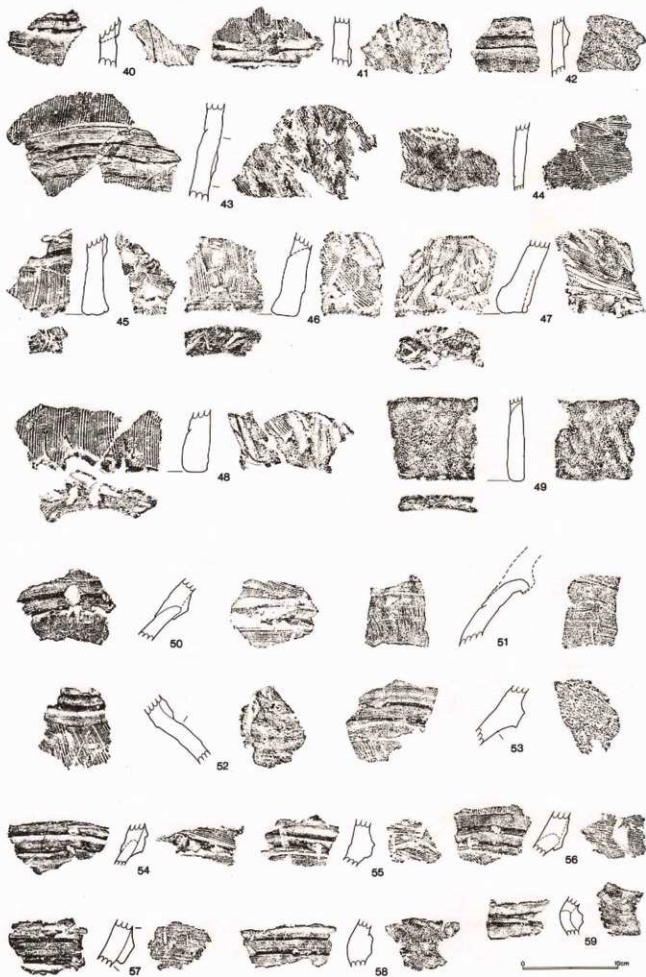


第8図 奥の山古墳出土遺物2 (円筒埴輪拓影図1~19)

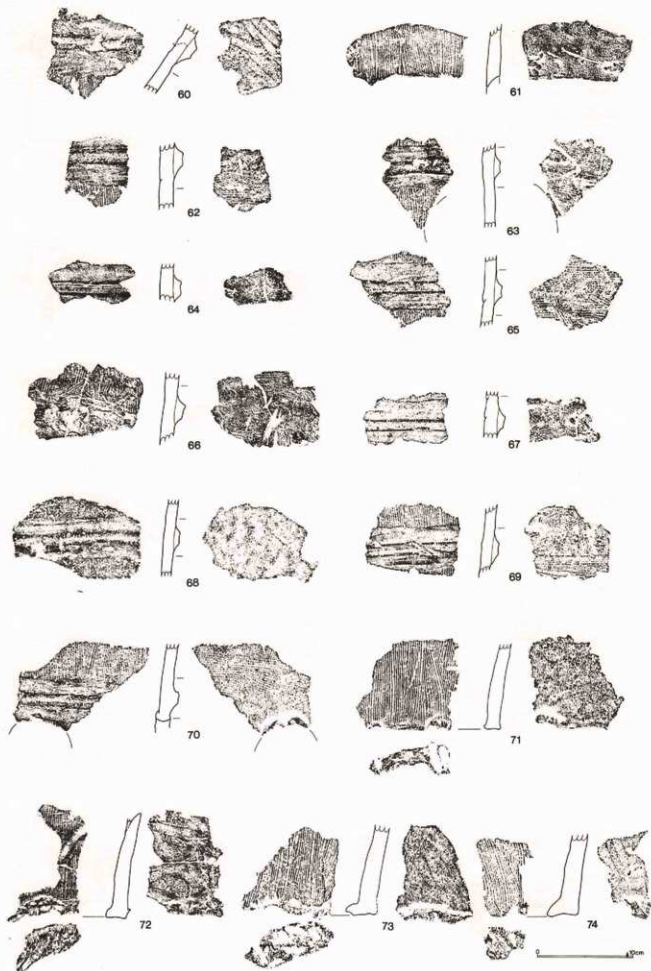




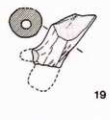
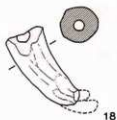
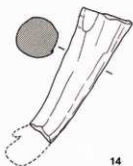
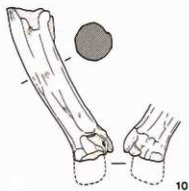
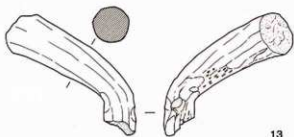
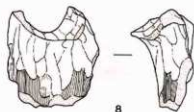
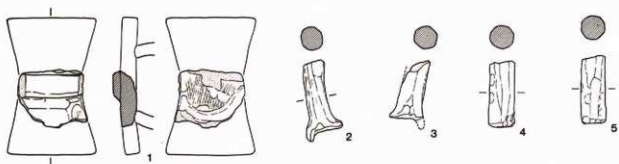
第9図 奥の山古墳出土遺物3 (円筒埴輪拓影図20-39)



第10図 奥の山古墳出土遺物4 (円筒埴輪拓影図40~59)



第11図 奥の山古墳出土遺物5 (円筒地輪拓影図60~74)

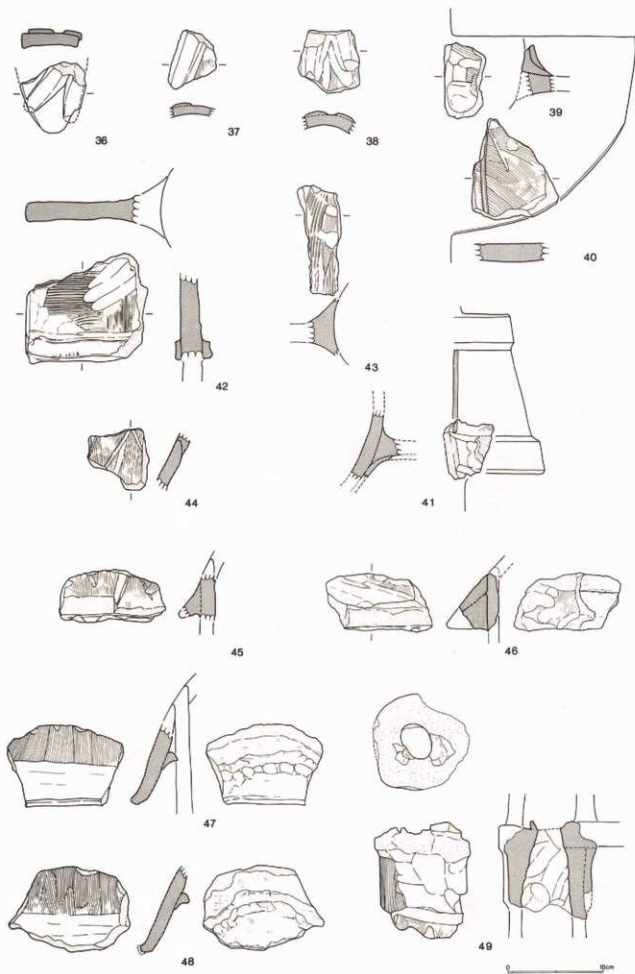


0 2cm

第12図 奥の山古墳出土遺物6 (形象地輪実測図1~19)



第13図 奥の山古墳出土遺物7 (形象埴輪実測図20~35)



第14図 奥の山古墳出土遺物 8 (形象埴輪実測図36~49)

### 三小 結

#### (一) 奥の山古墳の墳丘と周堀について

奥の山古墳は埼玉古墳群の南寄りに位置する前方後円墳で、後円部の北東には鉄砲山古墳、東には中の山古墳が近接している。

古墳の周堀は畑地として耕作されており、そのため古墳と畑地とを区切る根切り溝が古墳の裾をめぐり、墳丘のところどころが大きくカットされている。また畑地化のために裾部が徐々に削り取られ、本来の墳形がそこなわれていることが考えられる。

周堀の確認は三本のトレンチ調査によって行った。その結果、奥の山古墳の堀は一重の堀である事が確認された。周堀の幅は、前方部南側で一二呎、後円部では一四呎という規模となる。この数値から周堀までを含めた古墳の全長は約九〇呎ということになる。

周堀は、地山のローム層を掘り込んで造られていることから、古墳はローマ台地上に築造されていることがわかる。

鉄砲山古墳と奥の山古墳の間に設定した奥の山第1トレンチ、鉄砲山第4トレンチの調査から、鉄砲山古墳は二重の周堀を有する前方後円墳であることが確認できた。鉄砲山古墳と奥の山古墳の間は約四〇呎程しか離れていないため、周堀の切合関係から、古墳築造時期の新旧が確認できるのではないかと予想していたが、両者の周溝どうしの切り合いは認められなかった。

ただ鉄砲山古墳と奥の山古墳にはさまれた地域の鉄砲山古墳前方部の周堀は同古墳後円部西側に同時に設定した第1〜3トレンチ内で検出された周堀

に比べて著しくせまくなるという事実が確認された。

このことを以って鉄砲山古墳が、奥の山古墳の周堀をさけたための現象であると、とらえることはできないであろう。鉄砲山古墳はその後、昭和五四年〜五八年の調査によって周堀の形がだいぶ明らかとなったが、それらの資料を合わせ、周堀の形を復原すると、前方部がやや広くなる将棋の駒形に近いものが推定される。

奥の山古墳の周堀は、調査のデータをもとに他の前方後円墳のごとく長方形に復原した場合は、北コーナーで鉄砲山古墳の周堀と重なり部分を生じる。しかし、周堀の形が仮に楕円形か、剣形であれば、重複は避けられる。

すでに奥の山古墳周堀は復原が行われているが、現在の復原の形が必ずしも定まったものではなく、残されている阿古墳の空間部分に、改めて確認の調査を行い、それにより明らかになった結果を待ってから論を進めても遅くはないであろう。

今回の調査によって得られた出土資料は極めて少ない。図示した墳輪のほとんどは、周堀復原整備の過程で採取されたものである。これらの資料は出土地点が正確ではないため、墳輪祭祀全体の構成を復原するには根拠に乏しいが、造り出し付近からまともな出土した事を考慮すれば、墳輪の組成からその一端を理解することはできよう。また土器からの古墳築造時期比定は資料不足である。

奥の山古墳は、さきたま古墳群の前方後円墳の中で、唯一の一重堀を有する古墳であり、他の古墳とは大きな違いを示している。これらの問題点をふまえて、埼玉古墳群の中で奥の山古墳の位置づけを明確にする必要がある。

## (二) 奥の山古墳の埴輪について

### 形象埴輪

奥の山古墳からは人物埴輪、動物埴輪、器財埴輪、家形埴輪の各種破片が出土している。まず、人物埴輪のうち、全体像の把握できるものに彈琴像(9・11・14)一体と騎馬男子像(26・29)一体がある。このほか、板状の甕(1)からは女子像一体、三個体分の甕の鏝片(20・21・22と23)からは三体の甲冑着用男子像の存在を知ることができる。頭椎状の大刀三点(30・31・ホ)と刀子(32)は、甲冑着用男子像と彈琴像に伴っていたものと推定される。手首をひねって左腰の大刀の柄を握る形態の右腕(13)があるので、抜刀する姿態を表現したものであろう。

動物埴輪には鹿(33)と鶴馬(34)が一体づつある。

器財形埴輪には大刀形埴輪が最低二個体(36・37・38)ある。このほか、39・41から穀形埴輪、42・43からは盾形埴輪が一個体ずつ復原できる。

家形埴輪は、屋根にヘラ描きの連続三角文のあるものが一棟復原され、妻側には凸字形の出入口(へ)が付くものと推定される。47と48からは寄棟造りのものがさらに一棟復原される。49は吹放ちの建物の円柱である。46は同一個体の棟の部分と推定される。

これらの形象埴輪は奥の山古墳の埴輪祭祀の一端を示すものであるが、組成に瓦塚古墳との共通性が認められる。出土位置からみて造り出以上に集中して配置された可能性が高く、家形埴輪と吹放ちの建物を中心に、彈琴像や女子像、甲冑を着け、抜刀するスタイルの武人や騎馬人物像が配置されたものと思われる。

このうち、四弦琴を撥で彈奏する彈琴像、下端に突起の付いた大豆貝、円柱表現の吹放ちの建物、妻に凸字形の入口のある家形埴輪、中空式の腕と粘土紐によって五指を表現する手については、瓦塚古墳に類例がある。このことは、奥の山古墳と瓦塚古墳の形象埴輪を製作した工人が、互いに密接な関係をもっていた可能性を示しており、時期的にも近接することが推定される。

### 円筒埴輪

奥の山古墳の円筒埴輪はすべて密窯焼成品で、外面調整はタテハケもしくはナナメハケで、ヨコハケは認められない。透孔はすべて円形である。胎土の相違から、主にA類とB類に分類され、二箇所からの供給が推定されるが、A類とB類には時間差の存在する可能性もある。

A類の円筒埴輪は三条凸帯と推定される小型品で、底径は一六・一七センチメートル、二〇代前後のものがある。口径は三四代前後のものがある。器形は、底部から口縁部に向かって徐々に開くものとなる。また、凸帯は断面が低いM字形または低台形状で、ヨコナデ調整も雑なものが多い。しかし、各段の配分がほぼ均等で、第一段が長大化していない点は、同じ三条凸帯の愛宕山古墳例(特に同古墳のB類)と比較して古い要素といえる。

B類は断面台形の整った凸帯をもち、内面のハケ調整の後、ナデを加えており、丁寧な製作である。これらの特徴は、白色針状物質を含み胎土の共通する瓦塚古墳のB類よりも古相といえる。

C類では、第7図の1が、寸胴な器形をもつ大型品で、外面にナナメハケ調整を用い、凸帯の突出度が強く、古い様相をもっている。

奥の山古墳の築造時期は、埴輪の特徴から、六世紀中葉でも早い時期に比定することができよう。

(若松 良一)



## IV 瓦塚古墳の調査

### 一 遺 構

瓦塚古墳は、昭和五十四年度に前方部南側周堀部分約五二〇平方呎を調査したのを初めとし、埼玉県教育委員会により、昭和五十七年度は、墳丘西側周堀部分約一三〇〇平方呎が調査された。これらの調査で、二重に巡る周堀と、西側くびれ部の造り出し、中堤と外堀外部を結ぶブリッジ等が検出され、人物埴輪や家形埴輪を含む多くの埴輪片が出土している。さらに昭和六一年度には、行田市教育委員会により、後円部北側周堀部分約四〇〇平方呎が調査された。この調査は個人住宅建設に先立つもので、昭和五十七年度調査区と市道を挟んで隣接する地点が対象区であった。

県教育委員会による昭和六一年度の調査は、墳丘東側部分の墳丘基底ライソンの検出と、東側くびれ部の造り出しの有無、また墳丘削平部における内部主体と関連する遺構の有無等を主な目的としたものであった。

調査区は、三本のトレンチと、一本のトレンチの両側に拡張区を設けた地点の四箇所に分けられ、北から第1トレンチ、第4トレンチ、第2トレンチ及び拡張区、第3トレンチの順である。

#### 第1トレンチ

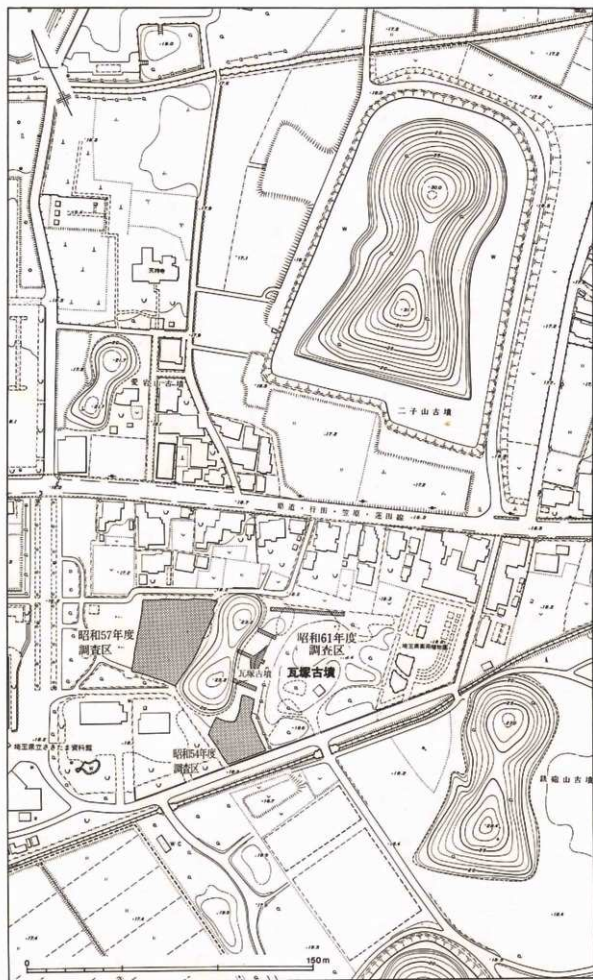
幅二呎、長さ三三呎のトレンチである。民有地と隣接地点に設定したもので、境界線からやや離れた位置に、それにそよような形で設定した。後円部東側の墳丘削平部から外堀推定位置にかけて設けたもので、内堀・中堤・外

堀が検出された。内堀墳丘側立ち上がりは、下端から一五呎程度で墳丘側に屈曲し緩やかに立ち上がり、途中に微弱ながら屈曲点を有し、旧表土と考えられる層で明瞭な上端をなす。周堀の覆土は、最下層の第12層・第13層が、粘性が強く、鮮黄色ローム粒子・ブロックを含む黒褐色土層であった。

内堀の中央付近には、周堀底部にまで達する溝があり、これは古墳周辺が公有地化される以前まで使用されていた水路が埋まったものである。水路を隔てて周堀の覆土の様相は異なり、中央部最下層である第7層には、ぶい黄褐色土層で、その上に黒褐色土層が堆積している。上層には、天明二年（一七八二年）の浅間山火山降下パミス（浅間Aパミス）と思われる白色粒子を含む褐灰色土・黄灰色土があり耕作土と思われる。最上層には、公園化後の客土がある。内堀の底部は中央に向けて僅かに傾斜しており、最も低い部分で標高一七・〇呎である。現地表から約一・六呎下である。

中堤の幅は、黄褐色ローム面のトレンチ方向の距離で七・一呎を測るが、トレンチが中堤に対し斜めであるから、垂直方向に直すと約六・五呎になる。中堤の黄褐色ローム上には、ぶい黄褐色土層（第18図横線のスタリントーン）があり、黄褐色ロームから旧表土への漸移層（第2トレンチD層）に相当するものと思われる。検出した中堤の漸移層最上部の標高は一七・九呎であり現地表から六〇センチ下である。

外堀は、確認面上端での幅約四・七呎（垂直方向に直して）を測る。五十七年度調査区で検出された外堀の幅は六・八呎から七・〇呎を測り、それと比べるとかなり狭いものであった。底部は、内堀同様中央付近に向けて僅かに傾斜し、中央部での標高は一七・三呎であった。内堀中央部は、一七・〇呎であるから三〇センチのレベル差がある。



第15図 瓦塚古墳と埼玉古墳群 (1/2,000)



第16図 瓦塚古墳測量図及び各調査区の位置(1/600 スクリーントーンは周堀部分を示す)

遺物は円筒埴輪片がほとんどで若干の須恵器片を含む。原位置を保っているものは全く無く、周堀中からの出土がほとんどである。破片の分布をみると内堀は中堤寄りに多く、外堀は、密度は薄いもののやはり中堤寄りにめだつ。中堤の幅が六・五層あることから、中堤には二列の埴輪列があった可能性も考えられる。

### 第2トレンチ・拡張区

くびれ部に設定した幅一層、長さ一三・五層のトレンチで、後にトレンチの両側に、南北一八層の拡張区を設定した。くびれ部下端は、比較的良好な状況で検出された。昭和五七年度の調査で、墳丘西側くびれ部前方部側には造り出しが付設されていることが確認されたが、今回調査した拡張区は主軸線を中心とした場合、造り出しと対称の位置にあたり、東側には造り出しがないことが確認された。

内堀の立ち上がりは、第1トレンチ同様、周堀下端から三〇代<sup>代</sup>から四〇代<sup>代</sup>上方で傾斜変換点をもち緩やかに立ち上がる。拡張区の北側は明らかに後世の遺構により立ち上がり部分が削られている。また周堀立ち上がり下部には三箇所小さな段になる部分があり、調査担当者の中には、墳丘部へ登るための足がかりとする意見もある。

### 第3トレンチ

前方部東側のくびれ部と、昭和五四年度調査区の設定した幅一層、長さ約一三層のトレンチである。周堀の立ち上がり下部は、他のトレンチと異なり急角度で立ちあがる。(仰角で六〇度弱) 上半は他のトレンチ同様緩やかな傾斜面をなす。覆土下層は黒褐色土層であった。第3トレンチX層は、周堀の覆土とする意見と、基盤層(黄褐色ローム層)の表面の組織が、温湿

度・植物等の自然的要因により部分的に破壊され、一部上層の土と混在するように見えるもので本来基盤層と考える意見がある。

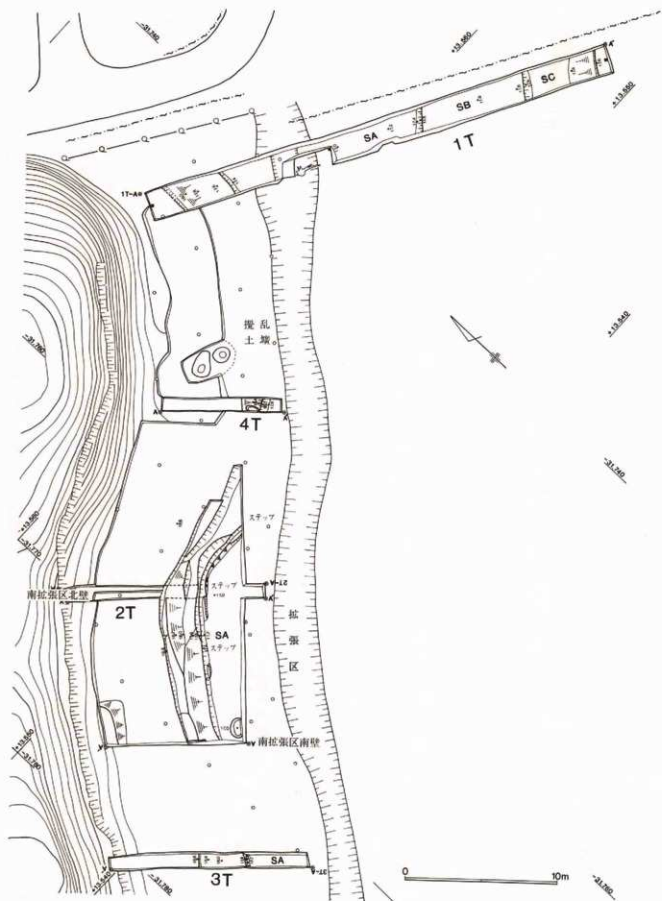
### 第4トレンチ

第1トレンチと第2トレンチのほぼ中間の墳丘削平部分に設定したもので幅一層、長さ約八層である。旧表土及び墳丘盛土と思われる土層が検出された。第4トレンチで確認された落ち込みは、くびれ部北拡張区で検出された周堀立ち上がりを削平している後世の遺構に続くものと思われる。この落ち込みはさらに調査区東側を走る水路により切られている。周堀の立ち上がり部はトレンチの範囲内では検出されず水路により切られている可能性が高い。その他の遺構

第2・3・4トレンチで旧表土と考えられる層上に墳丘盛土と思われる層を検出した。特に、第2トレンチ墳丘寄りでは、墳丘構築土の状況が観察できた。墳丘構築土は、肉眼での観察では、古墳周辺の基盤層を用いている。黄褐色ローム土や、暗褐色土を主体とする層と、粘性の強い黒褐色土を主体とした帯状の層を交互に繰り返して、斜めに盛土している。基本的には、昭和六一年度に丸墓山古墳で検出された構築土の状況に似ているものである。

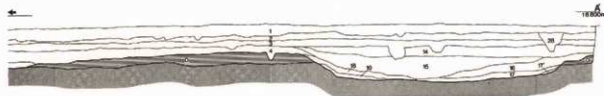
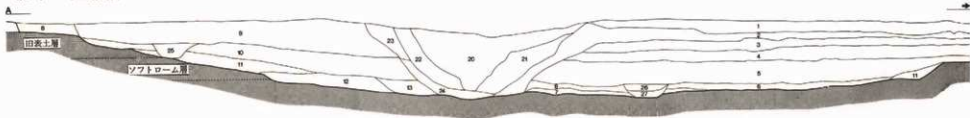
今回の調査では、墳丘が削平された部分に設定したトレンチ及び拡張区周辺の表土を、人力により除去し、遺構の検出作業を行ったが、内部主体に関連する遺構は確認されなかった。また第4トレンチ北側において土壌状の落ち込みを検出したが、攪乱であった。

なお、南拡張区周堀底部と、第4トレンチで検出されたピットは、時期不明のものであるが、覆土の状況から古墳に伴うものではないと判断される。



第17図 瓦塚古墳発掘区全測図 (1/250)

第1トレンチ土層断面



第4トレンチ土層断面



4 土層説明

1. 暗 褐色 土 (10Y R3/4) ロームブロックと黒色粘土ブロックを少量含む、粘性中、しまり中。
2. にじみ黄褐色土 (10Y R4/3) ロームブロックのふやけ土を、斑点状にまみれなく含む、鮮黄色ローム粒子を少量含む、粘性強、しまり強。
3. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ローム粒子、地上粒子、白色輝石を少量含む、粘性中、しまり強の硬塊。
4. にじみ黄褐色土 (10Y R4/3) 第2層に似る、粘性中、しまり中。
5. 暗 褐色 土 (10Y R3/2) ロームブロック、黒色粘土ブロックを少量含む、粘性中、しまり強。
6. 暗 褐色 土 (10Y R3/2) ロームブロックを多量に含む、粘性強、しまり中。
7. 暗 褐色 土 (10Y R4/2) ローム粒子とソフトロームを少量含む、粘性弱、しまり弱。

8. にじみ黄褐色土 (10Y R3/2) 粘性弱、しまり弱。
9. 灰 黄 褐色 土 (10Y R4/2) 粘性強、しまり弱。
10. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ロームブロック及び黒色粘土ブロックを多量に含む、粘性強、しまり強。
11. 灰 黄 褐色 土 (10Y R4/2) ハードローム粒子ブロックをやや多く含む、全体に白色輝石を含む、粘性中や強、しまり強の硬塊。
12. 暗 灰 黄 褐色 土 (2.5Y 4/2) 白色輝石を全体に多量に含む、ローム粒子を少量含む、粘性中や強、しまり強の硬塊。
13. 灰 黄 褐色 土 (10Y R4/2) 白色輝石とローム粒子を少量含む、粘性弱、しまり中。
14. 暗 灰 黄 褐色 土 (2.5Y 4/2) ローム粒子を多量に白色輝石を少量含む、粘性強、しまり強。

1 土層説明

1. 黄 褐色 土 (2.5Y 4/3) ロームブロックの両側の硬土。公営化の際の硬土。
2. 黄 褐色 土 (2.5Y 4/3) 白色パリスを少量、灰を微量含む、粘性中や強、しまりや中強。
3. 暗 褐色 土 (10Y R4/1) 白色パリスをまみれなく少量に含む、粘性中や強、しまり強の硬塊。
4. 灰 黄 褐色 土 (10Y R4/2) 白色パリス、地上粒子、ローム粒子、灰を少量含む、粘性強、しまり強。
5. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ローム粒子、地上粒子を多量に含む、白色パリス、灰を少量含む、粘性強、しまり強。
6. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ハードロームブロックを少量含む、粘性強、しまり中。
7. にじみ黄褐色土 (10Y R4/3) 赤味の強いハードロームブロックを大量に含む、粘性強、しまり中。
8. 黒褐色粘土(田表土)のふやけ土 耕作によりローム粒子を多量に含む。
9. 暗 褐色 土 (10Y R4/4) ローム粒子を多量に、黒色粘土ブロック、灰白色粘土ブロックを少量含む、粘性強、しまり強。
10. にじみ黄褐色土 (10Y R4/3) ロームブロックのふやけ土によって白味を帯びる、粘性強、しまりや中強。
11. にじみ黄褐色土 (10Y R4/3) 粘性強の硬塊、しまりや中強。
12. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ロームブロックのふやけ土を大量に、鮮黄色ローム粒子を少量含む、粘性強、しまりや中強。
13. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ロームブロックのふやけ土、鮮黄色ロームブロックを少量含む、粘性強の硬塊、しまり中や強。
14. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) 白色パリス、ローム粒子、地上粒子をまみれなく少量含む、粘性中や強、しまりや中強。
15. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) 白色パリス、ローム粒子をまみれなく少量含む。
16. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ロームブロックのふやけ土を多量に白色パリスを少量含む、粘性強、しまりや中強。
17. にじみ黄褐色土 (10Y R4/3) ロームブロックのふやけ土を多量に含むため白味が強い、鮮黄色のローム粒子を少量含む、粘性強の硬塊、しまりや中強。
17. にじみ黄褐色土 (10Y R4/3) 高知は17層と一致するが鮮黄色ロームブロックを少量含む、粘性強の硬塊、しまりや中強。
18. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ロームブロックのふやけ土を含むために黄味を帯びる、ローム粒子を少量含む、粘性強、しまり中。
19. 暗 褐色 土 (10Y R4/1) ソフトロームの粒状主体、粘性強、しまりや中強。
20. 灰 黄 褐色 土 (10Y R4/2) コングリートの、ガラス、ビニール、木材等現代のゴミを大量に含む。
21. 暗 灰 黄 褐色 土 (2.5Y 4/2) 鮮黄色ロームブロック、白色パリスを少量含む、粘性中、しまり中強。
22. 灰 黄 褐色 土 (10Y R4/2) 粘性中、しまり弱。
23. 灰 黄 褐色 土 (10Y R4/2) ロームブロックを少量含む、粘性弱、しまり弱。
24. にじみ黄褐色土 (10Y R4/3) 粘性中、しまり中。
25. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) ロームブロックを少量含む、硬土。
26. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) 赤味の強いハードロームブロックを少量含む、粘性強、しまり強。
27. 黒 褐色 土 (10Y R3/2) 赤味の強いハードロームブロックを少量含む、粘性中、しまり弱。
28. 灰 黄 褐色 土 (2.5Y 4/2) 灰を多量に含む、硬土。

第18図 瓦塚古墳土層断面図1 (1/80)





第20图 瓦冢古墳遺物出土位置图 (1/150)



## 二 遺物

昭和六一年度の出土遺物には、円筒埴輪片、形象埴輪片、須恵器片、縄文土器片、石器、結晶片岩等がある。大半をしめるのは円筒埴輪片である（總重量二六〇・三グラム）が、周堀内からの出土であり、原位置での検出はなかった。また、ほとんどが小破片であり、全体の器形を知りうるものはないが、昭和六〇年に個人住宅の建築に先だって、埼玉県教育委員会が試掘調査を行った際に、後円部の北側に設けたトレンチ（第16図参照）から、全体を復原しうる個体169が採集されているので、あわせて報告することにした。

以下、種類別に遺物の概要を述べるが、一点ごとの詳細については観察表を作成してある。なお、遺物出土位置図（第20図）及び写真図版の遺物に付した番号は、実測図の番号と共通である。

### 円筒埴輪（第21～36図）

胎土の特徴、焼成の程度、色調の差及び器形や内外面の調整技法、凸帯の形状等の観察結果をもとに、分類の上、説明を進める。

#### A<sub>1</sub>類（29～30・67・69～76・85・123～126）

鮮やかな赤色を呈し、ほとんどが土色粘の赤色（10 R 4 / 8 が主体で、他に10 R 6 / 8・7.5 R 4 / 8）に対応している。砂礫の含有は全体に少ないが、白色ベミスを相当量含んでいる。焼成は良く、堅緻に焼き上がり、表面に光沢をもつものが多い。全体に厚手の製作である。

外面調整はタテハケ、内面調整はナナメハケを施す。71と74の内面は緩いナナメハケの上に、傾斜の急なナナメハケを、72は、緩いナナメハケの上にヨコハケを施している。内面にナデ調整を施す例（76・124）は少ない。

凸帯は断面が台形状で、堅固な作りである。指を当てがってヨコナデ調整を施すために、側面がM字形にくぼむものもある。凸帯に対応する内面には、内面調整後に、指頭圧痕の付く例（70・123・125）がある。

透孔は69・123・124に一部が残るが、すべて円形になるものと思われる。

全体の器形を知りえないが、最下段の75で復原径二六センチ、最上段の30で復原径四〇センチを計ることから、大型の多条凸帯品になるものと推測される。口縁部（30）は緩やかに開く器形である。底部（29・67・76）は、下端が著しく厚く、29では三・六センチを計る。いずれも、底面に脛圧痕が認められる。

#### A<sub>2</sub>類（23・28・31・38・60・107・114・156・168～178）

色調は橙色（2.5 Y R 6 / 6 ないし 5 Y R 6 / 6・6 / 8・7 / 6）を基調としており、胎土中には砂礫をやや多く含む。焼成は良好である。

169は四条凸帯五段構成の大型品で、口径三九センチ、底径三〇センチ、器高六八センチを計る。寸胴な器形を呈し、口縁部は、上方に至ってから、わずかに外反して開く。凸帯の貼られる間隔は第一・二段と口縁部が長く、透孔のある第三・四段が短い。外面はタテハケ調整が施され、その後、断面台形状の凸帯が付けられている。凸帯は水平でなく、一周する間に、うねりをもって上下している。内面は、第二段までは縦方向のナデ、第三段以上はナナメハケ、口縁部にはヨコハケ（若干の傾斜がある）を施している。底部と口縁部の調整は丁寧であるが、胴部では、幅二センチ程の粘土紐を巻き上げた痕が残っている。胴部には、最初に傾斜の緩いナナメハケ調整の後、急傾斜で施文距離の長いナナメハケを重ねている。

底部は、長方形の粘土をまるめて基部としており、下端部がやや厚くなっている。口縁部はヨコナデ調整され、端部と、これに接する内外面に、くぼ

みを生じている。また口縁部直下の外面にも幅広くヨコナデが施されている。透孔は、円形で、一段に対向して二個あけられているが、第三段と第四段では、方向を九〇度ずらしている。胎土中にはチャート、長石、火山ガラス、石英、角閃石、酸化鉄粒、雲母、白色バミス等を含んでいる。

168は口縁部以下三段が残存する。二〇％程の破片からの復原実測であるが、器形と凸帯の形状、内外面の調整技法が169と類似している。

31は二〇％程の破片から復原実測したもので、最大径は三六・六代<sub>16</sub>を計る。内面にヨコハケが施されており、最上段と思われる。23は底部で、復原直径は三〇代<sub>10</sub>となる。内面調整はナナメおよびヨコハケである。

B類(1~22・32~33・35~37・39~59・61~65・86~87・89~106・108~113・115~116・127~138・153~155・157~164)

胎土中に大量の砂礫を含み、一〇パーセントを超える礫も、かなり認められる。目につくのは、長石、チャート、火山ガラス、角閃石、輝石、酸化鉄粒等である。特に注目されるのは、いわゆる白色針状物質を含む点である。

色調は橙色(5 Y R 6 / 4・7 / 4)を基調とするが、浅黄橙色や淡黄色の淡いものもある。130は唯一の赤形例である。

焼成は全般に良好であり、半須恵質のものを含む。淡い色調のものに多い。全体の器形を知りうる資料がないので、部位ごとに説明を進めていく。

口縁部はA類に比べて薄手の製作で、直線的に立ち上がった後、端部だけが外傾するもの(2・35~36・40~44・86~87)が多い。ヨコナデによって、端面と内面には浅い凹線を生じている。外面調整はナナメハケの例(1~2・35~36・39~40・42~43・86・131)が多い。内面調整はヨコハケである。

内面には、ヘラ先でX字状のいわゆる燕印を、陰刻した例(3・45・90・91・128・131・159)がある。復原口径は、35が二八代<sub>10</sub>、157が三四代<sub>10</sub>である。胴部も薄手の作りで、54や115、116は厚さ一代<sub>10</sub>以下である。外面調整はタテハケのほか、ナナメハケ(12・15・53・153・162)もかなりある。

内面調整は緩いナナメハケが中心で、さらに斜位のナデを加える例も多い。凸帯は断面が偏平なM字形を呈するものが多く、透孔はすべて円形である。復原胴部径は、8と17が三〇代<sub>10</sub>、163が三五代<sub>10</sub>、164が二九代<sub>10</sub>である。径の細い49と、小型の円形透孔をもつ6は形象填輪の台部の可能性がある。

底部はA類と異なり、薄手に作られており、下端が著しく厚くなるものはない。器形は、すべて底部から上方へ向かって開くものとみられる。外面調整はタテハケもしくはナナメハケで、上から下へ向けて二回調整する例(32・33・68)がある。内面調整には斜行するナデを用いる例が圧倒的に多い。28と33は緩い傾斜のナナメハケの後に斜行するナデを加える例、155はヨコハケを施す例である。

底部調整技法を伴う例が一点ある。65は倒立して、外面下端部をヨコハケズリし、その後、外面の最終調整(タテハケ)を加えている。復原底径は一六~二一代<sub>10</sub>の範囲(24~27・33・120)が多いが、二四~二六代<sub>10</sub>と、一回り大きいもの(23・28・32)もある。第一凸帯の高さ(32・33・68)は、約一〇代<sub>10</sub>で、プロポーション的には低い位置である。

底面には、細かい条痕が縦に走るヨシ状の圧痕の付く例(24・26・28・137)があり、ヨシを敷いた上に乗せたものとみられる。このほか、ワラ状の圧痕(25)、篋状の圧痕(155)、砂礫の圧痕の付くもの(138)がある。

朝顔形円筒埴輪(34・78~83・140~152・166~167)

胎土中に多量の砂塵と少量の白色針状物質を含むものが多く、内外面の調整や凸帯の形状に円筒埴輪B類との共通性が認められる。

口縁部は、中間に貼られた凸帯を境界にして、上段と下段に分けられる。上段は薄手に作られており、上方に向けて、外反の度合を強めながら開く器形をとる。下段は上段に比べて開きが小さくやや厚手に作られている。凸帯は断面がM字形の低平なもの(34・144・145)と断面台形状のもの(146)とがあるが、後者は、円筒埴輪A類と似た特徴をもっている。34と146では、この部分で一たん乾燥を行った後、上段を接合している。34では現存部の最大径は四一・六センチとなる。これらは外面はタテハケ調整、内面は下段でナナメハケ調整、上段でヨコハケ調整が施され、口唇部はヨコナデされている。

肩部(80・81・83・147・152・167)は張りが小さく、頸部でのくびれ方も小さい。円筒部との境界と頸部に断面M字形の低い凸帯が巡る。外面調整はタテハケ後に、ヨコハケとナナメハケを重ねている。内面は横位もしくは斜位のナデ調整が行われている。

形象埴輪(84・85・203・204)

わずかに四点が確認された。203は人物埴輪の顔面である。ヘラ刺突によって鼻孔を表現する。その他については小片のため種別を明らかにできない。

結晶片岩破片(202)

総量で一六・六パーセントの出土であった。周堀内から埴輪片といっしょに出土したものが多く、第37図の202は、第3トレンチの内堀底(第20図・図版九下段参照)からの出土である。長さ三九センチ、幅一二センチ、厚さ六センチを計り、重量は四・八グラムある。長辺の木口面に細かなハツリ痕が残っている。岩質は緑泥片岩と思われる。

(若松 良一)

須惠器(179・201)

179・181は甕口縁部の破片である。179は推定復原径二四センチを測る。丸味を持った口唇部は短かくつまみ上げた様に立ち上がる。口縁の中心には断面三角形の凸帯をはさんで、上下にほとんど振幅のない細かな一三本の櫛描の波状文を施している。内外面とも横ナデ調整で胎土中に砂粒を含んで、器面がややザラつき、口縁内面に降灰の跡が褐色の斑を呈している。

180は直線的に立ち上がる口縁で、端部は小さく屈曲して玉縁様の口唇を付す。極めて小さい破片からの推定口径で径三五センチを測る。全体に器面を滑らかに横ナデを施し、その上から細かいゆるやかな櫛描の三四〜三八本を数える波状文を施している。胎土は精緻で焼成は良好である。

181は甕の口縁部と思われる。中央に三本を一単位とした浅い沈線をめぐらし、その上下に櫛歯を刺突した列点文を並列している。刺突の間隔は2〜4ミリとバラつきがある。胎土は精緻で焼成は良く、外面は暗青灰色を呈し、内面は淡いセビア色に焼成されている。

182は甕肩部付近の破片である。丸味のあるなだらかな肩部へと移行するものである。口縁との接合部付近には顕著な横ナデ痕がみられ、並行叩きの上からナデ付けが行われており、叩き目がわずかに残る。内面は同心円状の叩き目を施す。色調は暗青灰色で焼成は良好である。

183・190は甕胴部の破片で、色調・焼成等から同一個体の破片の可能性がある。外面は平行叩き目調整が行われ、内面はあて具の痕が微妙な凹凸を作り出し、この上から部分的にナデ付けが行われているものもある。胎土は極めて精緻で器面は滑らかである。外面は青灰色となり、内面及び断面はセビア色で焼成は堅緻である。

191・192は平行叩き目調整が行われている。施文具は木目に直交して彫られているため一見格子目叩きの様な効果があらわれている。191は内面に同心円の叩きが重なりあって調整されている。胎土は精選され、焼成は良好で内外面とも青灰色を呈す。

193～195は外面に降灰でザラつき、平行叩き目調整が行われ、内面はナデ付けられている。器肉はセピア色を呈し、内外面の色調は灰褐色を呈す。

196は内外面に厚く薄黄緑色の自然釉がかかり、両面の調整痕を埋めている。外面は平行叩き目、内面は同心円の叩き目調整が行われている。表面は一部セピア色に焼成された部分がある。

197は外面は降灰でザラつき、内面は同心円の叩き目調整が施されている。焼成は良好で色調は灰褐色を呈す。

198は外面に平行叩き目調整が行われ、叩き目間を二条の浅い沈線によって区分されている。内面は同心円の叩き目が青海波文を作りだしている。焼成は良好で色調は灰褐色を呈す。

199は外面は渦巻状のカキ目調整、内面は同心円の叩き調整を行っている。胎土中に気泡痕がみられ器面が荒れている。焼成は良好である。

200は器台の受部下半と思われる。二〇本の楕圓の波状文の上に三ミリの沈線が横走する。波状文の下には幅二・五センチでカキ目調整が行われている。内面は底部下半から同心円の叩き目がみられ、色調は外面が暗青灰色で胎土は精緻であり、焼成は良好である。

201は器台の脚部と思われる。長方形のスカシがみられる。まばらな波状文が施され器面は丁寧なヨコナデが行われている。焼成は良好で色調は青灰色を呈す。

(駒宮 史朗)

#### 縄文時代の遺物

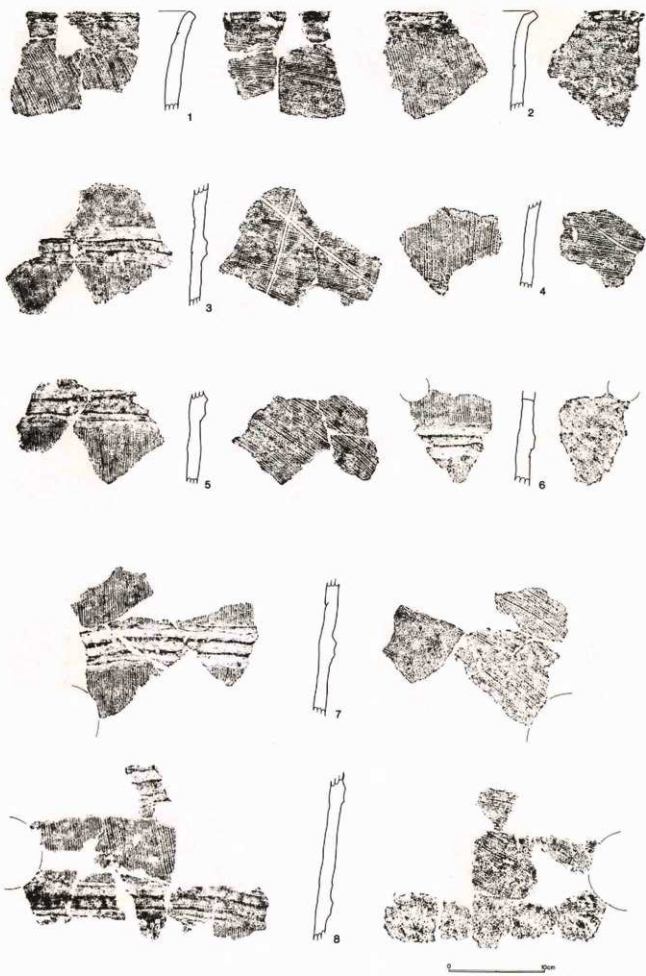
第38図は瓦塚古墳の調査に際して発見されたものである。遺物は周堀の覆土中から、点在した状態で発見された。土器はいずれも小破片で、図示したものが、代表的なものであった。

1～3は口縁部に渦巻文をもつキャリパー形土器の口縁部破片である。1・2とも渦巻の表現は、一本隆帯で、加曾利EⅡ式以降のものもある。3は四単位の山形の突起下に渦巻文が配されよう。EⅡ式でも後半に属する。5も丸棒状の四単位の突起が付く土器で、突起上端の渦巻文と突起外面に付く渦巻文が重なっている。おなじ渦巻文でも渦巻が退化し、地文縄文の上に渦巻を描く。4は口縁部を消失し、「U」字状の懸垂文が下りる土器で、地文を欠く。「U」字の上端はやや角ばっている。5も渦巻の口縁部文様帯を欠く土器で、わずかな無文帯の下に引かれた沈線に刺突文が巡るいわゆる連弧文、あるいは波状文と「U」字懸垂文の組み合わせた土器であろう。

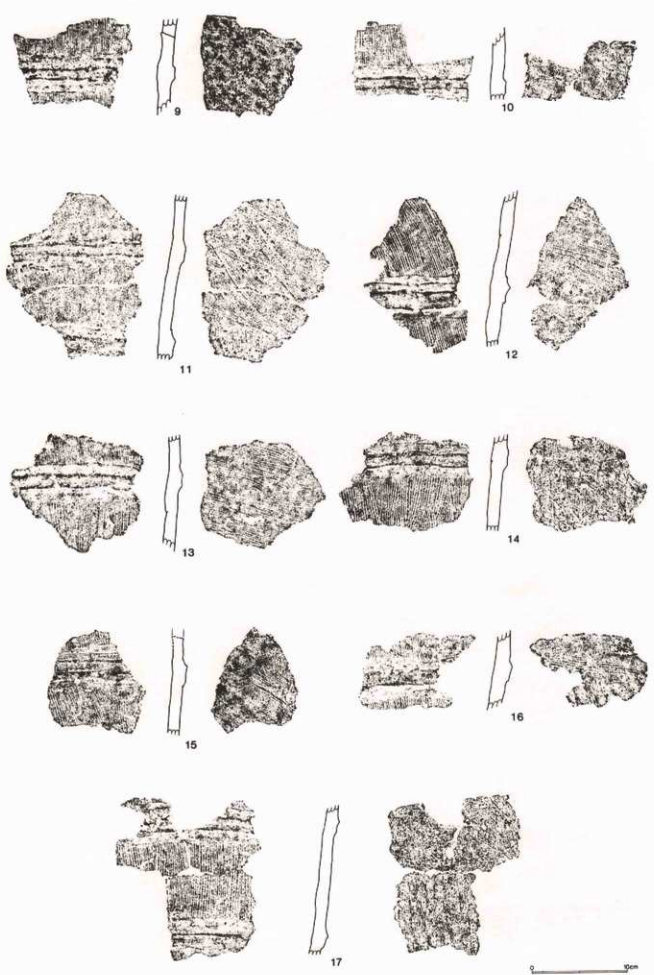
7～14はキャリパー形土器などに付けられる懸垂文を持つ胴部である。7が二本隆帯、8、10が三本懸垂文間を磨り消したもの、11が幅広の磨り消した懸垂文、12、13は胴部下半の破片である。14は薄手で、小形の土器の胴部の張った部分である。頸部のくびれた特殊な器形となるかもしれない。15は地文縄文の器面に大柄な渦巻文が配される大形土器。16は口縁部無文帯下の胴部文様帯を区切る沈線が巡る。

17は分胴形の打製石斧である。裏面には若干の自然面を残す。刃部先端の剝離痕をみると、角の部分がかなり磨耗しており、長く使われたことがわかる。石材の乏しい地域の特徴といつてよい。

(谷井 彪)



第21图 瓦塚古墳出土遺物1 (1-8: 1 T出土円筒地輪)



第22圖 瓦塚古墳出土遺物2 (9~17: 1丁出土円筒埴輪)



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



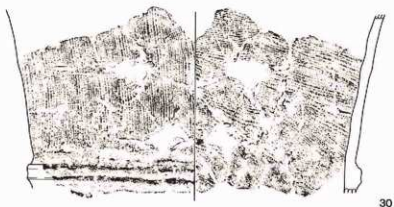
28



29



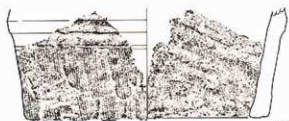
第23圖 瓦塚古墳出土遺物3 (18~29: 1丁出土円筒埴輪)



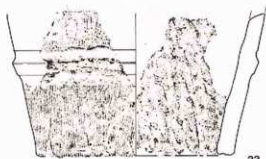
30



31



32



33

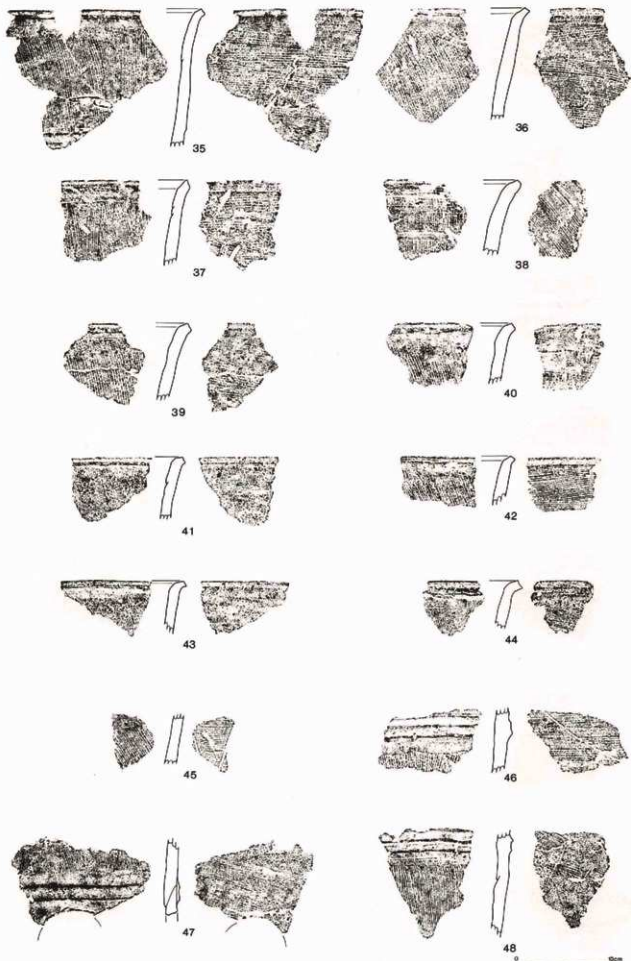


34

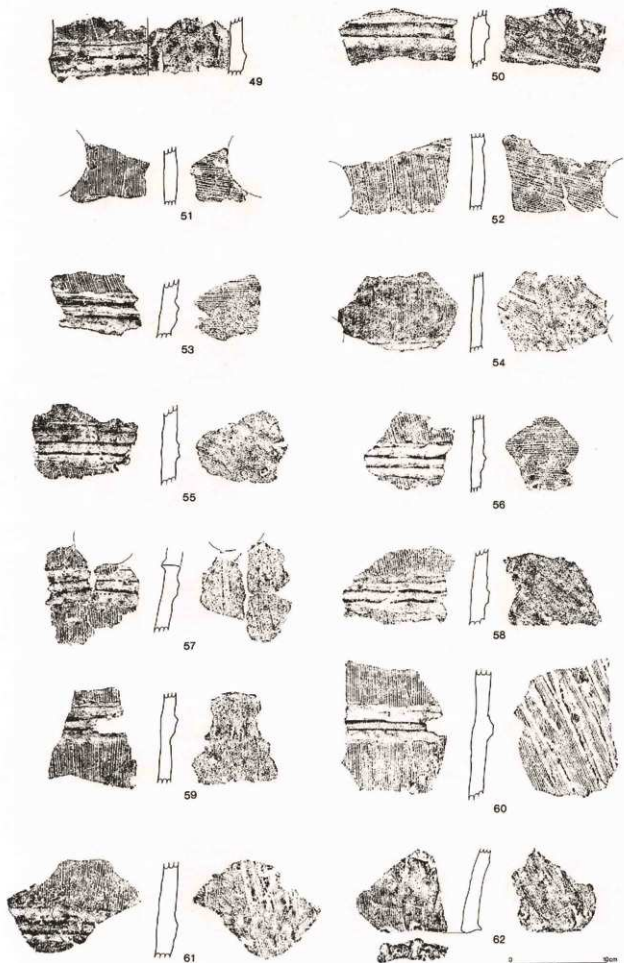


第24图 瓦塚古墳出土遺物4 (30~34:北拉張区出土円筒埴輪)

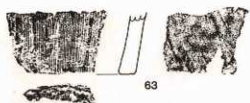




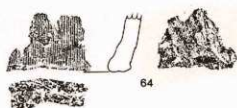
第25图 瓦塚古墳出土遺物5 (35~48:北拉張区出土円筒埴輪)



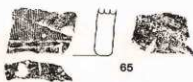
第26图 瓦塚古墳出土遺物6 (49~62:北拉張区出土円筒埴輪)



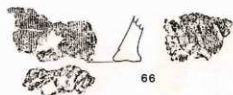
63



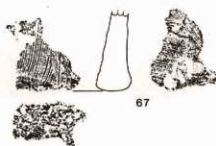
64



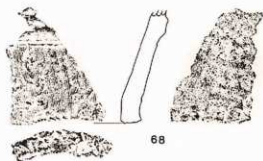
65



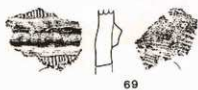
66



67



68



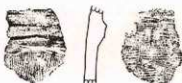
69



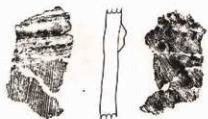
70



71



72



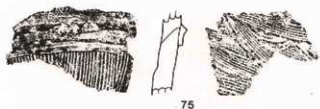
73



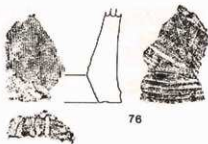
74



第27图 瓦塚古墳出土遺物7 (63~74:北拉張区出土円筒埴輪)



75



76



77



78



79



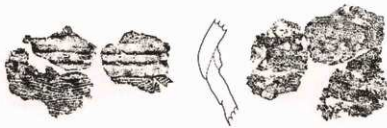
80



81



82



83



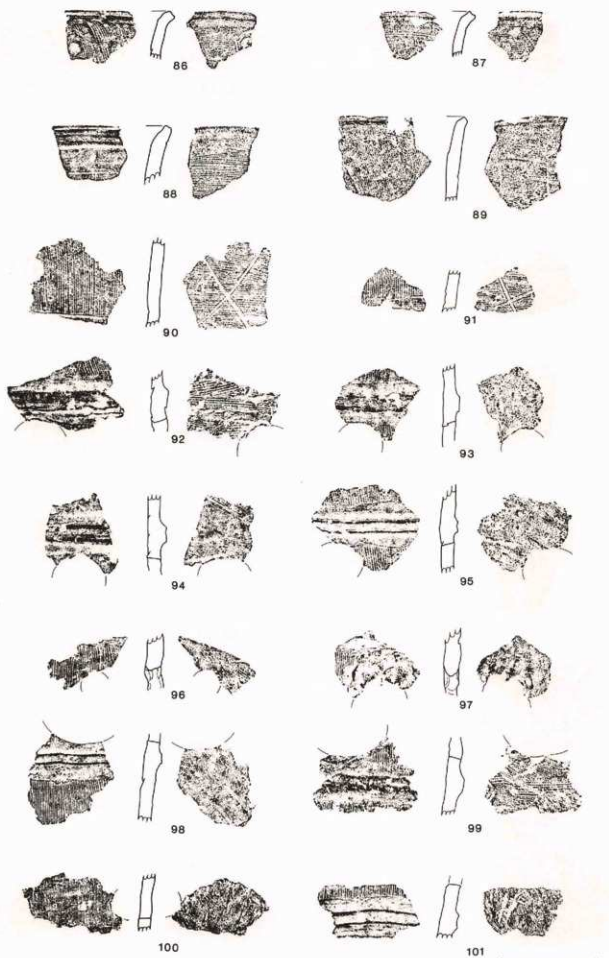
84



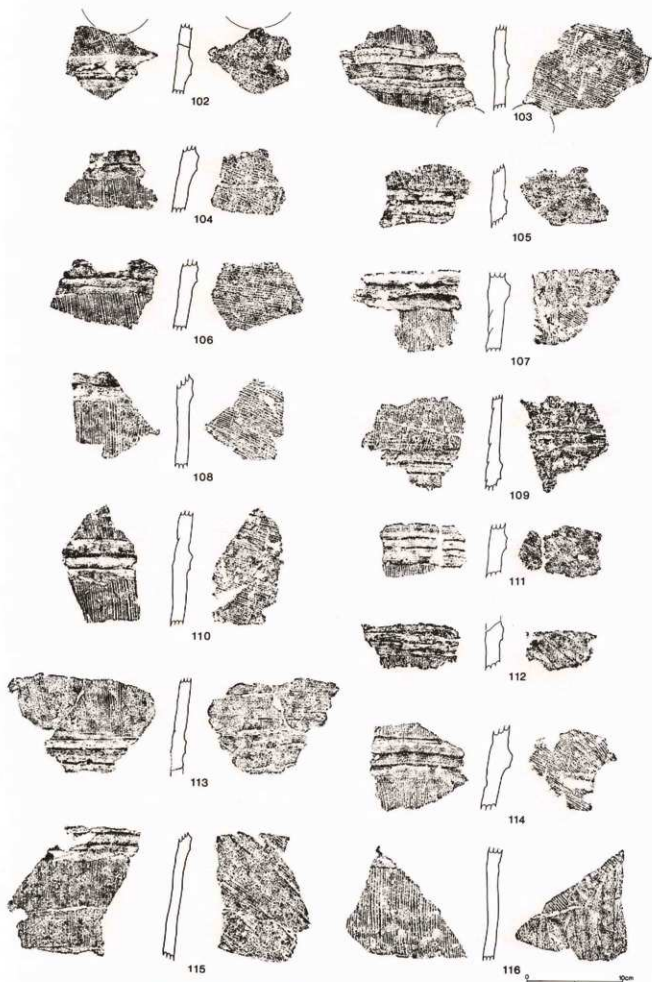
85



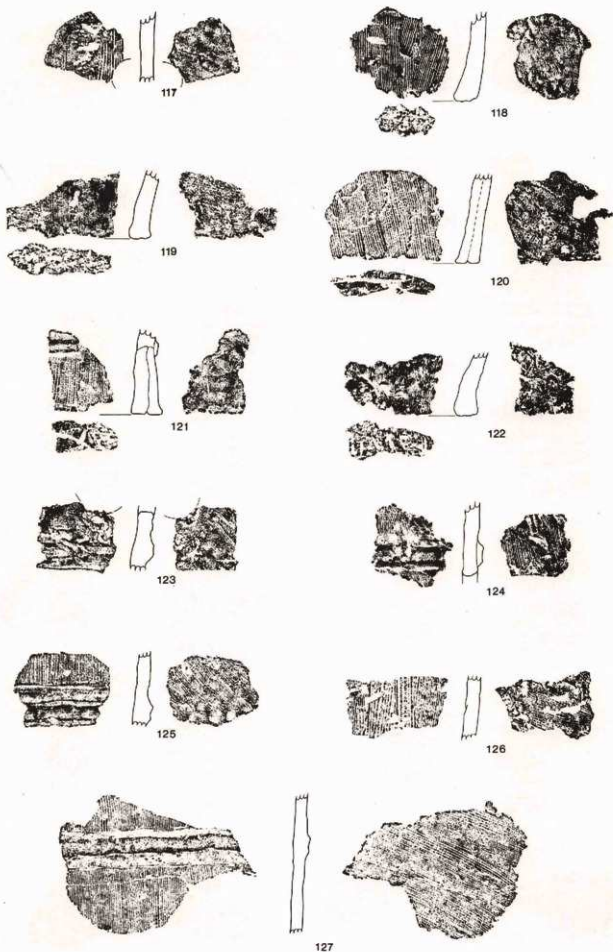
第28图 瓦塚古墳出土遺物 8 (75~85: 北拉張区出土円筒埴輪)



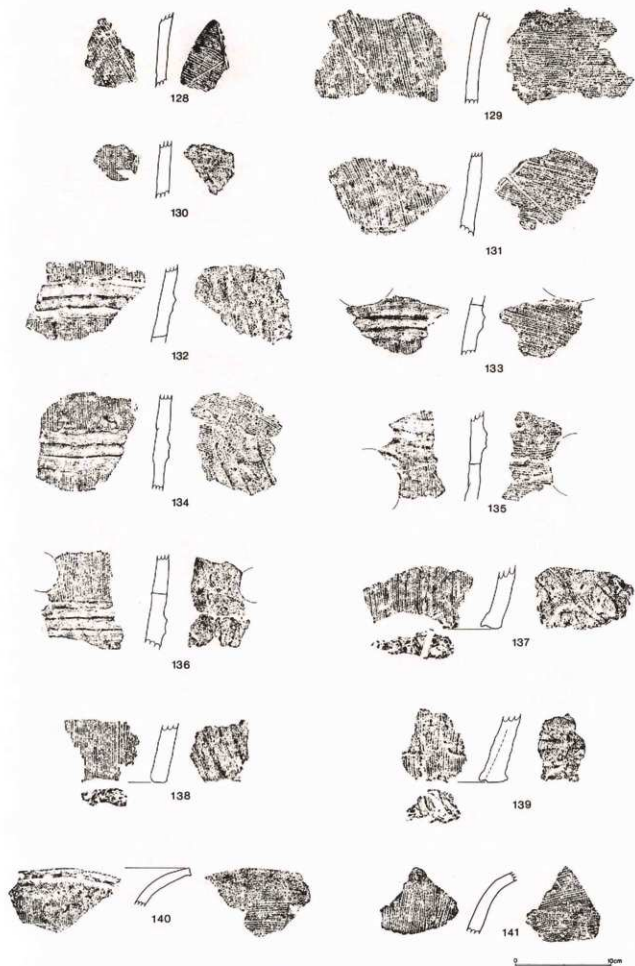
第29图 瓦塚古墳出土遺物9 (86~101:南拉張区出土円筒埴輪)



第30图 瓦砾古墳出土遺物10 (102~116: 南拉張区出土円筒地輪)

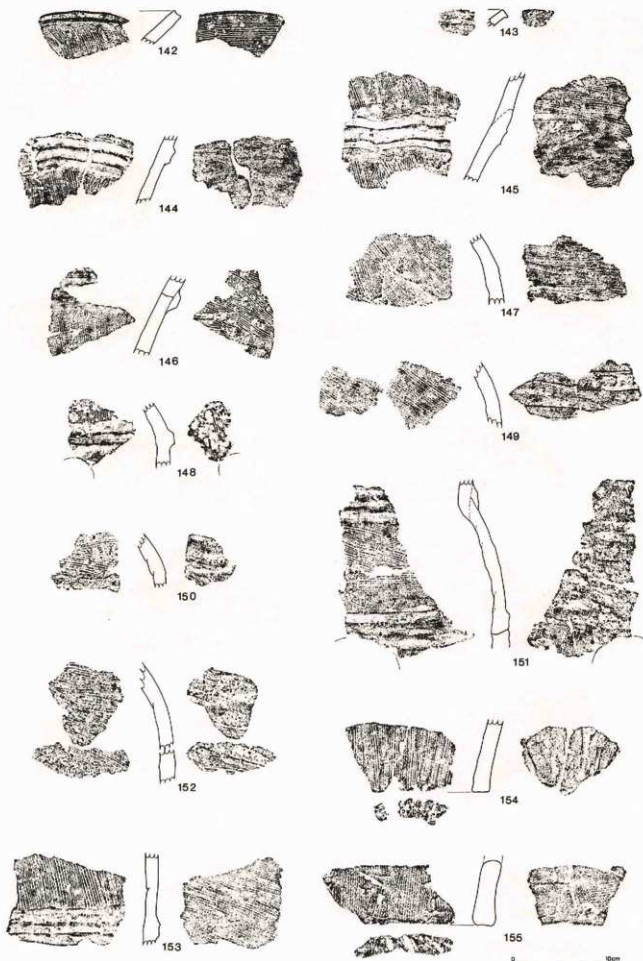


第31图 瓦塚古墳出土遺物11 (117~127: 南拉張区出土円筒地輪)

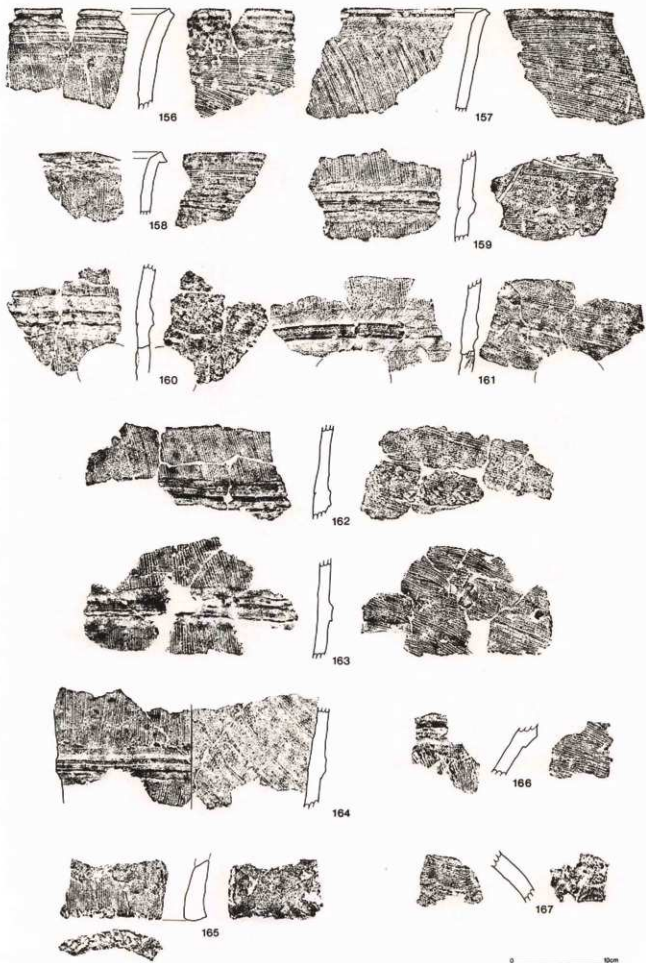


第32图 瓦塚古墳出土遺物12 (128~141: 南拉張区出土円筒地輪)

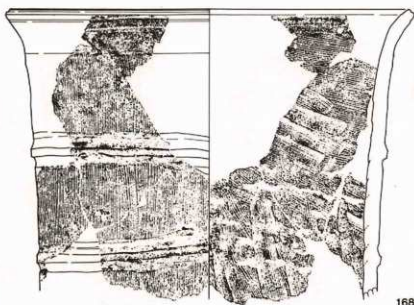




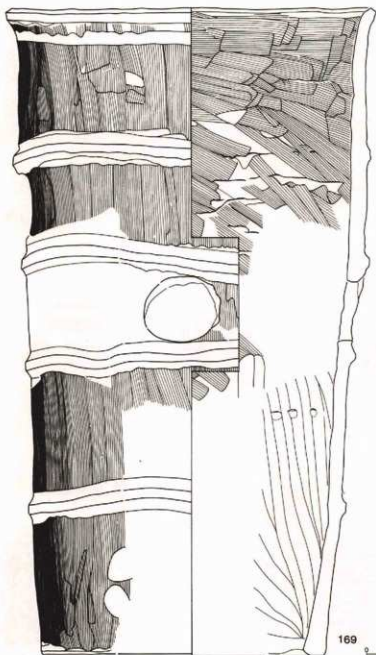
第33图 瓦塚古墳出土遺物13 (142~155: 南拉張区・4 T出土円筒埴輪)



第34图 瓦塚古墳出土遺物14 (156~167: 3T出土円筒地輪)

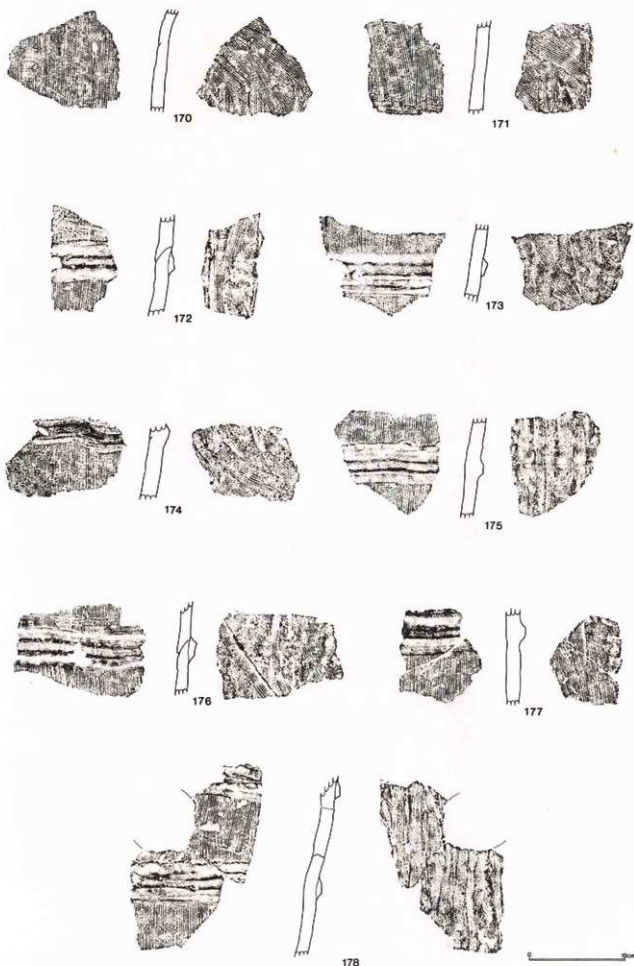


168

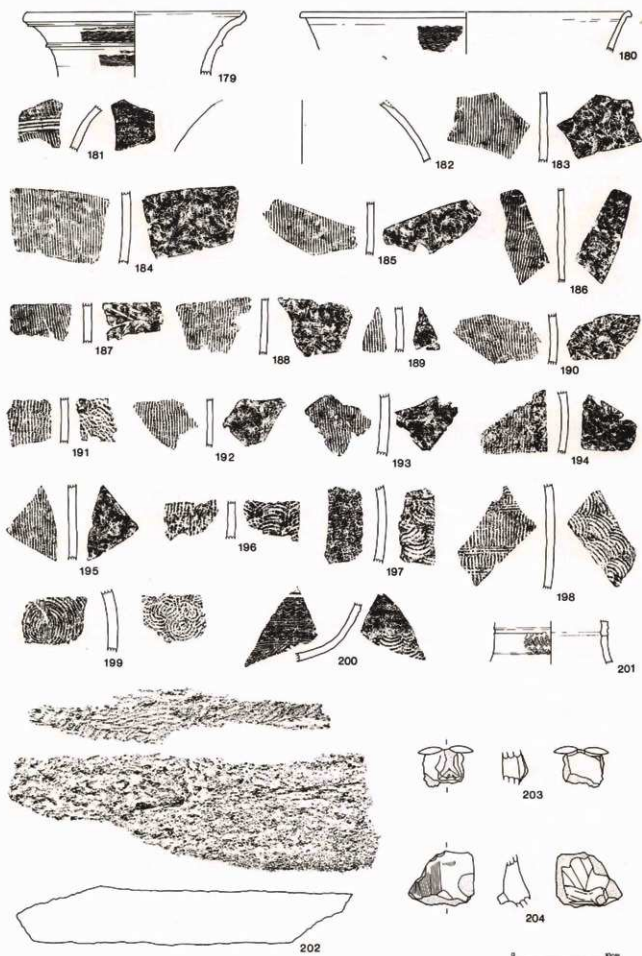


169

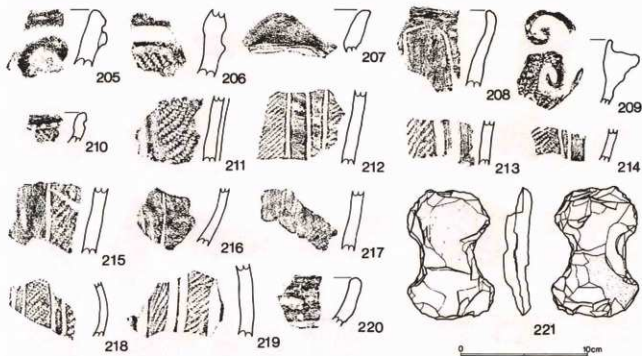
第35圖 瓦塚古墳出土遺物15 (168~169: 昭和60年度試掘出土円筒埴輪)



第36图 瓦塚古墳出土遺物16 (170~178: 昭和60年度試掘出土円筒埴輪)



第37圖 瓦塚古墳出土遺物17 (179~204: 須惠器・形象地輪・石材)



第38図 瓦塚古墳出土遺物18 (205-221: 縄文土器・石斧)

## 瓦塚古墳出土遺物観察表

### 凡 例

- 胎土に含まれる鉱物の名称は次のとおり、略称とした。  
チャート→チ、長石→チ、火山ガラス→火、輝石→輝、角閃石→角、雲母→雲、金雲母→金、石英→石、頁岩→頁、凝灰岩→凝、片岩→片、白色軟質粒→白、酸化鉄粒→酸、白色バミス→バ、白色針状物質→針
- 含有鉱物の内、特に顕著に含まれるものについては、アンダーラインを付した。
- 色調は新版標準土色帖（小山・谷原、日本色研、昭和45年）によった。
- ハケメは比較に便利なように、10本あたりの幅（cm）で表示した。

番号	種 別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備 考
1	円筒埴輪 口縁部	わずかに外反しながら開く。外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。端部は幅広のヨコナデ。	礫・粗砂を多量に含む。 <u>長・チ・火・輝</u> ・針	橙 (2.5Y R6/6)	外 2.4 内 2.0	1 T外堀暗褐色土層出土。
2	"	口唇部が短く外屈する。外面ナナメハケ、内面緩いナナメハケ。	大礫・粗砂を大量に含む <u>チ・長・酸・角</u> ・針	にぶい橙 (5Y R7/4)	外 1.7 内 共	1 T内堀出土。
3	円筒埴輪 体 部	復原胴径28.0cm (20%存)。外面タテハケ、内面緩いナメハケ。内面にX状磨印あり。最上段とみられる。	大礫・粗砂を大量に含む <u>長・チ・角・輝</u> ・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.8 内 共	1 T外堀 (第20図参照)。
4	円筒埴輪 口縁部	口唇部を欠く。外面タテハケ、内面ヨコハケ。内面に磨印。	礫・粗砂を多量に含む。 <u>チ・長・角・火・バ</u> ・針	良好堅緻 橙(5Y R6/6)	外 1.7 内 共	"
5	円筒埴輪 体 部	外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯の断面M字形。	礫・粗砂を多量に含む。 <u>チ・長・火・酸</u> ・針	良好堅緻 橙(5Y R7/6)	外 1.7 内 2.0	1 T東部上層出土。
6	"	外面タテハケ、内面ナメハケの後、斜位ナデ。凸帯から離れて小型の円形透孔あり。	大礫・粗砂を大量に含む <u>チ・長・酸・火</u> ・針	良好堅緻 淡黄橙(7.5Y R8/4)	外 1.8	1 T内堀 (第20図参照)。
7	"	外面タテハケ、内面ナメハケ。下段に円形透孔あり。	大礫・粗砂を多量に含む <u>チ・長・石・輝・火</u> ・針	良好堅緻 橙(5Y R6/8)	外 2.0 内 2.4	1 T外堀暗褐色土層出土。
8	"	復原胴径30.0cm(25%存)。外面タテハケ、内面ナメハケ。円形透孔は刀子切放し。	大礫・粗砂を大量に含む <u>チ・長・火・酸・角</u> ・針	良好堅緻(平須忠實) 浅黄橙(7.5Y R8/6) 昏青灰(5B6/1)	外 2.1 内 1.5	1 T外堀 (第20図参照)。

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (m/10分)	備考
9	円筒地輪 体部	外面タテハケ、内面斜位ナデ。円形透孔は 刀子切放し。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・酸・輝・針	普通 橙(5Y R7/6)	外 2.1	1 T内堀(第 20図参照)。
10	"	外面タテハケ、内面斜位ナデ。凸帯の断面 低凸形。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・酸・輝・針	良好堅緻。にぶい橙 (7.5Y R7/4)	外 1.9	"
11	"	外面タテハケ、内面ナナメハケ。円形透孔 は刀子切放し。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・角・輝・針	不良(軟質) 橙(5Y R6/8)	外 1.5 内 共	1 T東部上層 出土。
12	"	外面ナナメハケ、内面緩いナナメハケ。凸 帯の断面三角形。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・輝・酸・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.9 内 1.7	"
13	"	下段と凸帯を含む上段とで使用粘土が異なる。 下段は白っぽい。外面タテハケ、内面 ヨコハケ。	大礫・粗砂を大量に含む 長・チ・酸・火・針	普通(やや軟質) ①橙(7.5Y R6/8)② にぶい橙(5Y R7/4)	外 2.3 内 共	1 T外堀暗褐色土層出土。
14	"	外面タテハケ、内面ナナメハケの後、縦位 指ナデ。8・17と同一個体。	礫・粗砂を大量に含む。 長・酸・火	良好堅緻(半須志質) 浅黄(2.5Y7/4) 鈔黄灰(2.5Y6/1)	外 2.1	"
15	"	外面タテハケ、内面ナナメハケ。円形透孔 は刀子切放し。凸帯は別の白っぽい粘土を 使用している。	礫・粗砂を大量に含む。 チ・長・火・酸・針・輝	普通。橙(5Y R6/6) 凸帯はにぶい橙 (7.5Y R7/4)	外 2.2 内 1.4	"
16	"	外面タテハケ。内面は緩いナナメハケ、下 部は斜位ユビナデ。第1凸帯と推定。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・酸・角・輝	良好堅緻 橙(5Y R6/8)	外 2.3 内 共	1 T内堀(第 20図参照)。
17	"	復原胴径30.0cm(15%存)。外面タテハケ、 内面ナナメハケの後、縦位及び斜位ナデ。 円形透孔は刀子切放し。	大礫・粗砂を大量に含む 長・チ・火・酸・針	良好極堅緻(半須志 質)にぶい黄橙 (10Y R7/4) 鈔青灰(5B6/1)	外 2.1	"
18	"	外面タテハケ、内面ナナメハケの後、斜位 ナデ。円形透孔は刀子穿孔後指ナデ調整。	大礫・粗砂を多量に含む チ・雲・火・バ・輝	良好堅緻 明赤褐(2.5Y R5/6)	外 1.9	"
19	"	外面タテハケ、内面ヨコハケ。円形透孔は 刀子切放し。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・輝・角・長・バ・針	良好極堅緻 明赤褐(5Y R6/6)	外 1.6 内 共	"
20	"	外面タテハケ、内面ナナメハケ後、斜位ナ デ。内面に接合痕あり。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・輝・火・針	良好堅緻 橙(5Y R6/6)	外 1.6	"
21	"	外面タテハケ、内面ナナメハケの後、斜位 ナデ。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・酸・火・長・角・針	良好極堅緻 橙(7.5Y R7/6)	外 2.1	"
22	"	外面タテハケ、内面ナナメハケの後、斜位 指ナデ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・角・輝・酸・針	良好堅緻 橙(5Y R6/6)	外 2.4	"
23	円筒地輪 底部	底部が肥厚する。復原底径30.0cm(15%存) 外面タテハケ、内面ナナメ及びヨコハケ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・金・酸	良好堅緻 橙(2.5Y R6/8)	外 1.9 内 2.2	1 T内堀(第 20図参照)。
24	"	復原底径18.0cm。外面タテハケ、内面横位 ナデの後、斜位ナデ。底面にヨシ状圧痕。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・石・輝・火・針	良好堅緻 橙(5Y R7/6)	外 1.9	"
25	"	復原底径20.0cm(15%存)。外面タテハケ、内 面横位ナデ。底面にワラ状圧痕。	大礫・粗砂を多量に含む チ・角・長・輝・針・酸	良好堅緻 橙(5Y R7/6)	外 1.6	"
26	"	復原底径20.0cm(20%存)。外面タテハケ、 内面横位ナデ。底面にヨシ状圧痕。	礫・粗砂を大量に含む。 チ・長・酸・角・バ・火	良好堅緻 橙(7.5Y R7/6)	外 1.6	"
27	"	26と同一個体。	礫・粗砂を大量に含む。 チ・長・酸・角・バ・火	良好堅緻 橙(7.5Y R7/6)	外 1.6	"
28	"	復原底径24.0cm(20%存)。外面タテハケ、 内面ナナメハケの後、斜位指ナデ。底面に ヨシ状圧痕。上端は凸帯に接するヨコナデ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・角・輝・酸・針	良好堅緻 橙(7.5Y R7/6)	外 1.7 内 2.2	"

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	粘土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10分)	備考
29	円筒地輪 底部	底部が著しく肥厚する。外面タテハケ、内面ナナメハケ。底面に木目圧痕及び羅圧痕。上端は凸帯に接するヨコナデ。	礫・粗砂を大量に含む。 バ・長・チ・金・輝	普通 赤(7.5 R4/6)	外 3.0 内 1.6	1 T 墳丘寄部 分出土。
30	円筒地輪 口縁部	口唇部を欠く。復原最大径40.0cm(20%存) 外面タテハケ、凸帯調整終了後のハケあり。 内面ナナメハケ、上方はヨコハケ。	礫・粗砂をやや多く含む 角・白・酸・砂・長・チ	良好堅緻(北沢あり) 赤(10 R4/8)	外 1.7	北拉張区(第 20図参照)。 内部に風化痕。
31	"	口唇部を欠く。復原最大径36.6cm(20%存) 外面タテハケ、内面ヨコハケ、輻広工具(4.5 cm/25本)使用。凸帯は断面台形。	礫・粗砂を多量に含む。 長・チ・酸・角・結	普通 橙(5 Y R6/6)	外 1.9	"
32	円筒地輪 底部	復原底径26.0cm(20%存)。幅7cmの粘土板 で基部を製作。外面タテハケ、上から下へ 重ねて2回調整。内面緩い斜位ナデ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・酸・角・針	良好堅緻 橙(7.5 Y R7/6)	外 1.9	北拉張区黒褐色 土層出土。 底面に羅圧痕。
33	"	復原底径21.0cm(20%存)。第1凸帯の高さ までは粘土板をまるめて成形。外面タテハ ケ、上から下へ2回重ねて調整。内面緩い ナナメハケの後、急な斜位ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・角・針	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/6)	外 1.8	1区マウンド 直上一括。 第2段に透孔 底面に羅圧痕。
34	朝顔形 口縁部	復原最大径41.6cm(20%存)。直線的に開く。 凸帯部で器形の変化はないが、ハケ調整の 方向が異なる。乾燥単位とわかる。外面下段 タテハケ。下段から上段にかけてナナメハ ケ。内面下段ヨコハケ、上段部分を接合後、 ナナメハケを重ねて施す。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火・角・針	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/6)	外 1.7	北拉張区(第 20図参照)。
35	円筒地輪 口縁部	口唇部はヨコナデによって端部と内面に凹 線を生じる。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	大礫・粗砂をやや多く含む 長・チ・酸・角・火・針	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/6)	外 1.7 内 1.9	"
36	"	口唇部はヨコナデによって外傾させ、内面 に段を生じる。外面ナナメハケ、内面緩い ナナメハケ。	礫・粗砂を多量に含む。 長・酸・チ・角・火・針	良好堅緻 橙(7.5 Y R7/6)	外 2.0 内 共	"
37	"	口唇部は強いヨコナデによって突る。外面 タテハケ、内面ヨコハケ。	礫・粗砂を多量に含む。 長・酸・チ・角・火・針	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/6)	外 1.6	"
38	"	口唇部内側に段を生じる。外面のヨコナデ 幅4.5cm。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	礫・粗砂を多量に含む。 長・チ・角・金・酸	良好堅緻 橙(5 Y R6/8)	外 1.8 内 1.3	"
39	"	口唇部はヨコナデによって短く外傾。内側 に段。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・酸・長・火	普通(やや軟質) 浅黄橙(7.5 Y R8/6)	外 2.1	"
40	"	39と同一個体。	チ・酸・長・雲・針	"	"	"
41	"	口唇部はヨコナデによって短く外傾。外面 にヨコナデ帯をもうけない。外面タテハケ、 内面ヨコハケ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・針	良好堅緻 橙(5 Y R6/6)	外 1.4 内 共	"
42	"	口唇部はヨコナデによって短く外傾。内側 に段。外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。	礫・粗砂をやや多く含む チ・長・火・酸	良好堅緻。に 黄橙(5 Y R6/4)	外 2.0 内 1.6	"
43	"	口唇部はヨコナデによって強く外傾。外面 ナナメハケ、内面緩い斜位指ナデ。	礫・粗砂を多量に含む。 長・角・火・輝・酸	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/6)	外 1.5	"
44	"	口唇部は強いヨコナデによって外方に屈曲。 先端は三角形に鋭く突る。外面タテハケ、 内面ナナメハケ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・酸・針	良好堅緻。に 黄橙(5 Y R7/4) 黄橙(2.5 Y R7/6)	外 1.4 内 共	2 T 暗灰褐色 土層出土。
45	"	口唇部を欠く。内面にX字状の窠印。外面 ナナメハケ、内面ヨコハケ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・角・火・酸・針	普通。に 黄橙(5 Y R7/4)	外 1.8 内 共	2 T 埋底部出 土。
46	"	内面に斜線状の窠印。外面タテハケ、内面 ヨコハケ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・角	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/6)	外 2.0 内 共	北拉張区(第 20図参照)。



番号	種 別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケム (cm/10分)	備 考
47	円筒埴輪 体 部	外面タテハケ、内面緩いナメハケ。凸帯 裏面の指頭圧痕は内面調整終了後。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・針	良好堅緻。にぶい橙 (5Y R7/4)	外 1.5 内 共	2 Tベルト中 2〜4層一括。
48	"	外面タテハケ、内面ナメハケの後、縦位 ナデ(不完全)。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・針	良好堅緻 橙(5Y R6/6)	外 1.6 内 共	2 T暗灰褐色 土層出土。
49	"	複製原部径20.0cm。形象埴輪上部の可能性 もある。外面タテハケ、内面は最終的に縦 位ナデ。部分による色調の差の原因は乾燥 単位を境に、外面上方の調整の際に、別種 粘土をハケ状工具で塗りつけたため。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火・針	良好堅緻。外面橙 (5Y R6/8)。凸帯以 下と内面は浅黄橙 (7.5Y R8/6)	外 1.5	北拉張区(第 20図参照)。
50	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケ後、 緩い斜位ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・角・金・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.5	"
51	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケ。円 形透孔は鋭利な刃物で一気切放し。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.7 内 2.0	北拉張区褐色 土層一括。
52	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケ。円 形透孔は刀子切放し。器壁が影む特徴あり。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・角・火・酸・針	良好堅緻。にぶい 橙(5Y R6/4)	外 2.1 内 1.6	北拉張区(第 20図参照)。
53	"	外面ナメハケ、内面は緩いナメハケ。 外面調整は凸帯貼付後に施すものがある。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・酸	良好堅緻 橙(2.5Y R6/8)	外 1.6	"
54	"	外面タテハケ、内面ナメハケの後、斜位 ナデ。下端は凸帯に接するヨコナデ。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・石・長・酸・角・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.5 内 1.5	"
55	"	外面タテハケ、内面ナメナデを2回重ね る。含有礫の最大はφ12mmのチャート。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・石・角・火・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.5	"
56	"	外面ナメハケ、内面は緩いナメハケ。 凸帯の上縁が突る。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・長・角・針	良好堅緻。にぶい 橙(5Y R6/4)	外 2.1	"
57	"	外面タテハケ、切り合いが激しい。内面は 緩いナメハケの後、斜位ナデ。内面調整 終了後に円形透孔を刀子切放し穿孔。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・角・酸・火・針	良好堅緻 浅黄橙(10Y R8/4) 昏橙(5Y R7/6)	外 2.0	"
58	"	外面タテハケ、内面ナメナデ。凸帯は3 本指で一度にナデ調整。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・角・火・針	良好堅緻 浅黄橙(7.5Y R8/4)	外 1.6	2 Tベルト中 2〜4層一括。
59	"	外面タテハケ、内面ナメハケの後、縦位 ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・角・酸・針	良好堅緻 橙(5Y R6/6)	外 2.0	"
60	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケ後、急 でストロークの長いナメハケを重ねる。 凸帯の断面は台形で、丹精な作り。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・角	良好堅緻 橙(5Y R6/8)	外 1.6 内 1.3	"
61	"	外面タテハケ、内面は細かい原体のナメ ハケの後、急なナメハケを重ねる。	礫・粗砂を大量に含む。 長・酸・チ・金	普通(やや軟質) 橙(5Y R7/6)	外 1.5	"
62	円筒埴輪 底 部	幅7cmの粘土板をまるめて基部を成形。外 面タテハケを上から下へ施す。内面は緩い 斜位ナデ後、急な斜位ナデを重ねる。外面 に亀裂補修の際の掌文、底面に露状圧痕。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・酸・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.5	"
63	"	粘土板をまるめて基部を成形。外面タテハ ケを2回重ねる。内面の最終調整斜位ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・角・火・針	良好堅緻 橙(7.5Y R7/6)	外 1.8	北拉張区褐色 土層一括。
64	"	粘土板をまるめて基部を成形。外面は上か ら下へタテハケ。内面の最終調整斜位ナデ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・酸・火・針	良好堅緻 赤褐(10R5/4)	外 1.7	2 T暗褐色土 層。
65	"	粘土板をまるめて基部を成形。外面タテハ ケ、内面は横位から斜位のナデ。底部調整 あり。倒立後、内外面の下端をヨコハケ ズリしてから、外面の最終的タテハケ調整。	砂礫の含有少ない。 バ・酸・雲・角	良好堅緻 浅黄橙(7.5Y R8/4) 器内灰(10Y 6/1)	外 1.8	2 T暗褐色土 層出土。 底面は平滑。

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
66	円筒埴輪 底部	粘土板をまるめて基部を成形。外面タテハケ、内面の最終調整斜位ナデ。底部が肥厚する。底面にヨシ状圧痕。	大礫・粗砂を大量に含む チ・頁・長・火・酸・角	普通。黄色味を帯びた乳白色。	外 1.9	2 T暗褐色土層出土。
67	"	粘土板をまるめて基部を成形。底部が肥厚する。外面タテハケ、内面緩いナメハケ、この部分から上は急なナメハケ加える。	砂粒の含有少ない。 バ・酸・角・火	良好堅緻 赤(10 R4/8)	外 1.7 内 1.3	2 Tベルト中 2 ~ 4層一括。
68	"	幅10cmの粘土板をまるめて基部を成形。凸帯の位置が乾燥単位と一致する。外面タテハケを上から下へ2回重ねる。内面上部は斜位、内面下部は横位のナデ。	大礫・粗砂を大量に含む 長・チ・火・酸・角・針	良好堅緻 橙(5 Y R6/6)	外 1.5	北区暗褐色土。
69	円筒埴輪 体部	外面は極めて粗い日のタテハケ、内面は緩いナメハケ。凸帯の断面台形で堅固な作り、ただし、下端は器壁に十分密着しない。	大礫・粗砂を多量に含む 角・バ・雲・酸・チ	良好堅緻 赤(10 R4/8)	外 3.2	北拡強区(第20図参照)。
70	"	外面タテハケ、内面緩いナメハケ。凸帯の断面台形。内面調整終了後に貼付。	礫を少量含む。 角・バ・酸・チ・雲	良好堅緻 赤(7.5 R4/8)光沢	外 1.8 内 1.3	"
71	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケの上に急なナメハケを重ねる。	砂粒を少量含む。 角・雲・バ・酸	良好堅緻 赤(10 R4/8)	外 1.7	"
72	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケの後、ヨコハケ。凸帯のヨコナデは一度で終了。	砂粒の含有少ない。 雲・金・角・バ・酸	良好堅緻 赤(10 R4/8)	外 1.7	"
73	"	外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯の断面は側面の凹む台形。一度にヨコナデ調整。	砂粒の含有少ない。 バ・角・雲・酸・チ	良好堅緻 赤(7.5 R4/8)	外 1.7 内 1.2	"
74	"	外面タテハケ、内面は傾斜の異なるナメハケを重ねて調整。凸帯の突出度強い。	砂粒の含有少ない。 バ・角・雲・金・火・長	良好堅緻 赤(10 R4/6)光沢	外 3.2	75と同一個体だが南拡出土。
75	"	極めて厚手の作りだが、復原胴部径は26.0cm(15%存)で、小型である。	"	"	"	74と同一個体北拡強区出土。
76	円筒埴輪 底部	粘土板をまるめて基部を成形。内面下端に作業台の木理圧痕あり。外面タテハケ、内面は日の粗いナメハケの後、斜位ナデ。	砂粒を少量含む。 白色バミス多量・角・酸	良好堅緻 赤(10 R4/8)	外 1.8	北拡強区(第20図参照)。
77	円筒埴輪 体部	外面タテハケ、内面ナメハケ。凸帯の断面台形で突出度強い。	細砂を少量含む。 角・雲・酸	良好堅緻 乳白色	内 1.2	第3テストビット出土。
78	朝顔形 口縁部	強く外反しながら開く。外面は上から下へタテハケ、内面ヨコハケ。口唇部を欠く。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・角・針	良好堅緻 橙(5 Y R7/6)	外 2.3 内 1.5	北拡強区(第20図参照)。
79	"	強く外反しながら開く。外面ナメハケ、内面ヨコハケ後、横位ナデ。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・酸・角・長・火	普通 橙(5 Y R7/6)	外 1.6	1区マウンド直上一一括。
80	朝顔形 肩部	頸部を内側に接合して、凸帯を補強帯としている。外面ヨコハケとナメハケを重ねて施す。肩部内面横位ナデ、頸部ヨコハケ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・石・長・角・酸・針	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/6)	外 1.5	北拡強区(第20図参照)。
81	"	外面は傾斜の異なるナメハケを重ねて施す。内面は緩い斜位ナデ。外面上端ヨコナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・角・針	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/6)	外 1.9	"
82	朝顔形 口縁部	口頸部は段をもたず直線的に開く。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・石・火・酸	普通 明赤褐(2.5 Y R5/6)	外 1.7 内 1.8	"
83	朝顔形 頸部	151と同一個体、肩部上端の内側に頸部を接合し、凸帯を補強帯としている。肩部外面ナメハケ。口縁部外面タテハケ。肩部内面は緩い斜位ナデ。頸部内面ヨコハケ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・酸・長・火・針	良好堅緻 浅黄橙(7.5 Y R8/4)	外 1.6	"
84	形象埴輪	円筒の上端に凸帯を巡らし、その上方に粘土板を2枚内傾させて接合。外面タテハケの後、横位ナデ。内面横位ナデ後、ヨコハケ。	礫・粗砂を多量に含む。 バ・長・角・酸	良好堅緻 橙(2.5 Y R6/8)		2 T暗褐色土層。

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10分)	備考
85	形象地輪	外面に垂直なへら描き沈線。下端は低い凸帯が付く。外面横位ナデ、内面ナメハケ。	砂粒の含有量は少ない。 パ・角・長・チ・酸・雲	良好極堅緻 赤橙(10R6/8)		北拉張区黒褐色土層一括。
86	円筒地輪 口縁部	口唇部が外傾し、内面に段をもつ。外面ナメハケ、内面ヨコハケ。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・石・酸・角・火・針	良好極堅緻。にぶい 橙(7.5Y R7/4)	外 2.5 内 2.1	南拉張区(第20図参照)。
87	"	口唇部は強いヨコナデによって内側の稜が尖る。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・石・長・角・酸・針	良好堅緻。にぶい 橙(5Y R7/4)	外 1.4	"
88	"	口唇部外面は強いヨコナデによって沈線を生じる。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	粗砂を多量に含む。 長・チ・酸・雲	普通(やや軟質) 橙(2.5Y R6/6)	外 2.2 内 1.8	
89	"	口唇部は強いヨコナデによって尖り、内側に段を生じる。外面タテハケ、内面は緩いナメハケ。	大礫・粗砂を多量に含む 石・チ・長・角・火・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.8 内 1.4	"
90	"	外面タテハケ、内面ヨコハケ。内面にX字状の窯印。最上段破片とみられる。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・酸・針	普通 橙(5Y R6/8)器肉は 淡黄(2.5Y 8/3)	外 2.0 内 1.6	北拉張区黒褐色土層一括。
91	"	外面タテハケ、内面ヨコハケ。内面にX字状の窯印。最上段破片とみられる。	大礫・粗砂を多量に含む チ・角・火・酸・白・針	良好極堅緻。にぶい 橙(5Y R6/4)	外 1.8	南拉張区(第20図参照)。
92	円筒地輪 体部	外面タテハケ、内面は緩いナメハケ。円形透孔は刀子穿孔後、指ナデ調整。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・酸・角・針	良好堅緻 橙(5Y R7/6)	外 2.1	"
93	"	外面タテハケ、内面は緩い斜位ナデ。円形透孔は刀子切放し。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・角・針	良好堅緻 橙(5Y R7/6)	外 1.6	"
94	"	外面タテハケ、内面ヨコハケ後、斜位ナデ。凸帯は断面台形で堅固な作り。	大礫・粗砂を多量に含む チ・火・長・礫・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.5	"
95	"	外面タテハケ、内面は斜位ナデ。下段に円形透孔。刀子切放し。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・酸・火・輝・針	良好堅緻。にぶい 橙(5Y R7/4)	外 1.9	
96	"	外面タテハケ、内面はナメハケの後、斜位ナデ。透孔は刀子穿孔後、指ナデ調整。上方に指をかけたくぼみがある。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火	良好極堅緻。にぶい 橙(5Y R7/4)	外 1.7	"
97	"	外面タテハケ、内面ナメハケ。透孔の部分に亀裂が入ったため指頭押圧で補修。	大礫・粗砂を大量に含む チ・酸・火・長・針	良好極堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.6	
98	"	外面タテハケ、内面の最終調整は斜位ナデ。円形透孔は刀子穿孔後、指ナデ調整。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・輝・火・針 最大径13mmチャート礫2	良好極堅緻 橙(7.5Y R7/6)	外 1.6	"
99	"	外面タテハケ、内面ナメハケの後、ヨコハケ。上段に大きな円形透孔。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・酸・火・針	普通(やや軟質) 淡黄橙(7.5Y R8/4)	外 1.7 内 2.5	"
100	"	外面タテハケ、内面はナメハケの後、斜位ナデ。円形透孔は小型か。刀子切放し。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・角・針	良好堅緻 橙(5Y R6/6)	外 1.4	"
101	"	外面タテハケ、内面はナメハケの後、急な斜位ナデ。透孔は透孔。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火	良好堅緻(半項忠實) 赤味を帯びた乳白色	外 1.7	
102	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケ。上段に円形透孔。刀子切放し。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・輝・酸・針	良好堅緻 橙(5Y R6/6)	外 2.0	南拉張区黒褐色土層一括。
103	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケ。工具幅は広く5.7cm。下段に円形透孔。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・角・金・針	良好極堅緻 明赤褐(2.5Y R5/6)	外 2.0	南拉張区(第20図参照)。
104	"	外面タテハケ、内面は緩いナメハケの後、縦位指ナデ。凸帯上にヨコナデ用の布紋。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火・角・針	良好堅緻 橙(5Y R6/6)	外 1.6 内 2.1	"
105	"	外面タテハケ、内面横位ナデ。凸帯は本体と別種の粘土を用いている。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・輝・針	良好堅緻。明赤褐 (2.5Y R5/6)凸帯部 淡黄橙(7.5Y R8/4)	外 1.9	"

番号	種 別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10秒)	備 考
106	円筒植輪 体 部	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯の断面M字形。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・角・酸・針	良好堅緻 橙(5Y R 6/6)	外 1.9 内 2.3	南拡張区(第 20図参照)。
107	"	外面タテハケ、内面は緩いナナメハケの後、急なナナメハケ。凸帯の断面台形。	大礫・粗砂やや多く含む 石・チ・酸・角・白	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/6)	外 1.5 内 1.7	"
108	"	外面タテハケ。内面は緩いナナメハケ。工具幅は広く、3.6cm以上。	大礫・細砂を多量に含む チ・長・火・角・金・針	良好堅緻 明赤褐(2.5Y R 5/6)	外 2.0 内 1.7	"
109	"	外面タテハケ、内面ヨコハケ。内面に粘土紐巻上げ痕が顕著に残る。	大礫・粗砂を多量に含む 長・チ・火・酸・角・針	普通 橙(5Y R 6/6)内面は 浅黄橙(10Y R 6/3)	外 1.5 内 共	"
110	"	外面タテハケ、内面は緩いナナメハケ。凸帯の貼付は内面調整の終了後。	大礫・粗砂を大量に含む チ・石・長・酸・火・針	良好堅緻。にぶい橙 (7.5Y R 7/4)	外 2.0 内 1.7	"
111	"	外面タテハケ、内面は緩いナナメハケの後、緩い斜位ナデ。凸帯の断面M字形。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・輝・針	良好堅緻。にぶい橙 (5Y R 6/4)	外 1.7	"
112	"	外面タテハケ、内面は斜位ナデ。下段に透孔。刀子穿孔後、指ナデ調整。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・酸・火・角・針	良好堅緻 明赤褐(2.5Y R 5/6)	外 1.6	"
113	"	外面タテハケ、内面ヨコハケ。下段に透孔。指をかけた痕あり。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・角・火・針	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/6)	外 1.6	"
114	"	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯の断面台形で堅固な作り。ヨコナデ調整も十分。	礫・粗砂を多量に含む。 長・チ・角・バ・火	良好堅緻 明赤褐(2.5Y R 5/8)	外 1.6 内 共	南拡張区灰茶 褐色土層。
115	"	外面タテハケ、内面ナナメハケ。比較的荷手の作り。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・酸・火・角・針	普通 橙(5Y R 7/6)	外 1.6	南拡張区(第 20図参照)。
116	"	外面タテハケ、内面はナナメハケの後、縦位ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・針	良好堅緻 橙(5Y R 6/6)	外 2.2 内 共	"
117	"	復原径13.0cmの細い円筒。器形形植輪の台部か。外面タテハケ。内面斜位ナデ。小型の円形透孔をもつ。刀子切返し。	砂礫の含有は少ない。 バ・酸・金・チ・角	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/8)	外 2.4	"
118	円筒植輪 或 部	粘土板をまるめて基部を成形。第一凸帯の高さと一致。外面は上から下へタテハケ。内面の最終調整は急な斜位ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・金・角 最大礫は約13mmチャート	良好堅緻 橙(2.5Y R 7/6)	外 1.6	"
119	"	外面タテハケ、内面はヨコハケの後、緩いナナメハケ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・酸・白・火	普通 橙(5Y R 7/6)	外 1.9 内 2.0	"
120	"	復原底径16.0cm(25%存)。粘土板をまるめて基部を成形。断面は末端の接合部。外面は右から左へ移動しながら、上から下へタテハケ。内面は横位ナデの後、斜位ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・酸・白・針	良好堅緻 橙(5Y R 6/6)	外 1.9	" 外面下端の一部に作業台の 木理圧痕残る。
121	"	幅8cmの粘土板をまるめて基部を成形。断面は末端の接合部。外面タテハケ。内面の最終調整は横位ナデ。	砂礫の含有は少ない。 バ・金・長・酸・角	普通(やや軟質) 橙(7.5Y R 7/6)	外 1.7	南拡張区一託、
122	"	底部が肥厚する。外面タテハケ、内面の最終調整は緩い斜位ナデ。底面にヨコ状圧痕。	大礫・粗砂を大量に含む 長・チ・酸・雲	不良(軟質)	外 1.4	南拡張区(第 20図参照)。
123	円筒植輪 体 部	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯裏側の指頭圧痕は内面調整後。上段に円形透孔。	砂礫の含有は少ない。 バ・酸・角・火・雲	良好堅緻 赤(10R 4/8)	外 1.5	"
124	"	外面タテハケ。内面はナナメハケの後、斜位ナデ(不完全)。凸帯は堅固な作り。	砂礫の含有は少ない。 バ・酸・雲・角・火	良好堅緻 赤(10R 4/8)	外 1.6 内 1.1	"
125	"	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯は側面の凹む台形状で突出度が強い。	砂礫の含有は少ない。 バ・酸・角・チ・長・針	普通(やや軟質)⑧ 明赤褐(2.5Y R 5/8) ⑨にぶい橙	外 1.4 内 1.2	"

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (mm/10株)	備考
126	円筒地輪 体部	外面タテハケ。原体の目の間隔が不ぞろい。 内面ナナメハケ。	砂礫の含有は少ない。 赤・角・チ・酸・雲・火	良好極堅緻 赤(10R4/8)	外 1.8 内 1.7	南庄張区(第 20図参照)。
127	"	外面タテハケ。上段には凸帯調整終了後の ハケメあり。内面は緩いナナメハケ。	大礫・粗砂や多く含む チ・長・火・輝・針	良好極堅緻 赤褐(2.5Y R4/6)	外 1.6 内 2.0	"
128	円筒地輪 口縁部	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。内面にX 字状の窩印。原体は棒状のものか。最上段 の破片とみられる。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・雲	良好堅緻(半項忠實) 浅黄橙(10Y R8/3) 灼灰黄(2.5Y7/2)	外 1.6 内 1.7	南庄張区暗褐 色土内塚一括。
129	"	口唇部を欠く。外面ナナメハケ、内面ヨコ ハケ。簾状文的に止めながら施す。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火・角・針	良好堅緻(半項忠實) 浅黄橙(7.5Y R8/4)	外 2.1 内 1.9	"
130	"	外面タテハケ。内面は縦位ナデの後、斜位 ナデ。外面は赤影。赤(7.5R4/6)	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火	良好堅緻 浅黄橙(10Y R8/4)	外 1.5	"
131	"	外面ナナメハケ、内面ヨコハケ。内面にX 字状の窩印。最上段の破片とみられる。内 面の色調異なる。灰黄褐(10Y R6/2)	大礫・粗砂を多量に含む 長・チ・火・酸	良好極堅緻(半項忠 實) 浅黄橙(10Y R8/3)	外 2.0 内 1.6	"
132	円筒地輪 体部	外面タテハケ。内面の最終調整は急な斜位 ナデ。下段に円形透孔。	大礫・粗砂を多量に含む 長・チ・酸・火・輝	良好極堅緻(半項忠 實) 淡黄(2.5Y8/3)	外 2.1	"
133	"	外面タテハケ。上段には凸帯調整後のハケ がある。内面ナナメハケ。上段に円形透孔。	礫・粗砂を多量に含む。 長・チ・火・酸・輝	良好堅緻(半項忠實) 浅黄橙(10Y R8/3)	外 1.6	"
134	"	外面タテハケ。上段に2次調整あり。内面 は緩いナナメハケの後、斜位ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・角・針	良好極堅緻(半項忠 實)灰黄(2.5Y7/2)	外 2.0	"
135	"	外面タテハケ、内面ヨコハケ。下段に円形 透孔。刀子穿孔後、指ナデ調整。内面の色 調異なる。灰黄褐(10Y R6/2)	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・石・酸・火・角	良好極堅緻(半項忠 實) 浅黄橙(10Y R8/3)	外 1.6 内 2.2	"
136	"	外面タテハケ。内面ナナメハケの後、縦位 ナデ。上段に円形透孔。内面の色調異なる。 灰褐(7.5Y R6/2)	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・酸 最大礫はφ14mmチャート	良好極堅緻(半項忠 實)。黄色味がかった 乳白色	外 1.8	"
137	円筒地輪 底部	外面タテハケ、内面の最終調整は斜位ナデ。 底面にヨシ状圧痕あり。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・火・酸・針	良好堅緻。黄色味を 帯びた乳白色	外 1.8	"
138	"	粘土板をまるめて基部を成形。器厚が均一 で、肥厚しない。外面タテハケ。内面は急 な斜位ナデ。底面に砂礫の上に置いた圧痕。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火・針	普通(やや軟質) 浅黄橙(7.5Y R8/4)	外 1.9	南庄張区一括。
139	"	粘土板をまるめて基部を成形。断面は末端 の接合部。外面は上から下へタテハケ。内 面は緩い斜位ナデ。底面にヨシ状圧痕多数。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸 最大礫はφ11mmチャート	良好堅緻。黄色味を 帯びた乳白色	外 2.2	南庄張区(第 20図参照)。
140	筒形 口縁部	強く外反しながら水平に開く。口唇部はヨ コナデによって平坦に調整。外面タテハケ、 内面ヨコハケ。	大礫・粗砂や多く含む チ・長・火・酸	良好堅緻 浅黄橙(10Y R8/3)	外 1.8 内 2.0	"
141	"	口唇部を欠く。上方で外反の度合いを強めて 開く。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・輝・酸・火・針	良好堅緻 橙(5Y R7/6)	外 1.9	"
142	"	口唇部はヨコナデによって端面が凹む。外 面ナナメハケ、内面ヨコハケ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・角・輝・火・針	良好極堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 2.0 内 共	"
143	"	薄手。口唇部は強いヨコナデによって外方 に拡張。外面タテハケ、内面ヨコハケ。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・酸・角・火	良好堅緻 橙(5Y R6/6)		南庄張区暗褐 色土内塚一括。
144	"	凸帯位置は乾燥単位と一致しない。外面ナ ナメハケ、内面は横位ヨコナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・角	普通 橙(5Y R6/6)	外 2.0	南庄張区(第 20図参照)。

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケメ (cm/10本)	備考
145	朝顔形 口縁部	乾燥単位で器形が変化する。ただし、凸帯は接合部に貼られていない。外面は急なナナメハケ。下段内面は左下りの緩いナナメハケ、上段部を接合後、全体にヨコハケを加え、さらに接合部をヨコナデする。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・酸・角・針	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/6)	外 1.6	南広張区(第20回参照)。
146	"	乾燥単位で端部を口唇部状にヨコナデ調整後、上段部を接合し、内外面の調整と、補強帯の役割をもつ凸帯の貼付を行う。下段部外面タテハケ、下段-上段外面ナナメハケ。内面は上下段を接合後、ナナメハケ。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・酸・角・長	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/6)	外 1.7	"
147	朝顔形 胴部	半球状を呈す。外面ナナメハケを重ねて調整。内面は横位ナデ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・角・針	良好堅緻 橙(5Y R 7/6)	外 1.6	"
148	"	屈曲部に断面台形の凸帯を巡らす。外面タテハケ、内面ナナメハケ及び横位ナデ。	礫・粗砂を大量に含む。 チ・長・火・酸・角	普通 橙(2.5Y R 7/8)	外 1.8	"
149	"	外面ナナメハケを重ねて調整。内面は緩い斜位ナデ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火・針	良好堅緻 橙(5Y R 7/6)	外 1.9	"
150	"	外面タテハケ後、ナナメハケを重ねる。内面は横位ナデ。内面に粘土紐接合痕。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・火・角	良好堅緻 浅黄橙(7.5Y R 8/4)	外 2.0	"
151	"	頸部でのくびれは弱い。頸部内面に口頸部を接合し、これを凸帯で補強。外面ヨコハケ及びナナメハケ。内面は緩い斜位ナデ。円筒部最上段に円形透孔。穿孔後、指ナデ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・酸・長・火・針	良好堅緻 浅黄橙(7.5Y R 8/4)	外 1.6	"
152	"	外面タテハケの後、ナナメハケを重ねる。内面は緩いナナメハケの後、横位ナデ。内面に粘土紐接合痕あり。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・火・酸・礫	良好堅緻。浅黄橙 (7.5Y R 8/3) 碧橙(5Y R 7/6)	外 1.9	"
153	円筒地輪 体部	外面タテハケ。内面は緩いナナメハケ。凸帯の断面M字形。ヨコナデ調整丁寧。	礫・粗砂を多量に含む。 長・チ・火・酸・針	良好堅緻 橙(5Y R 6/6)	外 2.1 内 1.8	4 T 溝内一括。
154	円筒地輪 底部	器厚が均一で肥厚しない。外面タテハケ。内面は斜位ユビナデ。	礫・粗砂をやや多く含む チ・長・角・針	良好堅緻。にぶい橙 (2.5Y R 6/4)	外 1.8	"
155	"	幅7cmの粘土板をまらめて基部を成形。外面は上から下へタテハケ。内面ヨコハケ及びヨコヘラナデ。底面に太い窪状圧痕。	大礫・粗砂をやや多く含む チ・長・火・針	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/6)	外 2.2	4 T 復原底径24.0 cm(15%存)。
156	円筒地輪 口縁部	厚手で、しっかりした作り。緩かに外反しながら開く。口唇部はヨコナデによって端側と内側に凹線を生じる。外面タテハケ。内面ヨコハケ。口縁部ヨコナデの幅5.6cm。	大礫・粗砂をやや多く含む チ・長・酸・角・礫	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/6)	外 1.6 内 1.8	3 T 暗茶褐色土層。外面にへら掃の縦線4本。腐印カ。
157	"	復原口径34.0cm(15%存)。直線的に開いた後、端部のみ、ヨコナデによって短く外傾させる。外面ナナメハケ。内面は緩いナナメハケ。	大礫・粗砂を多量に含む チ・火・酸・長・角・針 最大礫はφ13mmチャートメハケ。	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/6)	外 1.7 内 2.0	"
158	"	口唇部をヨコナデによって屈曲させ、外側の稜を拡張する特異な形態。外面タテハケ。内面ヨコハケ。	礫・粗砂をやや多く含む チ・長・火・角・酸・針	良好堅緻 橙(2.5Y R 6/6)	外 1.7 内 1.5	3 T 暗灰褐色土層+暗褐色土層。
159	円筒地輪 体部	凸帯は断面台形で丁寧な作り。離面に接合痕。外面タテハケ。内面は緩いナナメハケ。内面にX字状の窯印の一部残存。最上段。	大礫・粗砂を多量に含む 長・チ・石・酸・火・針	良好堅緻 橙(5Y R 7/6)	外 2.0	3 T (第20回参照)。
160	"	外面タテハケ。内面ナナメハケ。凸帯の断面M字形。調整は十分。下段に円形透孔。	大礫・粗砂を多量に含む チ・長・酸・針	良好堅緻 浅黄橙(7.5Y R 8/6)	外 1.8 内 共	"
161	"	外面タテハケ。内面は緩いナナメハケ。下段に円形透孔。内面灰色(5Y 6/1)	大礫・粗砂を多量に含む 長・チ・石・火・礫・針	良好堅緻(半項性質) にぶい橙(5Y R 6/3)	外 2.1 内 1.8	3 T 暗茶褐色土層。

番号	種別	形態・調整技法等の特徴	胎土の特徴	焼成・色調	ハケム (cm/10%)	備考
162	円筒地輪 体部	外面ナナメハケ、内面は緩いナナメハケ。 凸帯裏の指筒仕立は内面調整後に付く。	大礫・粗砂を大量に含む。 チ・長・角・輝・酸・火	良好堅緻 浅黄橙(7.5Y R8/6)	外 1.9 内 共	3 T (第20回 参照)。
163	"	復原胴部径35.0cm(20%存)。外面タテハケ。 ハケムは凸帯を境に不連続。内面は緩いナ ナメハケ。内面に粘土紐接合痕。	礫・粗砂を多量に含む。 チ・長・酸・火・輝・針	良好極堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 2.2 内 1.6	"
164	"	復原胴部径29.0cm。外面タテハケ、内面は へら状工具による斜位ナデ。	大礫・粗砂やや多く含む チ・長・石・火・角・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.6	3 T 暗茶褐色 土層。
165	円筒地輪 底部	基部上端で割離。外面タテハケ、内面は横 位ナデ。	大礫・粗砂を大量に含む チ・長・輝・角・火・針	良好堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.7	3 T (第20回 参照)。
166	朝顔形 口縁部	直線的に開く。外面ナナメハケ、内面は緩 いナナメハケ。凸帯は幅広で頑強な作り。	大礫・粗砂を多量に含む 長・角・火・酸	普通 橙(5Y R6/6)	外 1.8 内 1.5	3 T 暗茶褐色 土層。
167	朝顔形 胴部	外面はナナメハケとヨコハケを重ねて調整。 内面は横位ナデ。	大礫・粗砂を大量に含む 長・チ・酸・針	良好堅緻 浅黄橙(7.5Y R8/4)	外 1.6	"
168	円筒地輪	復原口径43.1cm(20%存)。幅2cmの粘土紐 を巻き上げて成形。寸胴な器形。口縁部は 緩やかに外反して開く。外面調整タテハケ。 口縁部内面は緩いナナメハケ。胴部内面は 急なナナメハケ調整。凸帯は幅が狭く、華 奢な作り。	礫と粗砂を大量に含む。 藍・長・チ・角・バ	良好堅緻 橙(5Y R7/6)内面は 灰褐(7.5Y R6/2)	外 1.6	昭和60年度試 掘1 Tの中場 寄り外堀出土。
169	"	4条凸帯5段構成。全高68.0cm。底径30.0 cm。口径39.0cm。幅2～3cmの粘土紐を巻 き上げて成形。口縁部はゆるやかに外反し て開く。外面調整タテハケ。内面は第2段 までタテあるいはナナメナデ。第3段以上 はナナメハケ。口縁部付近はヨコハケ。口 縁部はヨコナデされ、内外面及び端面は凹 面を呈する。凸帯は断面台形で蛇行しつ つナデつけられる。各段幅は第1・2・5段 は1対、第3・4段は狭い。第3・4段に は1対の透孔が相互に90°ずれて配される。	礫・粗砂をやや多く含む チ・長・火・石・酸・雲 白	橙(2.5Y R6/6)内面 は橙(5Y R6/6)	外 2.0 内 2.0	試掘2 Tの墳 丘寄り内堀出 土。
170	円筒地輪 口縁部	口唇部を欠く。上部で緩やかに外反しながら 開く。外面タテハケ。内面下部に急なナナ メハケ後、上部に緩いナナメハケ。	礫・粗砂をやや多く含む 角・チ・長・火・雲・白	良好極堅緻 赤(10R5/6)	外 1.8 内 共	試掘1 Tの中 場寄り外堀内 出土。
171	円筒地輪 体部	外面タテハケの上にナナメハケを重ねて調 整。内面タテハケ及びナナメハケ。	小礫を大量に含む。 チ・長・角	良好極堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.7 内 1.6	"
172	"	外面タテハケ。内面の下段をナナメハケの 後、斜位ナデを加え、上段を接合後、最終 調整としてタテハケを加える。	大礫・粗砂やや多く含む チ・長・雲・片・火・バ	良好極堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.7 内 1.7	"
173	"	外面タテハケ、内面タテハケの後、ナナメ ハケ。凸帯の断面は上段の高い台形。	小礫・粗砂を多量に含む 長・チ・酸・角・雲・針	普通(やや軟質) 橙(5Y R6/8)	外 1.6	"
174	"	外面タテハケ、内面ナナメハケ。凸帯の始 点と終点との間に段差を生じている。	小礫・粗砂を多量に含む 長・チ・火・酸・白	良好極堅緻(半項患 質)灰(5Y6/1)	外 1.6 内 1.9	"
175	"	外面タテハケ、内面タテハケの後、縦位ナ デ。凸帯の断面は台形。	小礫・粗砂やや多く含む チ・長・角・雲・片・酸	良好極堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.7	"
176	"	凸帯部を乾燥単位としている。外面のタテ ハケは凸帯を境に目が不連続。内面タテハ ケの後、ナナメハケ。凸帯の断面台形。	砂粒の含有が少ない。 バ・酸・角	良好極堅緻 橙(2.5Y R6/8)	外 1.6 内 1.6	"
177	"	外面タテハケ。内面の最終調整は急なナナ メハケ。凸帯は断面台形で調整も丁寧。	小礫・粗砂を多量に含む チ・長・角・雲・片・酸	良好極堅緻 明赤褐(2.5Y R5/6)	外 1.6 内 1.5	"
178	"	外面タテハケ。内面は急なナナメハケ後、 タテハケ。さらに最終調整として縦位ナデ。 円形透孔は刀子穿孔後、指ナデ調整。推定 直径5.5cm。凸帯部で器形の凹み特徴。	砂粒の含有は少ない。 バ・チ・酸・角・雲・火	良好極堅緻 橙(2.5Y R6/6)	外 1.7	"

### 三小 結

#### (一) 瓦塚古墳の墳丘と周堀について

##### 周堀と中堤

今回の調査で確認された、内堀の墳丘側立ち上がりは、検出された多くの部分で、周堀下端から一五<sup>世紀</sup>から三〇<sup>世紀</sup>上方で傾斜変換点を持ち、緩やかに立ち上がる。この緩傾斜面を覆う土の堆積状況や、傾斜変換点から墳丘盛土が確認されている墳丘遺存部にかけての緩傾斜面において、埴輪樹立痕跡が認められないこと。また、第2トレンチ周堀覆土第8層中位（周堀底面から一五<sup>世紀</sup>から二〇<sup>世紀</sup>の間）のテフラ分析によると、この層が浅間Bテフラ（一一〇八年降下と考えられている）の降下層順の可能性が極めて高い（自然科学分析編参照）というものであり、緩傾斜面を覆う、少なくとも第6層以上の層は一二世紀以後の堆積土の可能性が高い。これらのことから緩傾斜面は、築造当時のものではなく、後世開削される過程で形づけられたものと考えられる。

第1トレンチで検出された中堤の上面（黄褐色土）には、黄褐色土から旧表土下層への漸移層が認められた。築造当時の中堤の高さは不明であるが、過去の調査と今回の調査において、周堀内に中堤から流れ込んだと思われる埴輪片があるにもかかわらず、樹立痕跡が検出されないことを考えると中堤は、かなり削られているものと思われる。

以上のように周堀墳丘側立ち上がりから中堤を含む周堀部分の広い範囲で周堀底面から三〇<sup>世紀</sup>前後の高さまで、後世の削平あるいは削平されないま

でも、耕作等の人為的な土層の攪拌を受けていることが何われる。

##### 墳丘の復原

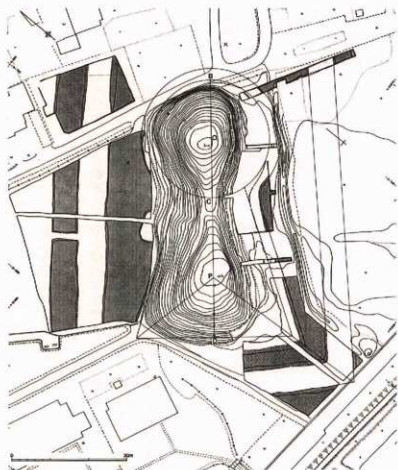
昭和六一年度の調査区では、各トレンチの墳丘部において旧表土と思われる黒褐色粘質土を確認した。同様の土層は、丸墓山古墳の墳丘確認調査の際にも検出されている。丸墓山古墳の場合この層中に様名二ツ岳降下火山灰（FA）が認められ、また層中から鬼高期の古段階の坏片が出土している。

瓦塚古墳で検出した黒褐色粘質土中には、肉眼ではFAと思われるものは認められなかったが、第2トレンチ墳丘部分で採取した土壤サンプルの重鉱物分析によると、この黒褐色粘質土層中には、FAが含まれている可能性が極めて高い（自然科学分析編参照）というものであった。黒褐色粘質土下には、灰褐色シルト層があり、さらにその下が黄褐色のローム層で、その各層序間には漸移的な移行を示すものであった。また黒褐色粘質土表層の珪藻分析（自然科学分析編参照）によると、「苔や岩石の表面、土壤表層部など、大気に常に触れる環境に生育する好気性種の珪藻が多産する」というものであった。これらのことから、黒褐色粘質土が古墳築造当時の表土（旧表土）であることは確実であると思われる。

瓦塚古墳の場合、この旧表土の標高は各トレンチとも、ほぼ一八・四層を測る。周辺は、果有地化以前は、畑地（一部陸田）として利用されていて地表の標高は一八層前後であった。人為的な改変は周堀中ばまで至っており、瓦塚古墳周辺は、旧表土の標高からすると八〇<sup>世紀</sup>から一層近く削られていることになる。この状況は、丸墓山古墳の場合も同様であり、埼玉古墳群周辺がかなり大規模に削られていることを示唆するものである。

瓦塚古墳の墳丘下に、旧表土が残されていることは、少なくとも古墳築造





第39図 瓦塚古墳想定復原図 (1/1,000)

にあたり、墳丘部分については、旧表土を削平する作業を行わず、墳丘規模の企画・設定は、旧地表面で行われたことを示すものである。従って、墳丘形態・規模の復原は、旧地表面のレベルで行うのが適当と思われる。墳丘復原に際し後円部中心点を周堀下端ラインから求めた。

昭和六一年度に確認された後円部周堀下端ラインは、良好な状況であったが、昭和五十七年度調査の際検出した周堀立ち上がりラインは北側が著しく乱れており、後世の改変である可能性が高い。従って、遺存状態が比較的良好

と思われる南側部分の下端ラインと、また第1トレンチ及び、くびれ部北拡張区のそれぞれの下端ラインから後円部中心点を設定した。

次に墳丘裾ラインの推定復原であるが、その基礎とした点を挙げると次の各点である。第一は、墳丘削平部の調査で墳丘下に旧表土が確認され、なおかつ墳丘の周辺は削平されていると考えられる点である。これは換言すれば、旧表土(旧表土表層標高一八・四m前後をさす)が検出される範囲は、墳丘下であった可能性が高いことである。ただ、かつて墳丘下であった部分でも、墳丘自体の開削が進んでいれば旧表土自体も削られていることが予想され、現在旧表土が残されている範囲が、そのまま墳丘の範囲であるとすることは難がある。また、墳丘裾部から旧表土をそのまま残したテラスがあり、現在までそのテラスが築造当時の状況のまま残されている場合は、墳丘裾ラインが旧表土検出範囲の内側となる可能性もあるが、調査の結果、周堀立ち上がり上部は、後世の改変により変形していると考えられるため、その可能性は窮めて低いものと思われる。従って旧表土が確認される範囲は、墳丘を反映しているものの、削平によりその範囲が狭まっていることも予想される。

第二は、周堀の立ち上がりであるが、第3トレンチ以外のトレンチ及び拡張区では、断面図で測ると仰角33度前後となり、トレンチが斜交しているのを考えると、周堀立ち上がりは仰角で約35度程度の傾斜を有するものである。

第三は、墳丘裾部のテラスであるが、周堀下端から約35度の角度で周堀が立ち上がるとすると、旧表土表面(一八・四m)に達する位置が各トレンチとも遺存していた旧表土の位置と著しく異なる。先述のように、旧表土の範囲がある程度墳丘裾ラインの位置を反映しているとすると不合理が生ずる。また昭和六三年度の瓦塚古墳前方部西側斜面のトレンチ調査で、墳丘中に墳

輪列が検出されており、推定される周堀の位置と墳輪列の位置関係から、瓦塚古墳の場合一層前後のテラスの存在が想定できる。以上の三点を基に墳丘裾ラインを復元すると次のようになる。

後円部側の周堀下端の標高は、前方部側よりやや低く、標高一七・〇から一七・二層を測る。平均的な下端標高を一七・〇五層とし、立ち上がり角35度、テラス幅を一層として単純に計算した、周堀下端から墳丘裾推定線までの水平距離は、 $\text{約}11 \cdot 93 \text{層}(8.4 \text{m} - 17.05 \text{m}) + \tan 35^\circ + 1.0 \text{m} = 2.93 \text{m}$ となる。作図により周堀下端での半径が一八・三層であるから、後円部墳丘裾部復元半径は、一五・三七層となる。

前方部についても同様の方法で推定される周堀下端からの水平距離は、約二・七九層である。(周堀下端の平均的標高が後円部と異なりやや高い。

$$(18.4 - 17.15) + \tan 35^\circ + 1.0 \text{m} = 2.79 \text{m})$$

以上の数値を図上に表わしたものが第39図である。前方部側線では、推定される墳丘裾ラインが旧表土の範囲と一致する。墳丘の東側についての、墳丘裾ラインの推定は以上である。他の部分については、前方部前面側では墳丘主軸線に対し、昭和五四年度調査区で検出された周堀延長線が直交せず、前方部前面が張り出す形となっている。このため、一見、栃木県摩利支天塚古墳等<sup>1)</sup>で可能性がいわれている「剣形前方後円墳」のような様相を呈しているが、前方部前面及び周堀西側コーナー部が未調査であるため、確認はできない。従って墳丘全体の形態の推定復元にあたって、前方部前面が直線となるものとして復元を行った。第39図に示した墳丘主軸線は、昭和五四年度に確認された中堤と、昭和六一年度第一トレンチで確認された中堤を結ぶ線および、昭和五七年度に検出した墳丘西側中堤のプランから主軸を求

めた。前方部側線は、墳丘が変形しており、測量図から求めるのは困難であるため、東側周堀コーナーから求め延長した。

作図は、墳丘形態の特徴を述べるため上田宏範氏の前方後円墳の型式学的研究方法<sup>2)</sup>を採用した。瓦塚古墳の場合、上田方式による三連比(後円部径を六とした場合の前方部後長と前方部前長の比、図ではBC:CP:PD、Pは仮想定点)は、6:4:3となる。また、前方部前面の東半の長さは、後円部径6に対し4となり、前方部側線は前方部隅角の二等分線と一致する。

瓦塚古墳は、前方後円墳としては、前方部後長が長く、特異な形態ともいえる。これは瓦塚古墳で突然採用された形態とは考えにくい。紙面の関係で詳述できないが、埼玉古墳群の他の前方後円墳について、瓦塚古墳同様、旧表土に着目したうえで、古墳の形態をみると、愛宕山古墳・中の山古墳が比較的瓦塚古墳に近い特徴を備えていると考えられる。二子山古墳は、6:3:3の比率を示し、稲荷山古墳はさらに前方部後長の短いものと考えられる。

埼玉古墳群は、現在までの調査で、稲荷山古墳など四基の古墳が、二重の長方形あるいは、台形の周堀となると推定され、瓦塚古墳についても、今回第一トレンチで確認された中堤の位置などから、周堀が台形をなすと思われる。また稲荷山古墳・二子山古墳では中堤に造り出しが存在する。これらのことと合わせ、墳丘の形態についても、埼玉古墳群が、古墳時代後期の関東の古墳群の中で、特徴ある展開をとげた古墳群であると考えられるのである。

(田中 正夫)

1 「史跡埼玉古墳群保存修理事業」に伴う確認調査

2 「摩利支天塚古墳」栃木県小山市教育委員会 一九八三

3 上田宏範『前方後円墳』第2版 一九七九

## (二) 瓦塚古墳の円筒埴輪について

瓦塚古墳の円筒埴輪は、胎土、焼成、色調及び器形、内外面の調整技法、凸帯の特徴等から、A<sub>1</sub>類、A<sub>2</sub>類、B類に分類される。

このうち、A<sub>1</sub>類は、考古学的観察では、独特の鮮やかな色調や、器肉の厚い製作、調整技法の特徴などから、鴻巣市生出塚埴輪窯の製品との類似が認められ、蛍光X線分析の結果でも、Feを極めて多量に含む特性から、生出塚埴輪窯産と推定された(自然科学分析編参照)。

一方、B類は蛍光X線分析では未知の窯で焼かれたものと推定されたが、白色針状物質を含んでおり、南比企丘陵産の可能性も考えられる。胎土の共通する形象埴輪B類の中には、五指を粘土紐で表現する中空製作の腕や下端に突起のつく美豆良があり、桜山埴輪窯の製品との共通性が見出せる。

今回、瓦塚古墳から出土した埴輪は、前回報告したものと基本的に一致している。その編年の位置は、凸帯の形状と透孔の形態などから、二子山古墳―瓦塚古墳―鉄砲山古墳という前回の見解(第四集『瓦塚古墳』参照)は、特に変更の必要はないものと思われる。また、築造年代は、今回の須恵器の検討からも、六世紀中葉とすることは差しつかえないといえよう。

しかし、今回、完形資料(169)が出土し、器形を含めた比較が可能になったので、あらためて、瓦塚古墳の埴輪について若干検討してみた。

169は口径三九<sup>1</sup>、底径三〇<sup>1</sup>、器高六八<sup>1</sup>を計る四条凸帯の大型品である。胎土はA<sub>1</sub>類に類似するが、相違点もあるため、A<sub>2</sub>類に分類した。

このA<sub>2</sub>類は全体の特徴では、愛宕山古墳のB類(第三集『愛宕山古墳』参照)に著しく類似している。それは、胎土、焼成、色調のほか、凸帯の形状

や内外面の調整技法にもおよんでいる。しかし、器形には、相違点もある。

一方は四条凸帯、他方は三条凸帯であり、直接的に比較はむずかしいが、瓦塚古墳A<sub>2</sub>類は底径が大きく、器形の変化が乏しいのに比べて、愛宕山古墳B類は底径が小さく、口縁部に向かって開く程度が大きい。また、第一凸帯が高い位置にあり、他の段に対して第一段が著しく長くなる傾向がみられる。

愛宕山古墳B類にみられるこのような現象は、六世紀に、関東地方の特に武蔵と上野の地域で製作された埴輪に顕著で、終末期になると、この傾向は一層進み、桶川市ひさご塚古墳例や鴻巣市生出塚埴輪窯例のように、第一凸帯が器高のほぼ半ばまで上る例がある。愛宕山古墳のB類には、すでに、その萌芽がみられることから、瓦塚古墳のA<sub>2</sub>類より後出する可能性がある。

一方、瓦塚古墳B類は外面のナナメハケ調整とX字状の窯印の付けられることが顕著な特徴である。同様な特徴をもつ稲荷山古墳、丸墓山古墳、二子山古墳、小円墳群の円筒埴輪の系譜を継ぐものと考えられるが、凸帯が低平なM字形を呈する点が後出的である。また、奥の山古墳の円筒埴輪B類の凸帯は、台形状で、調整も丁寧なので、瓦塚古墳B類に先行しよう。

しかし、奥の山古墳と瓦塚古墳の形象埴輪は製作技法が共通し、形態も類似するので、年代はそれほど隔たるものではないだろう。

以上、埴輪を中心とした検討からは、大型前方後円墳である二子山古墳の築造後、鉄砲山古墳が築造されるまでの間に三基の中型前方後円墳が連続的に築造された可能性がある。

このことは、埼玉政権を担った首長層の中に、地位の上で傍系ともいえる人々が、この時期に折出されたことを示している可能性がある。

(若松 良一)

### (三) 瓦塚古墳の須恵器について

瓦塚古墳の調査で出土した須恵器はわずかな量で、ほとんどが破片であるため、器形の全容を知り得るものはないが、部分的な特徴からいくつかの器種を比定することができる。今回報告の昭和六一年度調査では、甕・器台・横瓶？が出土し、昭和五四年年度の調査では、甕・器台・昭和五七年度の調査では、甕・高坏・器台・堤瓶が出土している。

甕口は小形と、やや大形の器形があり、両者とも口縁部は楕圓の波状文が施され、施文具の楕圓は幅の細かい作りで、振幅の浅い粗雑な波状文となっている。また刺突を施すものもある。外面には平行叩き目調整が行われている。

内面の整形は面の平滑なて具によって押さえている無文と、同心円の叩きによって調整を行っているものがある。これらの甕類は波状文の粗雑化や凸帯の鈍化など細部のつくりにおいて、簡略化の傾向が著しい。

しかし、多くの甕は、胎土は精選された緻密なもので、器面は丁寧な横ナデが行われ滑らかである。焼成も良く焼きしまり、断面はセピア色を呈し、焼成技術の高い、優れた製品が多く含まれている。

器台は台部の下半から底部へかけての破片と、脚部の小破片のみで、内面に叩き目を残し、丸味を持った体部が浅く立ち上がるものと思われる。脚部の破片には長方形のスカンが見られ、筒形の脚が裾に移行し、広がり始めるあたりであろう。器台は昭和五四・五七年の調査でも口縁部と脚部の破片が出土している。陶色では、器台は須恵器生産の開始からⅡ型式5段階まではほぼ生産が行われていた器種である。生産の終末段階では台部内面底部叩き目が残り、台部の外面に波状文が一〜二段にわたって施されている。脚部は筒

形脚部の下方が内湾しながら開くものが一般的であるといわれており、瓦塚古墳出土の須恵器もその様な特徴を備えている。

昭和五七年度の調査では堤瓶が出土している。堤瓶はMT15型式から出現する新しい器種である。図示された復原実測の器形には、把手が付されていないが、肩部の把手位置に相当する部分に、自然釉の剥落が観察されることから、おそらく把手が付されていたものと推察される。

また、No199はうず巻状のカキ目が施されその上から直線的なカキ目が走っている。文様や破片の丸味から、横瓶体部の端部かと推定される。横瓶は堤瓶と伴にMT15期から出現し、年代比定の指標となる器種とされており、古墳の築造時期の上限を求めることができよう。

こうした器種の消長の流れの中で、須恵器の年代的な位置付けを試みるならば、上限はMT15の時期として差しつかえないと思われるが、高坏や堤瓶などにやや新しい傾向がうかがえる所から、下限はT10型式とする間に求められると考えられる。器台など細部にわたる特徴が不明のため、おおよその年代観に頼らざるを得ないが、全体として六世紀中葉を中心とした時期の組成といえそうである。

(駒宮 史朗)

註1 「瓦塚古墳」埼玉縣教育委員会 昭和六一年

註2 中村 浩「和泉陶器の研究」柏書房 昭和五六年

註3 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 昭和五六年